

---

# 未来少年

オリマリオ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

未来少年

### 【Nコード】

N9895P

### 【作者名】

オリマリオ

### 【あらすじ】

世界には、どうしてもその素性を隠しておかなければならないことがある。その一例としてあげられるのが、超能力者と言われる者達である。

この世界において、その超能力者は、自分たちをサイコキネシスト、略称、サイコストと呼び合っている。

東暦二〇〇九年、炎天中学校の中に、その超能力者のうちの一人が、その素性を隠したままに生活していた。

名前は魂波闘こんぱとうちや也。彼は無口であり、他人との接触をあまり快くは

思っていなかった。それには、自らがサイコストであることを隠しているというのもあったが。

そして、平凡な日常は、少しずつ変わっていく……………。

別サイトにも投稿している本作を、完全編集し、

より読みやすく、より分かりやすく改良。オリジナルストーリーも追加し、

まだこの作品を知らない方も、ご存知の方も楽しめるようにしました。

## 1、超能力少年（前書き）

この小説には、戦闘等の際の出血など、グロテスクな表現が含まれています。

また、この小説はフィクションであり、登場する人物、地名、設定等は、

同一名であっても、一切関係はありませんのでご了承ください。

## 1、超能力少年

六時間目の英語が終わる。闘也は、ずっと動かしていたシャーペンを置いた。黒板に書かれたことを書き続けていたのだ。夏ももうすぐ終わるといふのに、暑い日が続いていた。闘也は、特に部活には所属していないため、すぐ帰ることができたし、居残る理由もなかった。家路に着こうと歩いていたら廊下で、通路をふさがれる。いじめを頻発している三人組。教師さえ手を焼いている、黒い三彗星だ。リーダーの黒田が話し始める。

「魂波。今日の午後9時、学校裏の倉庫に来い」

闘也は、黒田を睨む。隣にいた黒岸が、はっ。と笑った。

「何も言わない」来るってことだろ？」

黒谷が闘也の肩をぽん。と叩く。

「じゃ、待つてるぜ。魂波闘也君」

三人は笑いながら去っていった。

闘也は前から黒田たちが気に入らなかった。いじめと言っても、やることは小さい。鉛筆や消しゴム隠し、筆箱キャッチボール、場所や物の三人占め。小さいことだが、しつこい。闘也はしつこいのは嫌いだ。闘也は思った。

(今日あたり、やるか・・・)

闘也は、誰もいなくなった廊下を歩き始めた。

闘也は、超能力者だ。そして、そのような超能力者の彼らは、自らをサイコキネシスト、略してサイコストと呼んでいる。そして、殆どの一般人は、彼らの存在を知らない。なぜなら、サイコストは自ら名乗ったりはしないからだ。闘也は、もし名乗ったとしても、自らの持つ記憶メモリーの能力で、聞いた者の記憶を消すこともできる。

闘也は、今夜、超能力そのちからを使う気だった。そして、それを見た黒田たちの、超能力の記憶をきれいさっぱり消し取る。それが、闘也が、もし超能力を使った時に、取る作戦だった。

約束の午後九時ちょうどに闘也は倉庫についた。倉庫といっても、殺風景で、物も殆どなく、全くといっていいほど使われていない。三人がかりで、拷問状態にするには、うってつけの場所と時間だ。正面から入ったときは、黒田一人しかいない。多分、黒谷が、後ろの巨大なドアを閉め、力自慢の黒岸が襲い掛かってくると予想した。予想どおりに、ドアを閉められ、黒岸が殴りかかってきた。闘也はそれをなんなくかわす。久しぶりに超能力が使えることに、心馳せていた。三人が闘也の前にずらりと並んだ。

闘也の心臓が、魂が、ドクンと音をたてた。

黒田が正面から向かってくる。闘也は軽くかわす。そこに黒谷がパンチを出した。しかし、止められた。だが、止めたのは闘也でも、他の奴でもない。わずかに白くぼやけている。

「誰だ。お前は！」

「俺？ 俺は魂波闘也の魂だ」

手を振り払い、三人の後ろにすかさず回り込んだ。そして、魂は人差し指を立て、挑発する。黒田と黒岸は、そちらに向かうが、黒谷は魂が出ているなら本体は蛻もぬけの殻と見た。黒谷は、本体を襲う。しかし、そうではない。闘也は攻撃をかわし、足を払った。黒谷は転ぶ。闘也は追撃しなかった。隙をつかれ、腕を押さえられる。

「なにも喋らないから、助けを呼べないだろう」

しかし、見事に振り払い、またしても倒れこむ。

「べらべら喋りながらの喧嘩は趣味じゃない」

闘也は初めて口を開いた。

「てめえこの野郎！」

性懲りもなく殴りかかってくる。その腕を掴み、振り回し、投げる。それに気づいた闘也の魂は残りの二人を着陸地点に倒して逃げる。3人は見事に激突した。闘也と魂は、隣り合わせで、手をかざす。声が重なる。

「ファイアエンド」

火の玉が彼らを直撃する。熱いが、火は出ない。人間が熱いと感じる、摂氏五十度ほどの火球だ。

魂が闘也と重なり、一つになる。そして、腕を上げ、言った。

「デリットメモリー記憶消去」

そして、指を鳴らした。その瞬間、彼らの今の喧嘩の記憶が消された。

「プラスメモリー記憶加入」

そして、今度は彼らの日常の記憶が入れられる。そのまま闘也は帰った。

その3日後、なぜか学級新聞には闘也が本当は強いのではないかという記事が載っていた。黒い三彗星に喧嘩を売られたのに、無傷で登校した。という内容で、一面の殆どを取っていた。闘也は、関係ない。という態度で席に着いた。それとは裏腹に学級新聞の周りには人だかりができていた。休み時間ごとに、闘也の周りには人が集まったが、闘也は知らないふりをして1日を過ごした。次の日も人だかりは絶えなかったが、闘也はそのこと以外で胸騒ぎがした。

サイコストがこの学校に来る……。感覚的なものである。そのサイコストが味方となるのか、それとも敵になるのか、それは闘也すらも分からなかった。

## 2、相棒

サイコストの移動予測なら、サイコストの初心者でもできることだった。もつとも数が多かったり、対象が速すぎたりすれば、それはかないり厳しいものではあるが。闘也の予測から2日後、とうとうそいつはやってきた。偶然にもA組の教室にやってきた。男。ちゃんとサイコストのオーラも出ている。こいつで間違いない。闘也は確信した。

「波気乱州はきらんすと言います。これからよろしく！」

乱州はまるで新任の教師のように、気さくに喋った。そして、闘也の隣の席にゆっくりと腰掛けた。闘也はテレパシーで話しかけた。

(おまえ・・・サイコストか・・・)

(ああ。波気乱州だ)

(いや、それは分かってる)

(うおっ。いつから知ってた!?)

(今。堂々と自己紹介してたじゃないか)

あんな気さくな喋りだから、たぶんわざと、うおっ、なんて伝えただろう。闘也は、昼休みに乱州を屋上に誘った。朝から大変なほど皆に質問されていた。血液型、誕生日、趣味、どこから来たか。転校生というのは大変なものだ。屋上には二人以外には誰もいないもちろん、闘也にはそのほうがよかった。ずっとテレパシーというのは疲れるのだ。

「闘也、とりあえずお前の主体能力を言ってくれないか」

闘也は要求に応じ、話した。

超能力者相手ならば、気兼ねなく話すことはできた。昔からずっとそうだった。超能力者以外相手だと、壁が隔たってるような感覚になっソウルていた。

「魂ソウルと記憶メモリー。護身属性は火だ。乱州は？」

「俺は身体ボディーと伝心テレパシー。属性は雷」

「これは嫌なら答えなくてもいい。お前はなぜここに来た」

乱州はしばらく悩んでいるようで、黙り込んだ。

「具体的なものでいい。時間がないから」

「いや、今は言わないことにする」

「そうか……。家族は、お前がサイコストだつて知ってるのか？」

「ん？ああ。両親も兄貴も知ってる。ていうか全員サイコストだ」

「乱州つて兄貴いるんだ。意外だな。兄弟いても1番上かと思った」

「まあ、この外見だと『面倒見のいいお兄さん』つて見られてんのかな？」

「それ、なんかナルシストっぽい」

鬪也はくすりと笑った。

「俺はナルシストじゃなくてサイコストだよ」

乱州が笑いながらも、おどけた風に返す。鬪也は、それにまた笑みをこぼした。

「そうだな。そろそろ教室戻るか。時間がない」

「そーだな」

席に着いたところで、授業開始のチャイムが鳴った。授業後の休み時間も、乱州の周りの人だかりは絶えなかった。

そんな二人を尻目に、黒い三彗星は鬪也がなぜ無傷だったのか考えていた。確かに、鬪也に喧嘩を売ったのは、三人とも覚えている。三人で倉庫に集合したのも覚えてる。しかし、そこから先は、いつもの日常の記憶しか残つてなかったのだ。三人の意見にはいろいろあった。鬪也は逃げたとか、あんまり遅いから親に連れ戻されたとかの意見が出たが、一番通りそうなのは、実は鬪也は先に来ていて、トラップをしかけられていた。そして自分たちはそのトラップにはまっていたということになった。

帰る途中、乱州が唐突に聞いてきた。周りに人影はない。鬪也は普通に話した。

「教えてくれ」

「いきなり聞かれても困る。何を教えてほしいんだ」

「この町のサイコスト協会支部」

公にはむろんされていないが、各町ごとに、サイコスト支部というものが存在する。

サイコスト支部では、サポートや報告事項などを伝える役割を、サイコストに対して行っている。そのサポートがどれほど役に立っているかは、人それぞれではあるが、サイコストにとってはその身をのばすことのできる休息の場でもある。即ち、サイコストにとっては、不要のような気がしても、なんだかんだで必要不可欠な存在となっているのだ。

「そういえば、まだ定期報告に行っていないな」

「大丈夫かよ。もう九月の二十三だぞ」

「だから今ついでに行くんだよ」

「誰も今行くとは言っていない。で、どこなのか教えてくれ」

「案内するよ」

「結局行くんじゃないか」

「細かいことは気にするな」

「んな事言つて、ついでに定期報告行くつもりだろ」

「お前は行ったのかよ、乱州」

「引越してくる前にやった。今回は、この町のサイコストという証明書を発行しに行くんだよ」

しばらくの言い合いが続いたが、別に喧嘩の感覚は微塵にもない。そんなことを話しているうちに、地下へ続く階段にたどり着いた。

「この先がサイコスト協会炎天支部だ」

示された階段を、闘也を先頭に進んだ。その先は、きれいなフロアリングの部屋である。

「ようこそ、サイコスト協会炎天支部へ」

受付の女性が対応した。二人は、サイコスト証明書を出した。受付が、炎天支部所属のサイコストではないことを、乱州に確認した。

乱州は、証明書を発行しに面接室に入っていた。

「あの、定期報告ですが・・・」

「了解しました。それでは、あちらの報告室のほうへどうぞ」  
手招きされるままに、鬪也は報告室に入ってしまった。

報告室で話すのは他でもない、いつ超能力を使ったか、その後の体への負担はないか。目には見えないが、実は嘘発見器みたいなのがまとわりついている。つまり、嘘を言えばセンサーがことごとく反応し、真実を吐かされる。報告は、検査と、取調べを同時に行っているのだった。

実は鬪也は黒い三彗星との喧嘩のとき以外には使ってなかった。嘘発見器も反応しないようだ。というわけで、鬪也の報告は十分たらずで終わった。

待合室にて学校からの宿題をやっていたところに乱州が戻ってきた。あれから一時間は経っていた。

「遅かったな」

「証明書一枚にここまで時間がかかるとは」

「遅いから、宿題はもう終わった」

「おっ。俺のほうも終わってるか」

「見てもいいねーよ」

「やってくれてもいいじゃねーか」

「時間的な問題だ。勘弁してくれ」

そういつて鬪也は帰り支度を始めた。「分かりましたよ」と乱州が諦めた。

「宿題の答えの記憶をいれるか？」

「マジで！？入れてくれ」

「プラスメモリー 記憶加入・・・実行！」

指を鳴らすと乱州は騒ぎ出した。どうやら、記憶がこたえ入ったらしい。

「うおっ。苦手な社会の宿題の答えが脳に入ってくる！」

そのまま二人はそれぞれの家に帰ることにした。

次の日、鬪也は乱州とテレパシー会話で、世間話をしていると、黒い三彗星が二人によつてきた。黒田が喧嘩を売つてきた。

「おい鬪也。こないだの喧嘩でのお返しをする。お前のトラップのお返しだ。おっと、波気も来てくれても構わない。」  
黒岸が付け加える。

「今度はトラップにははまらない。黒い三彗星の名がすたる」  
最後に黒谷が、

「じゃあ、このあいだと同じ場所と時間で」

「次こそは、必ずお前をひねり潰し、二度と体に戻れないようにしてやる。覚えとけ！絶対<sup>絶対</sup>に逃げるなよ！」

そう言つて三人は去つていった。

(怖くね？あの・・黒いナントカつて)

(あんな奴らよりも、サイコストの方が勝っている)

(すげー自信だな)

そこから、また二人は世間話になつた。

午後八時三十分。鬪也は乱州と共に倉庫へと向かつていた。

「あんた、おふくろさんに黙つて出てきたんだろ」

「当たり前。何で分かつた？」

「もう秋なのに汗かいてたから。焦つてたんだろ」

「なんでも当てるな。でも大丈夫だ。兄貴が誤魔化してくれてる」

「おまえの兄貴は何使うんだ？」

「主に偽物フェイクだな。ほぼ毎日使つてる」

「そうか・・。分かつた」

倉庫前に来た。鬪也は腕時計を確認した。八時五十三分。間に合わせる必要はないが、時間には遅れなかつた。倉庫の戸を開け、黒い三彗星を見た。その後ろには、二年であろう者が、四人居る。

「行け！目標は魂波鬪也！もう一人はどうでもいい！」

後ろの四人が襲い掛かつた。なるほど、あの二年は、黒田たちにやられ、部下となつたわけか。どうりでしばらく喧嘩売られないと思

った。闘也はしゃがんだ。それと同時に、太く長い腕が、四人の顎付近にラリアットを喰らわせた。四人は一気に吹っ飛ばされた。

「ひっでえなあ。どうでもいいなんて……俺も混ぜてくれよ」

立ち上がった闘也と共に人差し指を使って挑発する。七人は二人の周りを取り囲んだ。闘也と乱州は背中合わせになった。闘也が話し始めた。

「七対二ってというのは卑怯だけど」

魂が困んでいた二人を蹴り飛ばした。

「七対三なら、対等だ」

闘也もつづいて二人を蹴飛ばす。残るは黒い三彗星。魂は闘也に戻る。二人は少し下がってから走る。二人の声が重なる。

「エレキファイアアアアアアアアックー!!」

闘也は炎のパンチ、乱州は雷のキックをお見舞いした。攻撃の後に見回した倉庫の中には、七人の不良たちが気絶していた。

「俺の記憶は消さないでくれよ」

「当たり前だ。力は抑えてある」

「それなら安心だな」

「デリートメモリー記憶消去」

指を鳴らして記憶を消し、そして

「プラスメモリー記憶加入………実行！」

「しっかりと入れるんだな」

「次の日に記憶がない。なんてことになったら面倒だ」

「それもそうか」

二人は彼らを残し、裏倉庫を後にした。

しかし、その喧嘩を見ていた者がいた。

### 3、自覚

闘也たちの喧嘩を見ていたやつを倉庫から出た二人は発見した。こいつは確か・・・同じクラスの遠藤えんどう的射まとい。小学から同じだったが、例によって話したことはない。クラスでも、人気がある。

(見ていたのは女子か。俺、話しくいんだけど)

(お前の達者口なら、いけるだろう)

乱州は的射に話しかけた。

「こんなとこでなにやってんだ？遠藤」

乱州は、闘也以外には苗字で名前を呼ぶ癖があった。

「お姉ちゃんの弓を探してたの」

「弓？ああ。お前アーチエリー部だったな」

彼女は、小一のころから射的屋にいけば必ず景品を取ってくるほどの射的センスがあり、炎天中でスカウトされ、すでに引退した三年のレベルまで来たらしい。

「お姉ちゃんが引退するときここに弓を残していったの。それを取りにいったら、二人とあともう一人がいなかった？ちょっと白くて闘也に似てる人。途中で居なくなっただけど」

もう1人は間違いなく闘也の魂だ。二人はテレパシーで話し合った。

(サイコスト以外の記憶を動かしたんだろ?)

(ああ。それなののに的射の記憶はそのままだ)

(だが、的射には、サイコストの自覚もないし、第一、サイコストにあるはずのオーラがない)

(主体能力もないし、サイコストとは言い切れないな)

(もしあるならあの射撃センスだな)

とにもかくにも、的射のことは後で調べることにした。

「まあ、いいや。とりあえず弓探し、遅くならないうちに見つけよう」

「もう十分遅い時間だけどね」

「だな。じゃあな、また明日」

「うん。闘也もまた明日」

闘也は軽く手を上げ応答した。しかし、やはり的射には何かあることは確信していた。最悪でも、あいつは普通の人間とは違う。それだけは確かだ。間違いない。明日からは、その確信を裏付ける証拠を探すことになる。それだけでも、結構な推理力が必要になる。さらに、その本人を説得する話術も必要だ。二人は、その方法について語りながら帰っていた。

一方の的射は不思議な感覚を覚えていた。あの白い人は、自分しか見えないような気さえした。それ以外にも、二人の思っていることが、なぜか、本当に僅かだが、聞こえてきたのだ。

サイコスト以外……記憶……のまま。自覚が……  
……ストのオーラが……イコストとは言い切れない。  
射撃……。

聞き取れた内容を整理する。私は、二人の言うサイコストなのだろうか。サイコストとはなんなのか。そして、二人はサイコストなのだろうか。広がる疑問の中、弓を見つけ、すぐに帰宅した。

次の日の放課後、炎中から十分程度の小さな森の中の穴にて、闘也と乱州は集まった。この穴はいつか必要になると思い、数年前に掘ったものだ。まさか、本当に使うことになるとは予想していなかった。この穴は、サイコスト関連で、協会に報告する必要のない、もしくは報告しないほうがいいことを話し合うために作ったのだ。闘也は脇にあるランプに火をつけながら進んだ。会議場は結構な広さがある。脇に大量に積んであった木切れをかき集め、2人の間に置いて火をつけた。

「寒くね？この穴」

「当たり前だ。地下なんだから」

「遠藤の自覚について考えるんだな」

「ああ。あいつのサイコストの能力が目覚めれば、逆にあいつのためになる。なにより仲間は多いほうがいい」

「まあ、そりゃそうだな」

乱州は近くにおいてあった木の椅子に座った。

「的射がサイコストだと説得するのは乱州に全部任せる」

「責任重大だな」

「あとは、どうやってその証拠をつかむかだな」

「闇雲なものじゃ何それ、って否定されるだけだしな」

「あいつの射撃センスなんかを活かさせるようにすれば……」

「

「サイコストじゃないやつをサイコストにするためには」

「超能力影響環境で、射的をさせればいいんだ!!」

闘也が珍しくでかい声を出した。乱州を少しながら驚いた。

サイコゾーンとは、強力なサイコキネシスの磁場が働いている場所のことで、サイコストはそこでなら、通常よりも高めの能力<sup>サイコ</sup>が出るのだ。

「けど、サイコゾーンはサイコスト協会の支部や本部にしかないんじゃないか」

その質問に、闘也は指を横にふって、答えた。

「乱州君。君が今いるのは、どんな場所だと思う？」

「まさか!ここって!」

「そう。これもサイコゾーンの一つなんだ。ガキのころからこの森の中にサイコゾーンがあると確信して、とうとう見つけて、地下を掘ったんだよ」

「まったくお前はすごいやつだぜ!」

「じゃ、ここにつれてくるまでの説得、よろしく」

「俺やるんかい!」

「勘弁してくれ。これで会議を終わる」

乱州は頭を下げた。おじぎのつもりである。二人は帰りながらもサイコゾーンに連れてくる日時と時間を話し合っていた。

会議から数日、乱州は、アーチェリー個人参加型大会というもので的射を呼び出すことに成功した。他のアーチェリー部員は参加しないように助かった。

闘也は一足先に地下に移動した。いつもよりも脳内が激しく刺激される。今日は、特に磁場の影響が強いことの証拠だった。思えば、かなり幼いころからこの感じが好きだった。闘也は幼いころからすでに魂の能力が強かったせいで、響くような刺激はいつも新鮮なものだった。しばらく時間が経ち、一人の男が降りてきた。乱州ではない。だが、顔つきは似ていた。なるほど、こいつが乱州の兄貴か。「闘也か……?」

「はい。魂波闘也です」

「俺の名前知ってるか？」

「いえ」

「そうか、俺は波気明文<sup>はきあきふみ</sup>。明るいに文で明文。よろしく」

「よろしくお願いします」

「おれはここで何をすればいいんだ？」

闘也は、ここでアーチェリーの大会として作り出すため、観客と、選手の偽者を作ってほしいと頼んだ。明文は快く承諾し、ものの五分で会場を作り出した。

懐かしいな。明文はそう思った。小さく、幼いころに見たマジックで、物を一気に作り出すのに憧れ、小学校時代をその修行に費やした。

その力が今、人を楽しませることではなく、人のためのことに使っている。作り出される光景があの時と同じで、懐かしかった。

乱州は弓を持った的射を連れてきた。大会らしい手続きを済ませて、順番を待っているようだ。そして、的射の順番となり、一本目の矢を放った。矢は一直線に的に飛んでいき、中心に突き刺さった。ああ。そういえば、的射が矢を撃つところは、初めて見たな。射

的でコルク栓を撃っているのは見たことがあったが、矢を撃っているのは初めてだ。的射は、二本目の矢を構えた。

的射はなぜかいつも以上に感覚が鋭くなっているような気がしていた。調子がいいのとは違う。どこかが刺激されて、それに合わせるかのように矢が、弓が、腕が、体が反応し、矢が飛んでいく。んなのだらう、この感覚は。

偽の観客の後ろで闘也は特殊カメラを持っていた。このカメラは、サイコストのオーラが見えにくい者に向かって、タイミングを合わせてシャッターを押す必要があった。1本目も2本目も撮れた。3本目もオーラがバッチリ写っていた。見れば、撃つたびにオーラが拡大し、力が大きくなっている。この写真を見せれば、納得がないことはまずないだろう。全て撃ち終わったところでいきなり沈みかえった。闘也と乱州は的射の前に出た。いよいよ、的射がサイコストになる瞬間だった。

乱州が闘也の一步前にでて話し始めた。

「遠藤。お前、今回の大会で、いつもよりかなり調子がよかった……いや、どこか感覚が違っていただろう」

的射はドキツとした。もしかしたら、そのことを告げるために、この大会に呼び出したのだろうか。感覚は違った。それだけは確信が持てた。だが、ここがどうして大会の会場なのかは、いまだに疑問があった。確かに風がないところは、選手には有利な状況だ。だが、なぜこのくらい暗いところでやるのかが不思議だった。

「まあ………。確かに、どこか刺激されて、それに合わせて調子も上がっていくような感じだった」

「そうか………。じゃあ単刀直入に言わせてもらおう」

なにを？と言いかけた口を閉じた。なんのことなのかは想像もできない。だが、黙って聞いたほうがいいと思った。

「お前は超能力者だ」

えっ。と声もれた。自分ではえっ、と言ったつもりだったが、はっ？と言った気もした。

「超能・・・力者？私、そういうの信じない系だけど・・・」

「この写真を見る」

闘也が口を開いた。乱州より前に出て、写真を見せた。そこに写っていたのは、まぎれもなく、自分の姿だった。感覚が刺激され、体全部が反応した、あの瞬間。

「この写真が、お前の力を写した。これが、お前が・・・的射が超能力者・・・またの名をサイコネシストである、確たる証拠だ」

自分から、力が満ち溢れている写真。それを見せ付けられては、なにも言い返せはしない。言い返す気さえなかった。

「自分がサイコストだということ。それを分かれ、自覚しろ、的射！」

急に頭にさまざまサイコストとしてのが入ってくる。すさまじいものだったが、すぐに消えて、一気に疲れた気がした。

「どうやら、すべてを悟れたようだな。遠藤」

「うん・・・。。私はただの人間じゃあないんだ・・・」  
「やっ」と終わった感じだった。しかし、これが始まりだということは、だれにもわからなかった。

闘也は的射の様子を見て、若干の驚きを隠せずにはいられなかった。乱州はあまり知らないかもしれないが、一般人がいきなり超能力者として自覚するときに、その脳の圧迫に、ほとんどダメージを受けずに立っていられるものは殆どいない。大抵の者は、もだえ苦しむか、意識を失うかのどちらかである。

的射は、その瞬間、言葉数こそ少なくなったものの、その忍耐力の強さには、恐れ入った。もしかしたら、脳への圧迫が少なかったかもしれない。それも、この磁場の影響かもしれない。的射が競技

を行っている際の感覚に、体や脳が慣らされて、自覚した際の脳への負担を軽くしたと考えるのが一番いいだろう。

どうであれ、射はサイコストとしての自覚を持った。超能力者として、これからは生きることになるだろう。と、闘也は一人、納得した。

彼らが終わりと感じたころ、炎中の生徒が行方不明という事件がおきた。それは、これから起きる戦乱の始まりにしかすぎないことなのだった。

#### 4、非現実的（前書き）

的射を超能力者<sup>サイコスト</sup>として目覚めさせたころ、

炎天中の生徒が行方不明になるといふ事件が多発していた。

闘也たちはそれを調べるため、行動を開始した……。。

#### 4、非現実的

炎天町は事件がおきたことは一、二回。それでも、水と間違えて油を飲んだおじいちゃんの事件とか、飼い犬の首輪がなくなつたなどの小さな事件（油を飲んだのは深刻な問題かもしれないが）しか起こらなかつた。

そんな平和な町の、平和、（かどうかは微妙だが）な中学校の生徒が行方不明。まさに一大事だつた。久々の事件にわくわくしているものもいたが、ほとんどは事件に怯えていた。警察も捜索人数が足りないとかで動かせないらしい。

闘也たちは犯人の進路が予測できていた。つまりはサイコストの可能性が極めて高かつた。犯人は山奥に逃げ込んでいた。三人は犯人を見つけた。山中に溶け込みやすい服装をしている。

「行くぞ！乱州」

「了解だぜ、闘也！」

敵は五人。いずれも人と言っても間違いなく、超能力者であることも決定していた。言葉を話すことぐらいはできそうだ。乱州が天高く飛び上がる。乱州が右腕を引き、それを犯人に向かって突き伸ばす。

「ロングアーム長距離腕打！！」

乱州の拳が二人つぶした。

「ソウルファイヤアツ！」

闘也も一人つぶす。残りの二人はひつとらえて、事情聴取だつた。二人には手を上げさせた。

「変な動きしたら、四肢がなくなると思えよ」

「コエーな」

「このくらの警告はしたほうがいい」

「まあ、納得」

さっそく闘也は事情聴取を始めた。

「最初の質問。おまえたちはサイコストか？」

「お、おお、俺たちは誇り高きエスパーだよ」

乱州は吹き出した。このエスパーとかいう敵の反応が面白いらしい。

「こいつら、めっちゃビビッてるな」

そんな乱州に構わず、鬪也は質問を続ける。

「監視役的なエスパーもいるのか？」

「こ、この目の中の内臓カメラが本部に映像を送ってるんだヨ」  
「なるほど」

乱州が二人に目潰しを喰らわせた。

「ギヤアア」

「ウギユツ」

「最後の質問。エスパーの中心人物と、エスパーの弱点を言え。それをいっただら逃がす」

「我々のボスは、ソウリール・エスパー様だよ！！」

「弱点は？」

「エスパーに弱点はないヨ」

その一言を聞いた鬪也は二人を炎で焼き尽くした。

鬪也が焼き払ったのは、もちろん、弱点がないなどかつこつけられたからだ。しかし、鬪也はそれ以外にも、気にかかったことがあった。

ソウリール・エスパー。

その名前を聞いたとき、背中に悪寒が走った。乱州や的射にはたいた名前ではない。だが、鬪也にとっては、かなりの重要人物だった。

彼は、鬪也の父親だった。三つだか四つだかに、鬪也に魂<sup>ソウル</sup>の能力を教え、鬪也がそれを覚えたころに、家族にこういった。

「私は、このようなすばらしい能力の数々をもっとすばらしいことに使いたい。世界中にこのすばらしい能力を広め、世界をすばらし

いサイコストの惑星と呼ばれるようなものにした」

今思えば、火星人とかが存在しない限り、誰もそんなこと言わないと思う。

「すばらしい能力はすばらしい人を作り、すばらしい人はすばらしい地球を作る。すばらしい地球は、全宇宙をすばらしいものとしてくれるはずだ。おまえたち、このすばらしい計画に協力してくれないか」

そのとき、母はとうとうキレた。キレてはいたが、半分呆れていた。父の発言は別の言い方をすれば、世界を私のものにした。と言っているようなものだ。無謀なことだ。世界を自分一人のものにした。と思えば、少なくともだれかが止めるだろう。だが、父は承知で発言したらしい。

「あなたがそんな人だとは思いませんでしたよ。もういいです。あなたとは離婚します」

父は、反論もできずに、離婚の二文字を突きつけられた。しかし、「分かった。私は必ずすばらしい世界を作り上げてみせる。私は、ソウリール・エスパールとなり、サイコストではなく、エスパールという種族を作り上げる！必ず、サイコストを滅ぼし、エスパールをこの地球上に立たせてやる！」

結局、十二回も「すばらしい」をいって父は去って行ってしまった。

そして、とうとうこんな手段にでたのか。日本各地では誘拐事件や、行方不明者が多い。海外のほうでも、今でさえ紛争しているところなどでの拉致などのうち、少なくとも、未解決事件はソウリール、もしくはその部下によるものだろう。そして部下を増やしている、最後には軍を結成し、日本を制圧し、最後には世界中を支配するつもりなのだろう。

闘也は、誘拐されかけた少年に向かって、  
「デリットメモリー記憶消去」

そうだった。そして、記憶があいまいなうちにふもとに下ろして逃

げ  
た。

## 5、疾風

よく晴れた日だ。大抵の人はその澄み切った青空ですがすがしい気分になるだろう。乱州や的射もそうだった。そんな中、闘也に残っていたのはソウリールのことだった。いままでの仲間、もしくは信頼していた人が裏切り、敵となる。よく、マンガとかアニメとかでもそんな展開があったりするときがある。だが、それがいま自分自身に降りかかっている。父を尊敬していた。いい親だとも思っていたが、それは昔の話。今は、サイコストである闘也たちの敵だ。戦争をしかければ、世界中を敵にまわすはずだ。例えそうなってしまうっても、父を止めることができるのは闘也しかない。

そうだ。俺しか止められない。俺しか倒せない。

そんな決意のなか、学校に着いた。乱州も的射も闘也とは同じくラスだった。無論、そのほうがいい。テレパシーを無駄に使って体力を消耗したくはない。教室に入ると、乱州がようつ、と手を上げてきた。闘也も手を上げ、応答する。教室を見回す。いつもと同じ、何気ない風景。オーラをまとっている。乱州と的射以外はいつもと変わらないはずだ。はずだった。

しかし、二人以外にもオーラをまとっているやつがいる。闘也ではない。昨日かえるまでは、僅かとしてオーラが見えなかったやつにオーラがでている。あいつ、誰だったっけ？髪型からして、確か、頭は闘也より悪かった気がする。でも、闘也より、足は速かった気がする。

曖昧な推理のまま、席に座る。隣の席の乱州に話しかける。もちろん、テレパシーで。

(なあ……あいつ……)

少しばかりの間が空く。

(誰だっけ?)

(うわあ、お前がボケるなんて初めてだなあ)

どうやら、オーラがでてるな、とか、あいつ、サイコストじゃなかったよな、とか言ってくると思ったのだろう。

（俺はマジで言ってるんだよ。誰だったか教えろ）

（命令口調か、なんかからしくないな）

（そうか？ていうか早く教えろ）

（あいつの名前は風見秋人<sup>かざみしゅうと</sup>。頭悪くて足速い。頭隠して尻隠さずにかけたらしいな。その異名通り、成績は下から数えたほうが早いし、全国レベルの速さで、全県大会を優勝した。あ、あいつ陸上部だから）

（さすが、ストーカー並の情報力だな）

（それ、褒めてんの？けなしてんの？）

（褒めてる）

そこに的射も加わってきたが、すぐにチャイムがなった。

その日の昼休み、鬪也、乱州、的射の三人は屋上に出た。的射は付き合っていると誤解されるのがいやらしく、五分遅れて屋上に来た。別に鬪也や乱州は恋愛感情があるわけではないのだが。

「やっぱり能力ならあのスピードだよな」

最初にそう切り出したのは乱州だった。

「だな。可能性としてはそれが1番考えられる。けど、問題はいつ、どのようにしてサイコストとして目覚めたかだな。俺たちのテレパシーには入ってこなかったけど、聞いてた確率は十分にありそうだな」

「ねえ」

的射が話し始めた。

「鬪也はいつつもそうやって推理してるの？」

「まあ。だいたいくだらないことだけど」

「例えば？」

「そうだな。三階のガラスが割れたときに内側に野球ボールが落ちてたときとか、校長のヅラが消えたときとか、かな」

「ふーん」

それだけで、どう推理したのか、真相はどうだったとかは聞いてこなかった。ちょっと拍子抜けた。乱州が話し始める。

「話を戻そうぜ、おふたりさん」

江戸っ子風に言ってきたが、そのリズムを完全無視して話を進めた。「いつ能力を授かったのか分からないからな。慎重にやったほうがいいだろうな」

そのとき、屋上のドアが開いた。開けたというよりは、蹴破ったというほうが近いだろう。一人の少年が飛び込んできた。速い。進行上にいた、鬪也と乱州はかわした。その少年は勢いのあまり手すりにつかまり、反動のように飛び出す。体が地面から離れ、宙に浮く。そしてそのまま手が手すりから離れる。

危ない。このままだと落ちる。そして、そのとき屋上にいた俺たちが犯人っぽくみられてしまう。鬪也はそんな推理を頭のなかで、コンマ数秒で浮かばせた。しかし、今はそれどころではない。鬪也は叫んだ。

「乱州！手え伸ばせ！」

乱州が動き出す前に、少年は止まっていた。宙に浮いている。そして、その背中には……翼……まさか……

「こいつが……？」

「お前……」

鬪也は問いかけた。本人の話が聞ければそれこそ話は早い。聞けるときに聞いておいたほうがよいのだ。

「風見……秋人……」

乱州は背中に白い翼を生やした少年の名をつぶやいた。

サイコストのオーラ。髪型。そして先ほどのあのスピードからみて、こいつが秋人だと断定できるだろう。乱州が本人かどうか確かめた。「風見、お前さ……」

どうした。なぜ言葉を続けない、乱州。こいつが何かを言うのをためらうのは、初めて見た。大丈夫だ。乱州。例えサイコストじゃなくても、例えエスパードだったとしても、俺が記憶を消しておく。何

も心配はいらない。だが、乱州はその後の言葉がでない。闘也はとうとう痺れを切らした。お前はサイコストか？といいかけた。だが、的射にテレパシーで止められた。

(乱州がためらっている理由、分かる？)

(・・・分からない)

そうだ。俺にはわからないことが多すぎる。ほぼ毎日乱州と一緒にいた。なのに、俺が分かる乱州は、ほんとに一握りなのだ。親しい人間ほど分からないことが多かったりする。灯台下暗しとはこのことか。

(分からないけど、あいつの気持ちなら、受け止める)

(それよ)

(え？)

(乱州は闘也にちゃんと受け止めてもらえるか心配なのよ)

(けど、今あいつの言葉を受け止めるべき相手は俺じゃない。秋人だ)

そのテレパシーが伝わったらしい。乱州がずっと閉じていた口を開いた。

「お前はサイコストか？」

乱州はようやく、話を持っていった。

「あつたりまえじゃん」

質問もあつさりしていれば答えもあつさりしていた。

「こんな能力がサイコスト以外でなんだってんだよ」

「天性の授かりもの？」

「それを授かったものこそサイコストだろ？」

「え、まあそうだな」

「サイコスト以外にこの能力が使えるものがあると思うか？」

「いる」

闘也はいつになくはつきりとした声で断定した。サイコストの対となる種族、エスパ！。その頂点に君臨するソウリール・エスパ！。倒さなければならぬ敵。止めなければいけない父親。

「エスパーね……」

的射も言った。少なくともこの三人は知っている。協会が知っているとは限らない。だが、いずれ戦わなければならないのは、事実だ。「話を戻す。お前はどこで、どうやってサイコストになったんだ？」  
一番聞くべきことだ。こいつの全てが分かる。特別な人間の1人となったこいつのことが分かる。闘也は僅かに息を呑んだ。

乱州は秋人にサイコストか？と聞くのをためらっていた。仲間は多いほうが良い。いつだか闘也がそういった。確か、的射を目覚めさせるあたりだったかな。これからエスパーとは戦うことになる。無論、協会も手を出さないわけではない。仲間が多ければ、戦うときに、戦略の幅が広がったり、なるべく早く敵を殲滅させられる。だが、仲間が多くなりすぎれば、やがて差別が起きる。学校の中の、クラスのなかと同じだ。結構な数の人間が同じ部屋の中で生活したとき、必ず人は仲間を作り、その者、もしくはその者達と行動を共にする。例えば、黒い三彗星とか。逆に言えば、そうじゃない人も出てくる。集団に溶け込めない人。仲間はすれにされる人。仲間が増えたとき、闘也は俺のことを構ってくれるだろうか。疑ってるわけでもない。心配だった。だが、闘也の（テレパシーの）言葉を聞いて我に返った。そうだ。俺はあいつの相棒だ。つまりは、あいつは俺の相棒だ。相棒を信じなければ、自分も信じてもらえない。それだけは分かった。闘也は人の話を聞いている。ならば俺も、しっかり聞いておかないと、コメントもなにも、できやしないな。

「別のサイコストから？」

的射は聞き返した。どうやら秋人は、別のサイコストから、サイコストになるためのコツを教えてもらったらしい。

「そのサイコストって、誰なの？」

「うん。そりゃあまあきれいな子だった」

「ってことは女だったのか？」

闘也は確認した。秋人はうなずいた。

「名前は聞いているのか？」

「もしかしてその子に気があるのか？闘也は？」

「ないよ。そんなの。とりあえず教える。聞いたんだろ」

「俺は聞いたなんていつてないけど。まあ、向こうが話したんだけど」

「で、名前は？」

ちよつとイライラしてきた。焦らしたり、はぐらかしたりされるのは嫌いだ。やるのもやられるのも嫌いだ。単刀直入に一言で。闘也はいつもそうだった。

「その子の名前は、白鐘由利しろかね ゆり。なんでも、この辺では珍しい、属性タイプの能力を持つてるんだった」

属性の能力は確か、普通サイコストが持っている護身属性。闘也は火。乱州は雷。射は水。他のものもあわせると、火・水・雷・風・土。全部で五種類。属性タイプの能力を持つという事は、これら全ての属性の技を自由に使えるということだ。闘也の記憶の能力よりも高度なものだ。いったい、その女はいったいなんなんだ。第一、なぜ秋人に、そしてなぜ高速スピードと飛躍フライの能力を授けたのか。

「そっいや、そいつって、いくつぐらいだった？」

「お。もしかして乱州も気があるのか？」

「ないよ。見た目でだいたいいいから」

「俺らと同年代だったけど、この学校にはいな……」

チャームがちよつどなった。その先の内容はだいたい読めてるが。

四人は大急ぎで教室に戻った。

## 6、我家

あれから一ヶ月ほど経った。度々あらわれるエスパーを人目につかめ場所、闘也、乱州、的射、秋人の四人は戦い続けた。無意味な戦闘かもしれない。ゲームみたいに、ちょっと強そうなのが出てきたわけでもない。大魔王から挑戦状がきたわけでもない（実際、大魔王はいないが）。

しかし、昨日、定期報告に行つたとき、協会からある報告がされた。

「エスパーという謎の軍団が三日後に戦いをしかけると報告がありました。突然の奇襲にも対応できるようにしてください」

三日後、これは昨日の話だから、あと二日で行くことになる。そうなれば、サイコストではないものを巻き込むことになるのは必至だ。敵の奇襲となれば、日本の自衛隊も動くはずだ。だが、自衛隊の歩兵とか戦車でも、エスパーには勝てない。それなりの力を持っているエスパー相手ならなおさらだ。たぶん主力は協会の募集したサイコスト兵だろう。並の実力や能力では勝てない。一等兵や二等兵くらいなら、まだなんとかなるだろう。だが、敵の幹部とか攻撃隊長とかが相手なら、間違いなく負ける。関係のない人や町を巻き込んで、日本は壊滅状態になるだろう。

それを止められるのは……。俺たちだけだろう。いままで戦ってきた敵の武器は、一撃で相手を殺せるほどの殺傷能力はない。くらったことはないが、たぶんそうだろう。と、学校の教室の中の椅子に座って考えていた。窓の外を見た。もうすぐここは、灼熱の業火にさらされるのか。

授業が終わり、家に戻った。秋人は校門を出たところで道が違った。しばらく行くと、乱州とも別れる。的射といると、世間話をしながら進めば、俺の家に着く。そこで的射と別れる。的射の家はもっと遠いらしい。

「おかえり」

たった一人だけが、そういつてもてなす。母さんだ。夫の無謀な理想に呆れ、怒り、離婚した。そのころ三、四歳だった闘也でも、もう父とは会えないとは分かっていた。だが、多分また会うことになる。最悪の形で。

エスパーのことは話していたが、戦争を仕掛けてくることは、まだ言っていない。言うのは面倒だが、言わないのも心にひっかかる。だから、今日話すことにした。

「母さん。重要な話がある」

「なに？闘也？」

「エスパーが、戦争を仕掛けてくるらしい」

その瞬間、母さんの顔から、血の気が引いてる。みるみるうちに顔が青くなっていた。もう、戻れない。もう、引き返せない。悲しい運命というやつだ。残された道は、降伏か戦争。日本は戦争したくないだろうが、向かってくるものは、撃退しなければならぬ。防戦ばかりとなるが。そんな中で、唯一攻めることのできるのがサイコストだ。すでにもう、戦いに、戦争に巻き込まれ、やがて、関与した一人になるだろう。

「やっぱり、あの人とは別れてよかったのね・・・」

母の顔は、安堵の表情というよりは、恐怖に近かった。

「母さん」

闘也は目の前で、元夫の恐怖に怯えている母に向かって言った。

「怯えていたら、怖がっていたら負けるよ？」

それだけを言って、闘也は二階の自分の部屋へ上っていった。

闘也の母、魂波朝子。父が出て行った後、たった一人で、俺を育ててくれた。感謝している。これからもするだろう。だが、今闘也を揺るがすのは、母の恐怖の顔でなく、父の見下した目つきだ。あいつは絶対に、その目をする。その目を、二度とさせたくない。もう俺は、強くなるしかない。それが、俺に残された道、たどるべき

跡。かばんをおろし、しばらくベッドで、寝転がっている間に、「ごはんよー」と、母の声がした。闘也はベッドから降りて、下へ降りていった。

次の日。いままでと、ほぼ全く、同じ時間が流れた。数学・音楽・国語・社会・体育・理科。掃除が終わり、家に帰る。ごく普通の日。本当に明日、戦争始まるのか？と思うほどだった。だけど、実際そうだった。サイコストとエスパーの、歴史に残る、大戦争になるかもしれない。なにしろ、超能力者が、互いを傷つけあうのだから。昼休みのうちに、もし、敵が攻めてきたときに、どこに集まるかは決めておいた。学校にいる間なら、そのまま、集団行動とした。多分、もう、こんな風に、ゆっくり誰かと話し合う時間は、もうないかもしれない。人気歌手が死ぬかもしれない。大切な人が死ぬかもしれない。だが、戦うしかない。戦うことは、そのまま、生き延びるか、死ぬかの二択に絞られた状態になる。なら、生き延びるほうを成功させてみせる。絶対に死んだりほしくない。そう決めた。絶対に揺るがない。諦めない。成し遂げる。

## 7、超能力戦争、開戦（前書き）

超能力者が姿を隠して生きる世界。その中で生きるサイコストのうちサイコストの一人、魂波闘也こんぱとうやは、無口でありながらも、新たなサイコストと出会っていく。その不可思議なめぐり合いの中で、起きた、炎天中生徒行方不明の事件。追った先で遭遇したのは、自らをエスパーと名乗る超能力者であった。

エスパーとの会話の中で出てきた、ソウリール・エスパーなるものの名は、闘也にとつて、もう出会うことがないと思っていた、父の名であった。

非現実的な理想の元の家を出て行ったソウリールが、サイコストに対して行った宣戦布告。それを受けて、それぞれが覚悟を決め、開戦に備えていた。そして……。

## 7、超能力戦争、開戦

次の日の朝、闘也はかばんを手に持って、普段通り登校。中身も普段通り。だが、それぞれ、非常食と水くらいは、隠し持っておくように言った。そのため、いつもより、かばんは重かった。

学校に行くまでは変わらない。朝のホームルームの時間も変わらない。変わったのは、二時間目くらい。ちょうど担任の授業だった。

闘也は左側、窓の外が赤くなつたと感じた。とうとうきたか・・・。窓の外を振り向く。はるか遠くにある山が燃えている。山だけでなく、その周辺も燃えている。担任も他の生徒も、それを見ていた。そこまでなら、山火事だと、通報するくらいで済むだろう。問題はそこからだった。山の炎が大きくなり、そして、爆発。これにはほとんどがショックを受けていたし、パニック状態に陥った。そこで、闘也、乱州、的射、秋人の四人は立ち上がった。

「先生。重要な話があります」

闘也が喋った。ほぼ全てが、重要な話の内容より、闘也が喋ったことに驚いていた。

「これから、戦争が始まります」

最も重要なことを闘也が喋ると、続いて乱州が、

「そして、相手は超能力者です」

とうてい信じられない話だろう。そこに的射が追い討ちをかける。

「私たちも、超能力者です」

そして、秋人が、

「といつても、敵は俺たちとは違う種族の超能力者つすけどね」

「先生」

「は、はい？」

「俺たちは戦います。この地球を守るために」

間抜けな担任の返事もおかしかったが、みんなを安心させるため、すこし笑って見せた。後方の炎はさらに大きくなっていく。食料等

は、すでに腰のポーチに入っていた。鬨也は指示を出す。

「秋人。翼を出せ、全員、それに乗っていく」  
「了解」

秋人が窓から飛び出した直後、背中から見事な翼が生える。結構な大きさだ。三人はそれに飛び乗る。

「先生」

「へ、へいい」

やっぱりおかしな返事だ。いい思い出になりそうだ。

「生徒達を非難させなくていいんですか？」

それで、はっとした担任は、生徒達を集め、廊下に並ばせた。全員がグラウンドに非難したのを見届けてから、秋人は羽ばたいた。これでも、俺たちは軽い方らしいな。安定した飛び方をしていた。

山火事のおつた方へと急ぐ。かなりのスピードだ。秋人曰く、これでも、三割のスピードだという。山のふもとに四人は降り立った。すごい山火事だ。だが、これに気にしている暇はない。急いでエスパイを探し出し、殲滅させないといけない。

「よし、別れて行動しよう。けど、的射は後方で支援する感じだから、乱州と一緒に、行動してくれ」

「リョーカイ」

「わかったわ」

「了解だ。相棒」

四人はうなずき、それぞれ散った。

秋人は学校と山の間を探索。結構な距離だが、秋人ならば、この程度は簡単に探せる。この間には、公園、小さな林、住宅地があった。住宅地は、さすがにいなかった。公園にでたところで、ちよつとした集団を発見。人型だが、サイコストとは思えない。

「お！サイコストだヨ！皆の衆！かかるんだヨ！」

隊長つばいやつが指示を出すと、その部下であるう者たちが、三十人ほど、攻めてきた。

「このくらいなら、三十秒もあれば倒せるぜ！」  
秋人は正面から突っ込んだ。

乱州と的射は、山の反対側を搜索していた。的射は、スナイパーライフルを肩にかけていた。山の向こう側は、ほとんど森だ。そのなかの少し開けたところに、エスパーたちが集まっている。

「的射。誰でもいい。狙撃しろ」  
「うん」

的射が発砲すると同時に、乱州が飛び出す。

「てええりやああつ！！」

巨大化させた腕を振り回す。エスパーがどんどん倒れていく。まだ、息があるものに、的射が止めをさす。このあたりの敵は、殲滅できたようだ。

闘也は住宅地と、その後ろの山を搜索した。住宅地にエスパーはいなかったが、山にはあちこちにいた。魂と協力しながら、敵を殲滅していった。頂上付近には、そりやあもうすごい数だ。軽く百はいるな。闘也は拳を構えた。このくらいの敵を倒せないようでは、他のみんなに示しがつかないし、なにより、父に、ソウリールに勝てない。

ギガントファイヤボール  
「巨大火球！」

巨大な球状の火を投げ込む。ほとんどが焼けた。魂と分離する。残りの敵を、なんとか殲滅できた。そのとき、闘也の前に、一人の男が現れた。敵を二十三秒で殲滅させた秋人のまえにも、乱州と的射のまえにも、それぞれ違う者が降り立った。

## 8、幹部

闘也たちのまえに現れたのはエスパーだ。だが、感覚が違う。今まで戦ってきたエスパーの兵よりも、かなりのオーラが放出されている。四人はそれぞれの場所で思った。強い。ここまでのオーラを放っていて、弱いことはまずない。そこまで力の差はなくとも、かなりの実力者に変わりはないだろう。

「お前、誰だ？」

闘也、乱州、秋人はそれぞれの場所で名を問う。

「我は八幹部の六部、炎の使、ファーガ」

闘也の前のエスパーはファーガと名乗る。

「俺様は八幹部の八部、速の使、スピーロ」

秋人の前に現れた、口調の割には身長の高いエスパーはスピーロと名乗る。

「僕は八幹部の七部、拳の使、グライブ」

乱州と的射の前にいる金属の拳を装着した男はグライブと名乗る。

「俺様と勝負しようぜ。サイコスト！」

「なんの勝負なんだよ」

「スピード&バトル勝負！」

いたって普通の勝負であるが、向こうはよほどスピードに自信があるのだろう。向こうも恐らく能力は高速<sup>スピード</sup>。どちらがその能力が高いか。それが試される勝負である。

「こちらにおいで！」

高速でスピーロは走り出した。なるほど。さすが速の使だ。

「受けて立つぜっ！！」

秋人も走り出す。スピード勝負で、負けてはいられない。絶対に勝つ。秋人は徐々に加速していく。本気で走れば、五十メートル走なんて、一秒足らずで走ることができる。その足に相手が追いつける

か。逆に逃げ切れる自信があるのか。さらに加速していく。少しずつ、スピロの背中が大きくなっていく。右手を握る。もらった。六割のスピードを八割にあげる。大きく加速した。スピロの後頭部に、拳が当たる。鈍い音が響く。

「ぐわああっ」

スピロが減速する。秋人はすぐに振り返り、拳を構える。スピロをほぼ正面で待ち構える。向こうは減速したとはいえ、かなりのスピードで走っていたため、そのスピード分のパンチを顔面に受けた。

「く・くそおっ！負けてられるかあああ！！！」

その瞬間、スピロが白い風を纏った。まるで周りの風がスピロを守り、強化しているようだ。通常ならば見えないはずの風が色彩を持って周囲を吹きまわっているのだから、なおさらそう感じさせた。

「フアーガ」

闘也は静かにその口を開いた。フアーガの方もただ静かに聞き返した。

「なんだ？」

「あの山を燃やしたのはお前か？」

闘也の目には、すでに聞かずとも分かっているながらも怒りに血を煮えたぎらせている。

「ああ。かなり燃えてきたところに、爆弾をたっぷりと注ぎ込んでやった」

その口調とは裏腹に、フアーガの顔には表情というものがなく、ただ淡々と事実報告をしているだけである。向こうの能力は炎の使いだけあって、推測でしかないが、おそらく<sup>フレイム</sup>火炎。こちらも炎を使える以上、勝負は五分には持ち越せるはず。

「相手になってもらうぞ、フアーガ」

「いや、今回は戦わない」

闘也の頭に浮かぶのは疑問である。わざわざ現れておきながら戦わないとはどういうことだろうか。

「なぜだ」

「その理由はこれだ」

ファーガが、少し避ける。母さんだ。つまりは、人質。小賢しい。率直に闘也はそう思った。

「どうするつもりだ」

こんなときこそ冷静にならなければいけない。いつもと変わらない口調で聞いた。

「明日、我がこの手で殺す」

「あっさりした答えだな」

「明日、焼け残ったあの山に來い」

そう言つてファーガが、自ら焼き払つた山の方角を指差す。闘也は奇襲を警戒してそちらは振り向かなかつた。

「來なければ？」

「貴様の仲間を殺していく」

「いいだろう。明日だな。そのかわり、それまでは絶対に殺すな」

それだけは絶対に守れ」

「分かつた。貴様が自らの母が死ぬ瞬間を見たときの顔が見たいな」  
そういうと、ファーガは飛び立ち、いつの間にかいなくなった。

一方、乱州と的射は、グライブを相手に戦つていた。的射は後方支援に、乱州は、その拳を相手に振るつた。グライブ。さすが拳の使というだけはある。拳の能力であろう。乱州のパンチを同じ技で跳ね返してくる。

「どうした？それがお前の本気か？サイコスト」

「くっ………。まだまだっ！」

乱州は、<sup>ボディー</sup>身体<sup>ボディー</sup>の能力で脚力を上昇させる。すばやくグライブの後方に回りこむ。グライブ前方からは的射が銃弾を放っている。そうなれば後ろでの防御は難しいだろう。

「巨大腕打!!」  
ギガントアーム

さらに巨大化させた腕を背中に叩き込んだ。グライブが前に飛んでいき、倒れた。

「まだ終わらん!」

乱州の追撃をグライブはかわし、反撃の拳をこちらへと突きつけてくる。乱州は追撃後のこともあり、よけきれずに左頬にパンチを受ける。空中で一回転した乱州は、どうにか両手両足で地面につき、一メートルほど滑りながら体勢を立て直す。しかし、顔を上げた瞬間に、次の攻撃が来る。乱州は紙一重でかわすと反撃の拳を突き出す。しかし、その攻撃は回避される。そして、グライブが乱州のすぐ横を倒れるように過ぎていこうとする。乱州が攻撃のために左腕を構えた瞬間、わき腹に衝撃が走る。と同時に、乱州はその衝撃に耐え切れずに倒れこむ。

「ぐふあつ……!」

乱州は、左腕を振り上げた瞬間に見えた。グライブがその拳を胸の辺りで構えていたのを。そしてそれを一瞬で解き放ったのを。

グライブは、胸辺りに構えた拳を、乱州に向かって、まるで制御された矢を放つように突き出したのである。

「長腕打!」  
ロングアーム

乱州は右腕を伸ばしながら、立ち上がる。拳は、確実にグライブを捉えた。左腕を伸ばし、グライブを追撃する。

「長巨大腕打!!」  
ロングギガントアーム

飛び上がった乱州は上空からグライブを叩き潰した。

着地した乱州は、動かないグライブを見た瞬間に膝をついた。

「乱州! 大丈夫!?!」

的射がこちらへとよってくる。的射が乱州の下につき、乱州を支えようとしたとき、的射は吹っ飛んだ。乱州が振り向くと、グライブが的射を殴り飛ばしていた。

「俺の前で……仲間の手え出しといて……」

乱州は立ち上がった。痛みはあったが、関係なかった。

「その足でもう一回立てると思うなああっ!!」  
乱州は、その腕を引く。

骨を全てへし折るつもりでいく。

「一気に決めるっ!!」ギガントアームマシンガン「巨大腕連打!!!!」

巨大な腕で、何百ものパンチを繰り出す。その周辺だけだが、激しい地震が巻き起こった。かなりの揺れだ。

「はあ………はあ………これで終わりか………?」

グライブは見るも無残な姿。というよりは、すでに原型をとどめい  
なかつた。

大変だっただろう。グライブ。だがもう無理をする必要はない。

お前はもう自由だ。ここにはもういれないが、あの世で、自由に暮  
らせばいい。おそらく、地獄いきだとは思うが。

グライブを倒したところで、乱州と的射はしばらく休むことにし  
た。

また、その一方で、スピーロと戦っている秋人。いまだ交戦中。

こちらのほうは、風のおかげもあって、スピードは勝っている。だ  
が、攻撃を繰り出しても、すぐにかわされ、反撃を食らう。厳しい  
状況だ。敵は、こちらの動きを完全に見切ったようだ。そうなれ  
ば、こちらも、相手の攻撃を見極める必要がある。頭が悪くても、  
体で覚えれば問題はない。なにより、速さが中心のこの勝負で、負  
けるわけにはいかない。かわしては殴り、かわされては殴られる。  
そのうちに、相手はワンパターンで動いているのが分かった。あい  
つは、かわすときに、後ろにかわしてるから、一步踏み込んで殴り  
かかれば、最悪でもかするはずだ。いままでと同じく、攻撃をかわ  
す、そして、拳を構える。左足を大きく踏み込んで、今までよりも  
強いパンチをおみまいした。顔面に直撃したようだ。立つのもやつ  
との状況か。

「くそ!負けてられるかあっ!!こんなやつにつ!来てください!」

「ビーグルさん！」

その瞬間、頭上に大きな・人！？まさか、でかすぎだろう。チエ・ホンマンの十倍はあるぞ！？

「僕は、八幹部の五部、力の使、ビーグル」

落ちてきた足をなんとかスピードでかわす。くそ、こんなでかいやつに勝てるのか？

山の頂上で休んでいた闘也は突然現れた大男を目にした。公園のほうには、秋人が向かっていたはず。やばいな。あいつのスピードで倒せる相手じゃない。

森の中で休んでいた乱州と的射は、山よりでかい大男を見上げた。で、でかすぎだろ。あそこに秋人や闘也がいる可能性は高いな。

「行くぞ、的射！」

「うん」

「ぶおおおお！！！」

ビーグルはかなりの大きさの腕を伸ばしてきた。

「当たるかよ！」

秋人は飛び上がり、伸びてきた左腕に飛び乗る。そのままその上を走り抜ける。顔が近くなってきたところで、またも飛び出す。スピードの勢いのままに殴りつける。右腕に降り、振り返りざまにまた殴りつける。しかし、何度もそうはいかない。二回目の振り向きに回復したスピーロが邪魔してくる。その時、ビーグルの右腕が襲い掛かってくる。邪魔されて身動きが取れないところに、あの腕で殴られたら、重体じゃすまない。くそつ、ここが俺の死に場所か。

しかし、拳は途中で止まった。ビーグルはかなり力を入れて、押し込もうとしているが、微動だにしない。というか、押し返されている。押し返しているのは、闘也……の魂だ。邪魔していたスピーロも飛ばされる。なんと闘也がジャンプしてここまで上って

きたのだ。さすがに一回のジャンプでは届かないだろうが、数回に分けてのジャンプによってここまでできたらしい。

「なんか巨人が見えたから来てみた」

「そういうと思った」

次の瞬間、ビーグルの腹部にビーグルに劣らぬ巨大な腕のパンチが当たる。それによってビーグルが後ろに倒れる。鬪也と秋人はなんとか逃げる。乱州と的射だ。これで四人が揃った。これならあいつらと互角、いや、互角以上の戦いができる。

それにしても、でかい。やはりこいつと秋人を一対一にしないで正解だったな。と、鬪也は一人思う。この巨大さから見れば、能力は巨大ギガントや、力パワーといったところだろう。もう一人いるようだが、あれはスピードだけだろうから、秋人でもなんとかなるだろう。乱州のあの一撃をくらったのに、まだ起き上がるとはかなりの体力だ。まあ、でかいから、それなりの防御はなしにもしなくてもどうにかなるものだろう。もうこうなったら、一撃で倒せるほどの威力の技を出さなきゃいけない。

「よし！ 全員、今使える攻撃をぶち込む！ 属性も惜しまず使うぞ！ いくぞ！」

「いつでもいいぜ」

「大丈夫よ」

「ぶちかましてやろうぜ！ 鬪也！」

四人は息を合わせ、それぞれの最強の技を使う。

「半永久高速竜巻！！」  
エンドレスハリケーン

秋人は巨大な竜巻を起こし、その周りを回って、さらに風を早める。それによって、ビーグルのバランスを崩す。

「水剣大切断！！」  
ウォーターカッター

的射はライフルの銃口から弾ではなく、液体でできた剣に変えた。

「近距離巨大腕打！！」  
ショートレンジギガントアーム

乱州は相手の懐に潜り込んで、巨大な腕を出現させた。

ダブルファイヤー、ソウルコンボ  
「双火炎魂連撃！！」

魂と分離した鬪也は双方から、炎の攻撃を連続で繰り出した。四人の全ての技によって、腕は切り落とされ、足はひねられ、腹部をへこませ、顔がこげた。無残な姿だ。あまり見たくない。自分達はただの人殺しという認識をされないのを祈るばかりだ。ただの人殺しと認識されたとき、俺達の居場所はないだろう。一生人を殺しつつけるか、一生逃げ続けるか、捕まって死刑のほかにはない。だが、戦わなければいけない。例え、人殺しの認識をされたとしても、今は戦わなければならない。

明日、母は殺されてしまうのか。たぶん、どんなにあがいても無駄だ。事実を受け止めなければいけない。父が出て行ったあの日のように。

夜は、人目のつかない場所で、交代で見張りをしながら眠ることにした。人目のつかない場所とはいえ、戦場に変わりはないのだから。

見張りの番の間、星を眺めながら考えていた。なぜ父はこんなことをしたのだろう。こんなことでしか、世界を動かすことができないのだろうか。だとしたら、愚かな父だと思う。自分の意見を言うわけでもない。ただ、有り余る力を、認められない憎しみを、見捨てられた悲しみを、ただ一方的にぶつけているだけだ。なぜ、やめられない。

次の当番の射を起こして、鬪也は布団に潜った。かなり眠かったのだが、ソウリールのことが頭を駆け巡るせいで、なかなか寝付けなかった。

## 9、覚醒

朝になった。昨日火事になった山は、原型こそ留めていたが、木々は焼け、草は灰になり、山というよりは、大きい丘のほうがしつくりくる感じた。闘也は、ブリーフィングを行った。今日の行動をどうするかだ。まず、午前中は山の周辺に残るエスパーを殲滅させる。午後は、昨日火事になって（中略）大きい丘のほうがしつくりくる山を探索。そこで闘也は、母が捕まっていることを打ち明けた。三人は、午前に行ったほうがいいんじゃないか、と言った。だが、午前に行けば、そのとき山に集中しているエスパーの軍団にやられるのがオチだろう。それよりだったら、山の周辺でエスパーを殲滅させながら、山にいるエスパーを引き付けて、人数が減ったところに、攻撃をしかければいい。そう闘也は説明した。乱州は考えた。確かに、筋は通っているし、その方が戦いやすいだろう。だが、家族を思う気持ちがあるのなら、すぐに助けたほうがいいんじゃないかと感じていた。たぶん、他の二人もそう思っていると思う。

結局、作戦は変わらず、そのまま実行となった。

固まって行動し、敵の殲滅時間を短くし、敵の注意を引けた。結構な数のエスパーが、山から下りてきた。その殲滅を秋人に任せ、闘也たちは、別のルートから進入した。追撃部隊も来たが、乱州が全て、殴り倒した。

「くそっ！なんでこんなに数が多いんだよ！」

山から下ってくるエスパーを追い払っている秋人は結構な数を倒したのに、懲りずにまだやってくる。それを倒してもまた来るし、それを倒してもやはり来る。嫌なサイクルだ。これで、こちらの体力の限界まで追い詰める気だろう。なら、もう攻め込めないようにする。

ハリケンバリア  
「竜巻防御壁！！」

竜巻の壁を作る。しかもかなりの大きさだ。これでも体力は消耗するが、戦い続けるよりはましだ。しかし、その中にいるのは秋人ではなく、エスパーだ。八十人くらいのエスパーの入った竜巻を、どんだん小さくし、そして、はるか彼方へ吹き飛ばした。

「ぎゃああああ」

「飛ばされるー」

悪役の鏡のような悲鳴を上げながら、無数のエスパーがその風に煽られてやがて見えなくなった。

よし、これで、しばらくは追撃できないだろうし、鬪也たちと合流しよう。

秋人は、山の間と頂上の間あたりに向かって走った。

一方の鬪也達は、着々と歩を進めた。そろそろ、頂上が見えてくるはずだ。そこに、砂ぼこりをふんだんに上げて、秋人が突っ走ってきた。これで合流完了。頂上も見えてきた。鬪也達はその歩みを急いだ。

ようやく頂上に着いた。頂上にいたのは、今きたばかりの鬪也たちの他には、これでもかと言わんばかりのエスパー兵と、八幹部の五部、炎の使、ファーガ、そして………血まみれになった鬪也の母がいた。

「悪かったなあ。待ちきれなくてもう殺してしまっただぞ」

その瞬間、頭の中で、張り詰めていた糸がプツツと音を立てた気がした。キレた。母を殺された哀しみよりも、母を殺された怒りのほうが勝っている。明らかに。そして、約束したはずだ。俺が来るまでは殺さないと。殺されたときの顔が見たいと言っていたじゃないか。あんたはそんなやつだったのか。約束も守らないやつなんて男じゃない。忠実な部下じゃない。そんな約束も守れないから、ソウリールにはあまり信頼されてないのだろうか。それとも、力づくで動かされていたのか。母を殺したのも、ソウリールに力によって命

令させられていたのだろうか。そうかもしれない。だが、許さない。魂ソウルの能力は、使用者の感情によってその能力が左右される。怒りの際は、最も強力なものになるが、逆に悲しみなど、マイナスな感情であれば、最悪、能力は半減してしまう。

しかし、このときはそんなものではなかった。体の奥底から、湧き上がるような力。魂ソウルの能力は感じられる。だが、これはそれだけではない。鬪也はそう確信しながらも、ファーガへとまるで独り言のように言い放つ。

「あんたは、俺が殺す。この命を懸けて」

その瞬間、鬪也の足の辺りが黄色くなり始めた。そのまま腰まで上がってきた。その瞬間、全身が一気に魂ソウルの黄色に包まれる。

「うおおおおお！！！！！」

鬪也は魂ソウルの力を、自らの体に取り込んだのだ。鬪也は飛び上がる。通常よりもかなり高い。いや、それだけじゃない。鬪也は、自在に空を飛びまわっていた。空中に尾を引きながら、魂の黄を纏った少年は、ファーガに向かって突進した。

「な、なんなんだよ、あれ………」

乱州は思わず口に出していた。口には出さずとも、他の二人もそう思っているはずだ。

「あれは鬪也が覚醒したのよ」

女の声。だけど、的射の声ではない。的射は、俺や鬪也より、サイコストである時間は短い。的射がサイコストのことについてどうこつといえるほど、あいつは成長していない。もちろん自分も未熟な身だが。

「あー！あなたは！もしや！あの！いつだかの！」

「どんだけ思い出すのにつつかえてんだよ」

乱州は半ば呆れながらも秋人に突っ込む。目の前にいる女性は、乱州たちと同年代というところだろう。ん？同年代？いつだか、誰かから聞いた記憶があるが……。

「きれいで！強くて！優しくて！属性タイプが使えるて！」

「うるせーよ、いつまでつかえてんだよ。静まれ、アホ」

強い……属性タイプが使える……それによって、乱州の記憶に関する脳の回路が繋がった。

「秋人は知ってると思うけど、私が、白鐘しろかね由利、中一。よろしく」

そうだそうだ。白鐘だ。思い出した。頭のもやもやが吹っ飛んだ感じだ。だが今は、自己紹介よりも、鬪也のことについて聞かないといけない。それが、鬪也にしてやれる数少ない役立ちだ。

「覚醒って、なんなんだ。白鐘」

「え！？もう呼び捨てにしてるのか！？乱州！」

「あんたは黙ってなさい」

的射が秋人の襟を引っ張って、後ろに引いた。ちよっとお怒りのよ

うで。  
「覚醒っていうのは、いつもは、脳内のかなり深いところ、まあ簡単に言えば深層意識かな。そこに封印されている、強力な力があるの」

「覚醒は、その封印された強力な力が目覚めるってことなの？」

「さすがの射ちゃん。頭いいね」

「いえ。なんとなく、そうなのかなーって」

「でも、覚醒は、一度発動させると、その後は何回でも発動できるんだけど、体力を消耗するし……」

「一度発動させるまでが、時間かかるのか？」

「うん。乱州君も頭いいね」

「乱州でいいよ」

「私も的射でもいいよ」

「あ、うん。で、最初の発動は、必ずなにかキツカケがないと、覚醒ができないの。例えば、鬪也の覚醒は、魂ソウルの力によって覚醒したの。魂は怒りの感情のときに威力を増す能力だから、たぶん……  
・お母さんを殺されたことで怒りが爆発して、覚醒したんだと思う」

「なるほど……まああいつはキレると逆に口数少なくなるしな」

覚醒か。鬪也のように、たった一人の相棒のように、俺も強くなれるのか。けど、今あいつは自分のことで戦っている。もちろん、それは日本の、サイコストのためにもなっているが、今鬪也は、哀しみの先の怒りによつて、ファーガと戦っている。

今俺が、あいつのためにしてやれること、それは、あいつに協力することではない。サイコストとして、エスパーと戦うことだ。たぶんこの気持ちは、他の誰にも分からない。相棒の俺しか分からない。「さあ！おしゃべりは終わりだ！エスパーを殲滅するんだ！」

「おおっ！！」

乱州、的射、秋人、由利はそれぞれ散っていった。

一方、覚醒した鬪也はファーガとの死闘を繰り広げていた。ファーガは、絶え間なく火の玉を撃ち続けている。本当に絶え間なくだ。突っ込んでくるときも、かわすときも、攻撃を受け止めているときも、別の攻撃をしているときもだ。だから、常にかわすか防御しなきゃならない。だが、鬪也は炎の属性であり、そのうえ母を殺され、約束を破られたという怒りによつて能力値は上昇していたので、そう簡単に怯みはしなかった。だが、いつまでも相手は同じ手を使つては来ない。

突如目の前に現れたファーガが、右手に炎を纏わせて鬪也を殴りつける。

「どんな手品か知らないが！」

ファーガがその勢いのままに回し蹴りを行う。もちろん、その脚には炎が纏われている。

「空中戦はこちらに分がある！！」

向こうは周囲の空気を加熱することによって自らの体を自在な場所に飛ばすことができる。つまり、普段から空中での動きに慣れている。それを考えれば、向こうの言うことには全く間違いない。

ファーガが左手に炎を纏わせて突き出して来る。闘也は對抗して右手を突き出す。拳と拳の間から衝撃波を思わせる風圧を感じる。

「甘い！」

ファーガが左足を振り上げてくる。闘也はそれを左手で受け止める。ファーガが右手を引き、そのままこちらへ真つ直ぐに突き出して行く。闘也はそれを仰け反つてかわし、つき合わせていた右手を離し、その右手をファーガの顔面に突き出す。反撃とばかりに、ファーガが左足を腹部へと滑り込ませる。闘也は蹴りの勢いに負けて一回転するが、右肘をファーガの顔面へと突き出し、間髪いれずに左手を突き出し、そのまま両足で蹴り飛ばし、そのまま距離を置く。

ファーガが動いた。両腕を構え、それは闘也の方を向いている。

「地獄へ導く悪魔の炎……獄殺炎<sup>じごくさつえん</sup>、炎上!!!!」

突き出した両腕から、すさまじい炎が吹き出た。闘也に向かって一直線に向かってくる。方向がそれることはまずないだろう。しかし闘也は正面から突っ込んだ。この炎を利用しない手はないと考えたのだ。

俺は、前に進むことしかできない。後戻りはしてはいけない。でも、逆に言えば、どんなときでも、前に進むことができる。そう信じてる。だからこそ、戦える。哀しみの向こうにあるのは、平和とかなんてきれいなものでもなければ、憎しみなんて汚いものでもない。

「それをあんたにみせてやるよ！ファーガ！」

ファーガの放った炎を正面から受ける。さすがに炎属性の闘也も熱いと感じた。だが、これが俺の力になる。魂と炎を纏った闘也はその炎から上方方向に飛び出した。

「炎神ファイランの名の下、悪しき者には恐怖の烈火となり、善しき者には夜道を照らす灯火となる炎を、今ここに呼び覚ます！」闘也が纏っていた炎が拡大して、ファーガを取り囲む。自らが放つ炎よりもすさまじい炎はどういうものなのか、死ぬ前に一度味わっておけばいい。その炎によって死ぬのだから。

「くう・・・このファーガ、死ぬ前にこのような炎にめぐり合えたことに感謝する。そして我は、炎に焼かれて死ねるなら本望だ！」その瞬間、ファーガは消えた。溶けたというほうが、あっているだろう。悲鳴も上げず、ただ静かに死んでいった。すまない。あんただって、ここまで辛かったかもしれない。大切な人を失くしたから、俺の母を殺したのか。それとも、ソウリールが指名したのか。どの道、別にこいつは悪くない。ただ、恐れていたただけだと思う。死ぬことを。だがさつき、焼死という死に方で、やつは満足していた。人にはそれぞれ想いがある。それがたった一つだとしても、弱く、脆いものであっても。闘也にだつてあるし、乱州にも、的射にも秋人にもある。下では、まだ乱州たちが戦っている。助けてやりたいが、そんな体力は残ってない。乱州のところへ向かおうとしたとき、乱州がテレパシーで話しかけてきた。

（闘也。大丈夫だ。俺達だけで、こいつらはやれる。お前は休んでおけ）

（でも、乱州や的射や秋人のためにも・・・）  
（大丈夫だ。俺を、いや、自分の相棒を信じろ）

乱州はそれ以上テレパシーをしてこなかった。闘也は木の裏に隠れた。疲れた。かなり体力を消耗した。腕や足に力が入らない。俺に、今現在戦う力は残ってない。だめだ。少しずつ意識が遠のいていく。闘也はそのまま、深い眠りについた。

次に目が覚めたときは、住宅地にいた。

「闘也。目、覚めたか？一人で歩けるか？もつと休みたいか？どつか痛いかな？」

「いつぺんに複数のことを聞くな」  
どうやら、乱州と秋人に体を預けた状態だった。なんか、申し訳ない。というか、嫌いだった。他人に全てを預けるのは、なんか嫌だった。もしこいつらじゃなかったら、払いのけていたかもしれない。その点では、俺、変わったなと、勝手に解釈したりした。

山にいるときよりはかなり体が軽かった。一人で歩けると乱州に

申し出たら、二人は肩から手を放した。

「ところでこれからどこに行くんだ？」

「協会から強制招集がかかったから、サイコスト協会に行くんだってさ」

強制招集？ いったいなにかあったのか、闘也には見当もつかなかった。

## 10、警告

サイコスト協会からの強制招集がかかった。内容は見当がつかない。闘也達だけが呼ばれたのか、他のサイコストも呼ばれているのか。たぶんそれだけで、聞かれることや、対処の仕方はいぶ違うはずだ。もし闘也達だけなら、戦闘のことや、戦争が始まってから何をしているか、などだ。なにしろ闘也達は協会が開いた戦闘強化訓練を受けていないし、女子供だからと、かくまわれたわけでもないのだ。ただ独断で行動し、戦いを繰り広げているのだ。

サイコスト協会炎天支部に到着。毎月来ていたから、なんの躊躇もなく入る。受付に、強制招集があったからと聞くと、

「それでは、支部長室にお入りください。支部長がお待ちです」  
分かりました、と返事をして、五人は協会の奥の方にある支部長室に向かった。地下とはいえ、それなりの広さだ。分かりましたと返事はしたが、場所は全く知らなかったから、少しスピードを落とすと、乱州や秋人に先を歩かせた。

しばらく(〜)といつても一分たらずだが、進むと支部長室が見えた。スピードを戻して先頭になる。ドアをノックし、入る。

「失礼します」

五人はそろそろと支部長室に入った。

報告室よりずっと広い部屋だ。入って左側に支部長の席、入って正面にお客と話をするためである長いソファが四つ置かれていた。

「おお、待っていたよ。私が支部長のさいごう齊藤正義まほしだ。知っているとは思いますが、これからよろしく」

知らなかった。少なくとも闘也は知らなかった。

「今回お呼びしたのは……あ、どうぞ、座りたまえ」

ちよつと癪に障った。支部長だからといって、闘也達が子供だからといって、上から目線はやめてほしい。気に障る。もう十分障っているが。

「今回お呼びしたのは、君達の行動についてだが」

「すみません、一ついいですか」

話始めようとした正義に闘也は口を挟む。正義はそれに対応した。  
「構わない。言っごらんないさ」

また上から目線。ごらんないなんて上から目線の王道だ。

「呼ばれたのは俺達だけなんですか？」

「ああ。君達に用があつて呼んだんだ」

「そうですか。話を続けてください」

「君達の行動について、聞きたいと思っっているのだ。では、最初の質問だ。君達は、戦争が始まつてから何をしている？といつても、まだ二日目なのだが」

ほら来た。戦争が始まつてから何をしているか。もちろん、戦つている。だれに指示されたわけではなく、誰かの指導を受けたわけでもない。

「俺達は、この戦争が始まつてからは、ずっと戦つています」  
単刀直入に言う。正義は驚きはしていなかった。

「なるほど。数時間前に、偵察に出していたサイコスト兵から、サイコストの子供がエスパーと戦つているという報せがあつてな。詳しい情報を聞くと、君達だつたわけだ」

なるほど。偵察が気づかれにくく、数時間前ということは、山の頂上で戦つてるところだろうな。

「君達は子供なんだから、戦いはこちらの兵に任せて、君達は、戦わなくていいんだ。家族も心配してるだろうし、あとは、サイコストの兵に……」

「家族がいらないなら戦つてもいいんですね」

闘也はそう聞いた。心配される家族がいなければ、戦つてもいいということになる。矛盾はしていない。逆に、それでも戦うと言われれば、そっちの方が矛盾している。

「そんなことを口にするということは、君は家族がいらないのかね？」

「母は、エスパーの幹部に殺されました」

「そうだ。戦えばそのように大切な人を失うことになる。今は生きてても、いずれは失いかねないのだ」

「その覚悟の上で、俺は戦っているんです」

「俺もできてます」

「私もできています」

「俺もです」

「私も覚悟はあります」

一人一人が、それぞれの覚悟を述べる。そうだ。戦いとは、中途半端な覚悟でやってはいけない。自分の大切な物、人、そして、自分の命を懸けて戦わなければならない。中途半端な覚悟で戦った者は、その者の大切なものを失う。断言できる。そして、そうやってしまったときの悲しみから立ち直れない。覚悟があれば、例え崩れてしまっても、また立ち上がることができる。

「そうか。では、次の、質問というよりは、私の意見かな。君達は、戦闘できるほどの能力を持っているのかね？」

それって質問じゃないか。それとも、その答えに意見するのか。

「はい。俺達は全員、戦闘に役立つ能力はあります。俺は魂ソウルがあります」

「俺は、ボディー身体ボディーの能力があります」

「私も射撃ショットがあります」

「高速スピードの能力です」

「私は属性タイプの能力を持っています」

「なるほど。確かに、その能力があれば、エスパーと対等に戦えるだろう。だが、一つ言わせてほしい。えー……と、闘也君だな」

「はい」

「君は、たぶん、そう長くは戦えない、いや、戦っても負けるかもしれない」

衝撃の一言だった。四人をまとめている闘也が負けるのは考えられないと誰もが思っていたからだ。

「君の魂ソウルの能力は、君の感情によって、その能力が左右される。つまり君は、全力で戦うためには、いつも、感情をむきだしにした状態で戦うことになる。怒りの感情で戦うことは、敗戦につながる可能性が極めて高いのだよ」

そこで、でも、と由利が反論した。

「闘也は先ほど、覚醒したんですよ。覚醒すれば、いつでも全力を出して戦えるんじゃないですか」

「なに！？覚醒しただと！君はそれほどの実力を持っていたのかね！」

なぜか、さつきまでと態度がまるで違う。闘也達は心中、呆れ気味になるほどの驚きようだ。

「すばらしいじゃないか。どうだ、うちの特殊部隊に入らないかね。君のような人材は、部隊の励みにもなるし、戦力も増大する」

「いいえ、結構です。丁重にお断りさせていただきます」  
そうか、と正義は息をついた。

「基本的には、俺達は独断で戦闘をさせてもらいます。ですが、俺達もサイコストですから、もしものときは、協力体制をとらせてもらいます」

「ありがとう。恩に着る。では、もう疲れただろう。帰っても結構だよ」

失礼しましたといって、五人は支部長室から出て行った。

「覚醒か……」

正義は、静かに息をはいた。

協会をあとにした五人はちょっと話をするため、あの会議場に向かった。闘也が作った地下室。そこに五人は集まった。

「あの爺さんさあ、（七十くらいだった）ものすごい覚醒に興味津々だったよな」

乱州がちよつと明るめに言った。確かに、覚醒の話になった途端、雰囲気といい態度といい、ガラリとかえて、部隊に入ってくれたの、

励みになるだの言い出してきた。

「確かに変だったよな」

秋人が相槌を打つ。そろそろ、本題に入るか。

「八幹部のやつらのうち、四人を倒した。残りの四人は強力なエスパ―だから注意しておこう」

「そいつらを倒すとなると、五人で協力して、倒さないといけないと思うんだけど」

「ああ、そうだな。じゃ、これから気をつけるように」

りょうかーいという声が響いた。今夜はここで寝ることにした。

## 11、対面

地下で一晩過ごした闘也達。今日は何日だったかと、腕にはめていた時計を見た。この時計はカレンダーの役目も果たしている。十二月四日。こんな時期になるまで、戦っていたとは思わなかった。ついこの間までは、秋だったのに、もう冬の風が、頬を凍りつかせて吹きすぎていく時期だった。この寒さのおかげで、五人とも目覚めは早かった。さっそく今日のブリーフィングだ。

今日は、住宅地一帯の搜索だ。エスパーとしては、現地調達の食料も必要になつてくるはずだ。そうなれば、目をつけるのは、誰もが逃げていって捨ててしまった住居だ。金のありそうな家や、食料が多そうな住宅に侵入して、食べ物を根こそぎ奪うのが敵の魂胆だろう。一応安全のため、五人で行動する。これが今日の作戦。ちなみに、物音のする家は、中にエスパーがいる可能性があるため、入って様子を見る。

ブリーフィングが終わったあと、それぞれが、今日持っていく食料や水などの確認をした。闘也もそうしていた。なにせ一日戦う。食料が多すぎても、動きが鈍って、戦闘しづらいし、少ないと一日持つか分からない。用はバランスだ。

「よし、そろそろ出撃するぞー」

闘也は他の四人にそう呼びかけた。午前八時。作戦開始。

住宅の中に、エスパーはいた。しかも一軒や二軒じゃない。ほぼ全部だ。中には、そこでそのまま食事についている者もいた。それだけ腹が減つてるといふことか。闘也たちは、なるべく、住宅に被害が及ばないように、戦闘し、エスパーを殲滅した。だいたい一軒に三、四人のエスパーがいた。それらを全て殲滅した。体力の消耗も抑えながら戦う。それでも、完全に消耗しないわけではない。それなりに疲れた。だが、戦うしかない。他の四人も、疲れているのに戦ってくれている。自分が戦わなければ、だれも戦ってくれない。

二時間ほど殲滅作業が続いた。ようやく最後の一軒を調査し終わると、すぐ近くにあった公園で休むことにした。焚き火をしようという乱州の意見に皆が賛成し、落ちてた木切れに、鬨也が火をつけ、それを五人で取り囲んだ。全員とも温かな火に喜んでいたが、鬨也は嫌な予感がしていた。

なんだろう。妙に胸騒ぎがする。たぶん、エスパーが来た、もしくは近づいているからそんな予感がするのだろうか。もしかしたらエスパーの幹部でも近づいているのだろうか。もしくは、かなりのエスパーの大群が近づいているのか。どっちにしろ、悪いことには変わりはないし、戦わなければならない。敵なのだから。この戦争で、敵を作らないことはできないだろう。逃げ回る一般人はエスパーが敵になるし、エスパーの軍に入っても、鬨也達サイコストが敵になる。戦争とは、そういうものなのだ。小さくなった火に、乱州が枝を足した。

炎天の街中に、廃墟として佇むビルがあった。そのビルの中には、無数の兵士達と、その中で無表情に状況を聞く男がいた。

「やつらの場所は特定できたか？」

「はい。焚き火ののろしが上がっている場所があり、そこから、サイコスト反応も出ています。そこが一番怪しいと思われます」

「ご苦労だった」

一人の男はそう一言言い捨てて立ち上がった。結構スレンダーな体型。毎日ここにいるのも飽きてきた。そろそろやつらの様子を生で見たいな。そう思った。

「では、私はやつらの様子を伺ってくる。くれぐれも、ここを落とされるようなことにはなるなよ」

「イエッサー」

今まさにその強さを養いつつある五人の少年達。男が目指すのは彼らであった。

その男の素顔を知っているのは、五人の中でたった一人だ。しか

し、自分の名前くらいは五人とも知っているだろうな。男は誰にも分からぬほどの小さな笑みを不適に浮かべた。彼は、反重力バイクに飛び乗ると、それを発進させた。

男が発進して、一分もしたところには、すでに、全員が、何者かが近づいていることは、予想できた。全員が、それぞれ違う方向に身構える。予感が当たったな。相手が、大群でも、幹部でも、倒さなければいけないのは事実だ。戦うことでしか、もう生きる道はない。(この感じ、幹部……それ以上……これだけの反応するのは……)

しばらくすると、一つのそら飛ぶバイクがこちらに向かってきた。全員がそちらに身構えた。そこから、一人の男がバイクから降りた。だが、男は浮いていた。その瞬間。その顔を見た瞬間に、頭に血が上り、怒りが、ほぼ爆発していた者がいた。それは鬪也だった。

「ソウリール……!!!」

鬪也はその名を呟くと、瞬く間に覚醒し、黄色い魂に包まれる。怒りに後押しされるように、地面を蹴り、飛び立つ。

「え!?あれがソウリールなのか?」

「でも、なんで鬪也がソウリールの顔を知っているの!?!」

「っていつか、その前に!」

「相手は、敵の大將よ!一人じゃとても勝てないわ!」

しかし、止める前にすでに鬪也は、ソウリールに突っ込んでいた。覚醒状態のパンチは、並じゃない。大抵のやつは怯む。だが、ソウリールは怯まなかった。いや、パンチを、受け止めている。かなりの力で殴りかかったのかかわらず、片手で受け止めている。あいっている左手で殴りかかって、やはり受け止められる。そして、払われる。鬪也は、ソウリールの周りを、かなりの速さで回った。秋人ほどではないが、速いと思えるほどの速さではあるはずだ。後ろから、ソウリールの真上にジャンプし、右手と左手を絡ませて、急降下する。しかし、ソウリールは後ろにかわし、がら空きになった

闘也の腹にアツパーを叩き込んだ。闘也は、ううっ、とくぐもつた声を出して、ゆっくりと地上に落ちていく。秋人が受け止め、元の位置に戻る。闘也を下ろすと、闘也は、秋人の肩に右手を置いたまま喋った。

「なぜ一人で俺達の様子を見に来たんだよ。父さん」

「えっ、とっ……え!?!」

秋人は状況が半分理解できず、言葉につつかえている。

「あいつ……闘也の親父さんかよ!」

乱州は驚きを隠せないようだ。

「そんな……じゃあ、ソウリールとは……」

的射は、両手で口を覆っている。乱州以上に驚いているようだ。

「闘也とソウリールは、親子!?!」

由利も半ば啞然している。ともかく全員、闘也とソウリールが親子だということに驚いているらしい。

だが、闘也は誰の驚きも耳に入らなかった。今はただ、目の前にいる父に負けたことが悔しかった。嫌だ。このままで終わりたくない。このまま逃がしたくない。今ここで決着をつけて、この戦争も、あいつの生涯も終わらせて、平穩の日々に戻したい。もう、こんな男になんか関わりたくない。そして、こいつの言いなりになるような世界にはいたくない。サイコストの絶滅。地上に立つエスパー。その頂点に立つソウリール。そんな世界、俺は認めない。この命の代わりにあいつも命を落とすなら、安いものだ。一人の人間が死ぬだけで、この意味のない戦いを終わらせることができるのなら。だが、今の自分には、そんな力も権力もない。ただ、仲間の肩に掴まりながら、悪あがきでもするかのように、ただ見つめている。いや、睨んでいる。

「闘也！懐かしき我が息子よ。私のすばらしい計画、エスパー計画に協力しないからそうなるんだ」

「うるせえよ！なにがすばらしい計画だ！なにが我が息子だ！

一人で勝手に世界を治めようとしているやつなんか、世界の統

治者は務まらねえよ！　そして、俺はもうあんたのことを尊敬した父親とは思ってない！　この・・・バカ野郎！」

自分でも制御できないほどに、怒鳴っているのは分かっていた。自分でもここまで怒鳴ったと感じたことは一度もなかった。一度でいいから自分の父親に言ってみたかった。バカ野郎と。あんなやつは、俺が殺す。例え重罪になつたとしても、こいつは俺が・・・

「言いたいことはすんだか、闘也。言っておくが、私に素手で勝てると思うな。その程度の拳で私に勝てるわけがない。断言する。実際、今おまえは、私に、一分足らずで、やられた。私がおまえを殺す気でやったら、今のお前と私なら、十秒足らずで決着がつく。自分が未熟だということを、ちゃんと肝に銘じておけ」

そういうと、ソウリールは、またバイクに飛び乗り、エンジンを発進させた。

「くそ・・・待て！　待てよ！　・・・がはっ・・・」

追いかけてようと秋人を振りほどいて歩こうとした闘也がひざをついた。

「闘也！」

「大丈夫か！？」

絶望的だった。確かに、今本気でぶつかりあえば、少なくとも、負けるのは闘也だ。もし、全員でソウリールにぶつかっていても、闘也は戦力になりにくい。先ほど殴られた腹が、鈍い痛みとなって伝わってきた。

## 12、亀裂

ソウリールが去って、三分くらいしたところだった。全員が沈みかえっているところで、乱州が、鬪也の名を呼んだ。

「鬪也」

鬪也は顔を上げた。なんだ、と返事をしてすぐに、胸倉を掴まれていた。

「てめえ、ふざけんじゃねえよ！」

いきなりなんなんだ。俺はふざけたことなんてない。いつだって本気で向かい合ってきた。仲間にも、家族にも、敵にも、父にも。

「なんで、あんなに怒るまで胸ん中しまってたんだよ！悩みがあったなら、こいつらや俺に、言えば良かったじゃないか！」

「皆には、関係がないと思っただけ……」

「おまえのことで俺に関係のないことなんてねえよ！俺は、お前の相棒だ！お前は俺の相棒だ！ お前がそう思っただけでも、俺は、そう思っただよ！」

乱州は、ずっと掴んでいた胸倉から、手を放した。そして、はき捨てるかのようになり、こう言った。

「俺は、お前のことをもう、相棒だなんて、思わない。仲間にも悩みも打ち明けられないやつが！俺はもう、一人で戦う。お別れだ」

そういって、乱州は、鬪也たちに背を向けた。しかしその瞬間、乱州は振り返り、鬪也に向かって、腕を伸ばした。

いきなりの奇襲攻撃に対応できず、パンチをもろに受けて、倒れる。三人が鬪也に集まっている間に、乱州は走り、姿を消していた。

乱州。お前はそれでいいのか。たった一人で戦う気か。俺と仲直りしなくとも、せめて一緒に戦うべきだ。もちろん、打ち明けなかった俺が悪いのは事実だ。乱州は、自分は信頼されてないと、思ったのだろうか。そうだとしても、そうじゃなくても、俺には何か足りないのかもしれない。あいつは、俺がそれを持っていると信じて

いた。だけど、俺は持っていなかったし、知りもしなかった。本当は、そこに怒ったのかもしれない。

「くそあ、乱州のやつ！鬪也に本気で殴ることないじゃねえか」

「秋人、お前は勘違いしている」

「え、何をだ？」

「もし俺が、あいつの本気の一撃を食らっていたら、この程度の怪我じゃすまない。それどころか、最悪死ぬかもしれない」

「そうだ。あいつの力は並じゃない。だけど、こんな認めることは、俺の知らないことじゃないな。乱州、俺に足りないものはなんなんだ。そして、おまえはそれを持っているのか。俺には分からない。でも、今は、やるべきことをやるしかない。向こうだってそうだろう。そのとき、一人のエスパーが現れた。」

「私の名は八幹部の三部、風の使、フリーユウ。貴様らの抹殺を頼まれた」

「乱州はしばらく逃げていた。追ってくるとは思ってないが、それでも、逃げる。あいつらと一緒に戦いたくない。いや、逃げ出した俺には、もうあいつらと共に戦う資格はない。そんなことをふらふら考えながら歩いていくうちに、声がかげられた。」

「君、サイコストかい？」

「エスパーかと思った。拳を構えながら振り向く。でも、よく考えたら、普通敵ならすぐに後ろから撃つんじゃないかと思った。」

「はい。サイコストです」

そこにいたのは、乱州とほぼ同じ身長少年だった。軍服を着ていて、胸に『saikosuto』という文字が刻まれていた。つまりこの少年はサイコスト軍の兵士……。ということは、この少年は、幼きながら、戦う少年兵というやつなのか？

「もしかして、あなたは、少年兵なんですか？」

「そうだよ。僕は軍に所属している。ところで君は今、これから、戦闘に参加することはできる？」

「はい。大丈夫です。俺の名前は波気乱州。十三歳です」

「僕は木下正人きのした まさと。十五歳だ」

「年上ですね。よろしく願います」

「こちらこそ頼む。それで、実はこの先のほうに、強力なエスパー反応が出ている。乱州には、その討伐を協力してほしい」

正人は、鬪也たちとは逆のほうを指差した。強力なエスパー反応ということ、幹部かもしれない。幹部を倒せば、敵の戦力も削れるし、いい機会だから付き合おう。

そこにはすでに、サイコスト軍の兵が集まっていた。一人一人が、同じ軍服を着ている。正人が通りかかると兵士達は、敬礼した。

「隊長！お疲れ様です。助っ人が見つかったんですね」

「ああ。波気乱州君だ。俺の見込みからすれば、かなりの実力者だ。年下だからと甘く見るなよ」

「了解」

「正人さんって、この隊の隊長なんですか」

「ああ。皆、二十から三十くらいなんだけど、どうやら、協会のお墨付きのサイコストだから、この隊を預ける！とか支部長に言われて」

支部長っていうのは、この間強制招集がかかったときに面会した齊藤正義という爺さんだ。

それにしてもあの爺さん、どうも覚醒に興味津々なんだよなあ。

「ところで、そのエスパーはどんなやつなんですか」

「なんでも、水を使うエスパーらしい。ほら、水って、かなりの速さで噴出すれば、かなりの切れ味を出すって聞いたことあるか」

「はい。いつだかテレビで携帯を真っ二つにしました」

「その力を主に使ってくるらしい。だから、あんまり近づくとその水で一刀両断。ってわけなんだよ」

「強敵ですね」

「まあな。でも、倒せない相手ではないと思う。こちらの軍勢の多さに加え、乱州もいるからな」

「ありがとうございます」

やがて、一人の男がこちらに向かってくる。あれが、水の力を使う、強力なエスパーか。確かに、見た目からしてもかなりの、実力者だ。「我は八幹部の四部、水の使、ウォール。貴様ら全てを、エスパーの神聖なる水で切り刻んでやる」

「エスパーの作り出す水なんてそこらの泥と一緒にだよ！」

乱州はダッシュした。そのうちに身体が浮く。身体を、ふわふわ浮くような身体にした。

「よし！お前ら！あのエスパーに集中砲火だ！急げ！彼が注意を引いている間に！」

「了解！これより、一斉射します」

兵士達が、アサルトライフルで、攻撃を開始した。乱州は尚も前進する。ウォールが腕から水の剣を作り出す。だが、乱州は気にせずドンドン進む。ウォールはその剣を、横に振った。乱州は切られた。いや、わざと切れたのだ。

「おいおい、俺の能力分かってて、そんな攻撃すんの？」

乱州は、身体的能力によって、瞬間的に、上半身と下半身をばらしたのだ。もちろん、それは能力だから、効果がなくなるまで、そうしてられるし、痛みもない。

「お返しだ！ショートアームシンガン近距離連腕打！！」

連続で叩きつける。ウォールは背中から倒れた。いまだ！ここで決着をつける！

乱州はウォールの上に跳んだ。かなり上だ。

「こいつで止めだ！キガントランチャーアーム巨大爆腕打！！！！」

「くそ！その程度の攻撃、我の水の力で、食い止め……」  
ウォールの元で、巨大な爆発が起こる。ウォールはもう動かない。どうやら、周りの兵士達の攻撃もあって、完全なるガードは作れなかったようだ。最後に一発、ウォールの顔面を殴った。本当に動けなくするために。

戦闘後、乱州と正人は、話をした。

「乱州はさ、一人でいままで戦ってきたの？」

「いえ……さっきの戦闘の、一時間前くらいまでは……」

鬪也、遠藤、風見、白鐘。あの四人と共に戦ってきた。けど、鬪也は、俺になにも話してくれなかった。父のことも、過去のことも。

「でも……俺……大切な相棒を、殴ったんです……俺を信じてないと思って……」

乱州は、泣いていた。すごく惨めだ。そして、情けなかった。言いたいことを言って、勝手に人前で泣いて……。相棒も仲間も捨てて……。

「すいま……せん……勝手な……話して」

「いや、お前の話はじっくり聞かせてもらった。お前はちょっとしか今口に出さなかったけど、そのちよつとの中にお前が胸に溜め込んでいたのが、すごいあふれていた」

正人は、戦っているときは、大声で、指示を出して、兵士達を導いていた。だがいまは、ほとんど話さず、自分を受け止めていた。もしかしたら、俺は、これを求めていたのかもしれない。鬪也に。そうだな、あいつはもしかしたら、自分に深い心の傷を残したであろう父を恨んでも、その傷を、自分のなかで治癒し、ここまでやってきたんじゃないのか。そうだろう。あいつは、例えば自分の中にしまいかんだけども、自分で消化させることができる。そうだ、あいつのできることに、あいつにしかできないことがあるし、俺にしかできないこともある。もし、あいつが今敵の幹部と戦っていたのなら、俺にしか倒せない、もしくは、俺がいないと倒せない相手だったら……。

すでに涙は乾いていた。乱州は立ち上がった。こんなところでぐずぐずしてられない。俺は、いつだって、あいつの役に立ちたかった。今でも、きっとその思いは消えてないはずだ。

「正人さん。もう、帰っていいですか。仲間のところへ」

「ああ。いいさ。僕は引き止めない。乱州が決めた道を歩めばいいさ」

「お世話になりました」

乱州はふかぶかと頭を下げ、走り出した。途中のエスパーも無視して、あいつらのところへ戻りたい。でも、余計な敵もお土産につけるわけにはいかない。かなりの大群を前に、乱州は拳を構えた。

### 13、大疾風翼

乱州が逃げて少ししたところのこと。四人は、風の使、フリーユウとの死闘を続けていた。

このエスパ―は手ごわい。どんな攻撃も風で跳ね返すのだ。

「くそつ。こいつに負けないくらいの風が起こせたら・・・」

秋人がいつもながらの走りを見せながら呟いた。確かにこのエスパ―は強い。いままでのエスパ―とは比べ物にならないほどに強い。

風を器用に操ることで、こちらの攻撃をかわし、こちらの自由を奪う。もし、あいつの風に捕まったら、強力な攻撃を叩き込まれることは必然だ。そうなる前に叩かなければならない。もちろん、それを実行しているのだが、やはり、風でやられる。攻撃が当たらない。こちらがやられるのも時間の問題だ。

鬪也の周りが風に覆われる。天井も塞がれている。他のやつもだ。射的の弾もはねかえされ、由利の属性も効いていない。ただ一人秋人は、風の合間を見極めて、脱出していた。少しずつ風の範囲が小さくなっていく。逃げ切るのは不可能か。そのうちに、地面の感覚がなくなっていく。浮いてる！？しまった、掴まったか。風が手足の自由を奪い攻撃できない。

「ちきしょう！」

覚醒。鬪也の体が黄色を帯びる。しかし、それも一瞬だった。覚醒さえも、自由を奪ってきたのだ。成す術がない。くそつ。

「勝てると思ってるのか」

ぼそりと誰かが呟いた。秋人だ。

「俺の風に、おまえ程度のやつが勝てると思ってるのかよ！！！！」  
そのとき、秋人が薄緑に包まれ、背中から、巨大な翼が生えた。秋人が、覚醒した。あの巨大な翼からして飛躍フライの能力から覚醒したんだろうな。高速スピードの能力はそのままに、飛躍と風の力を高めることができるのか。と、鬪也は考えた。

「だあああいしいいつぶうううう!!!」

そう叫び、翼を羽ばたかせたとき、鬪也たちの周りの風は消えた。鬪也は再び覚醒し、秋人の隣に着いた。

「よし、決めるぞ！秋人」

「ああ！分かったぜ」

しかし、そのとき、二人は技を決められなかった。かなり強い力で吹き飛ばされる。なんなんだ一体。さすがに風のあいつの仕業ではないだろう。攻撃はしてないが、向こうは覚醒に怖気づいていたからだ。さすがに強すぎると悟ったのだ。だとしたら考えられるのは、別のエスパーということになる。これだけの力なら幹部か！？

「我の名は八幹部の二部、雷の使、ライラーダ」

このレベルのエスパー二人を同時に相手になんかしていたら、こちらがやられるのは必然的だ。四人じゃとても勝てない。けど、それでも戦うことは、できる。勝てないと分かっても、戦えないわけではない。むしろ、鬪志を燃やす。その答えを覆すのも面白いからだ。

「よし！皆でまずは、風野郎の方をやるぞ！」

全員がフリーリユウに向かっていく。四対一なら、勝ち目はあるはずだ。鬪也と秋人は、空から攻めた。

「そうはさせん！」

突然、それが雲に覆われる。すぐに、雷鳴が響き、鬪也と秋人に落雷した。覚醒状態が解け、ほとんど意識を失いかけた。閉じそうな目には、二つの色の人が映った。もしかして、的射と由利だろうか。的射と由利は覚醒していた。的射は薄桃色を纏い、由利は白に包まれていた。

「私の仲間を、傷つけさせはしない！」

「本番は、ここからよ！」

「このままでくたばるかってんだ！」

秋人が復活する。俺も力にならなければ、と鬪也は思った。初めて覚醒したとき、皆にだけ戦わせて、自分だけが休んだ。悔しかった。

ただその思いだけが、眠りにつくまでにずっとあった。今は、俺が休んだら、絶対に負ける。少しでも俺が皆を支える力とならなければならぬ。

「やるぞおおおお!!!」

「おおおー!!!」

全員のやる気が格段に上がった気がした。いつだって、俺は仲間と共に戦ってきた。たぶん、これからもそうだ。失うのはごめん。例え失うことになっても、それは受け止めなければならない。

「炎神フライランの名の下、悪しき者には恐怖の烈火となり、善しき者には夜道を照らす灯火となる炎を、今ここに呼び覚ます！」

闘也は、ファーガと戦った時のようなすさまじい炎を呼び覚ました。「風神フローラの住みしこの空より、全てを巻き込み、全てを吹き飛ばす暴風を、今ここに呼び覚ます！」

秋人は、いつも以上の巨大な竜巻を巻き起こし、フリーリウを囲んだ。

「水神ティウオーリの作り出される、清き者には命の水を、汚れし者には、全てを飲み込む濁流を、今ここに呼び覚ます！」

フリーリウの周りに、細い水の線が現れたかと思ったとき、その細い線は太くなって、濁流に変わった。由利が、「それなら私は」と言って、さらに続けた。

「土神ドーリアが固めし大地より、土を、岩を、草を、木を、一つの巨大な塊とし、今ここに呼び覚ます！」

一つの球体が現れた。その中には、草やら岩やらがかなりの量が入っている。闘也は、今だ!と叫んだ。

「うおおおおおおお!!!!!!!!!!!!!!!」

全員が、その力を最大まで高めた。四つの力が一つとなる。

「ぬわああああ・・・・・・」

フリーリウはそれによって消え去った。これなら、覆せる。勝てないと思われたこの戦況を一気にこちらの流れとしてひっくり返した。あとは、ライラーダを片付けるだけだ。

「よし、皆…このまま、やつも倒すぞ！続け！」  
「おおおおっ！」

## 14、魂剣、腕剣

ライラーダと、結構な時間を戦い続けている。気のせいなのか、ほんとにそうなのか分からないが……………。

ぜんぜん怯まない。

全くと言っていいほど、命知らずだ。こいつはもしかしたら死を恐れていないのだろうか。もし、それを差し引いても、強いことは強いのだろうが、この行動あってこそ、なのだろう。しかし強い。途中で、サイコストの軍が加勢したが、ほとんど壊滅した。雑魚では相手にならないのか、ただ殺戮しているだけなのか。どっちにしても、俺は戦う。鬪也は突っ込んだ。落雷をなんとかかわし、接近する。拳を構え、殴りかかる。

「そこだあああ！」

しかし、その拳は当たらなかった。かわされたのではなく、隠し持っていた雷を帯びた剣によって返り討ちにあったのだ。

「うぐうっ！」

わき腹から、僅かながらに血が出ていた。そこを押さえて、出血を止めようとする。命中率はさほど高くはなさそうだが、威力はかなりのものようだ。しかし、前を向いた瞬間。雷の玉が飛んできた。かわしたいのはやまやまだが、わき腹全開にしないと、かわせるもんじゃない。万事休すか。

しかし、雷の玉は当たらなかった。かわしたわけではない。(できたらすごいが)雷の玉を返り討ちにしたわけでもない。なにかに守られた。目の前には……………何色というんだろう。ねずみ色というほど汚い色ではない。むしろシルバーという方が近いだろう。腕には、なにかが着いている。なんだ。守ったということなら、あれは盾というのがふさわしいだろう。鬪也は、守ってくれた者の後姿を知っている。

「乱州……………信じてたよ」

闘也の言葉を背中であいたとき、乱州は悟った。俺は、ちゃんと信頼されているんだと。俺を信頼し、尊重し、信じてくれている。俺は、やっぱりあいつの相棒だな。他の誰の相棒にもならないし、なれない。絶対に、こいつについていこう。戻ってきてよかった。

「俺、闘也のこと、信じてやれなかった。けど」

「俺もおまえも、信じあえるし、それを糧にして戦える」

そうだ。俺は、乱州となら

いつでも俺は、闘也となら

戦っていける！

「俺は信じる力を、戦う力に変えて」

「俺は相棒と共に、戦う力を得て」

その瞬間、闘也は、右腕に、右手に、なにかを持った。自分でも分かっていなかった。右手には、一つの剣が握られていた。

「ウエボン武器」

闘也はその能力をぼそりと呟いた。

ウエボン武器の能力は、結構な実力者のサイコストでないと習得できない能力だ。自分の想像によって、自らの武器が生み出される。習得までに時間がかかるし、自由に扱うのも至難の業だが、使いこなせばこれほど強い能力はない。

「魂剣、ソウルソード」

闘也は、その能力によって、一本の剣を作り出した。実際、剣とか弓とか、そういう武器に名前はないし、つける必要もないが、闘也はソウルソードと名づけた。

闘也は、ソウルソードを片手に、ライラーダに突っ込んだ。今度は、返り討ちにあうこともない。ライラーダが剣を振りかざす。闘

也も剣を振り、ガキインと、鉄と鉄がぶつかり合う音がする。つばぜり合いになつたようだ。お互い一步もひかない。しかし、二人とも相手の剣から自分の剣を放した。しかし、ライダーはそこで再び雷の玉を飛ばしてきた。ワンパターンだ。乱州が闘也の前に出てそれを防御した。闘也は、ソウルソードを二つの小さな剣に分裂させた。

「ツインソウルソード」

闘也はそれを持って再び突っ込む。ライダーが剣を振り下ろしてくる。闘也は後ろにかわし、剣を連続で振った。

「魂乱舞」  
たましいらんぶ

何十回と背中を切り刻んだ。乱州が頭を殴り、ライダーはパニックになっている。

「ソウルソード」

再び一本の剣に戻し、乱州に呼びかけた。

「乱州。腕を剣に変える。止めをさすぞ！」

「了解。やってやるぜ」

乱州は左手を剣に変えた。見事な鋼の剣だ。雷を帯びている。それなら、俺もこの剣に属性をつけてみるか。

「ファイヤソウルソード  
「炎魂剣」

闘也の剣に炎が纏われる。二人は正面から突っ込んだ。

「俺は！！！」

「俺達は！」

「負けないっ！！！」

二つの剣がライダークに突き刺さる。ライダークが、そこから、ゆっくりと消えていった。どうやら終わったようだ。乱州も戻ってきて、戦力も回復した。これで、またエスパーと互角に戦うことができる。全員が覚醒したことで、さらに戦力も増えた。

どうやら敵は今日はこれ以上攻撃はしてこないようだが、各地で被害は拡大していた。ここだけではなく、全国各地だ。その地域のサイコストでなんとか、被害を抑えているが、それでも、エスパー

の猛攻は止まらないらしい。だが、ここ以外には、強いエスパー、つまり、幹部が出現していないことから、本部や、もしくは大きな支部が近くにあるのではないかと協会から報告を受けた。闘也たちは今日も、あの穴の中で、一晩過ごすこととした。

## 1、咆哮者 壱（前書き）

このシリーズは読まずともストーリーとは直接関係いたしませんのでご安心ください。

超能力戦争の中、ライラーダとの一戦までで、闘也達全員が覚醒を果たした。

それぞれがそれぞれに強くなり、全員の覚醒からその口をおかずに、この話は始まる。

## 1、咆哮者 壱

超能力戦争の真つ只中、先日全員が覚醒を果たした闘也達は、エスパーの殲滅の中に一人佇む少年を見つけた。年齢としては小学校高学年あたりの年齢だろう。しかし、その目はどうみてもはぐれた家族を探している、といった目ではなかった。それは確実に憎しみの籠った目。

「君、どうしたの？」

的射が少年に話しかける。少年は、先ほどまでの憎しみの籠った目をどこにも残さずにこちらを振り向いた。探している対象の声ではないと判断してだろうか。

「ちよつと、人を探してる」

先ほどの憎しみの籠る目でなければ、このきよんとしたような表情を含めて愛くるしいと思うかもしれない。そう思うほどの表情であつた。

「どんな人？」

由利も近づいて行って少年に聞く。

「銀髪で、目つきの鋭い、お姉ちゃんたちくらいの人」

「ふうん……あ、君、名前は？」

「日中狼次ひなか らうじ。今十一なんだ」

「そうなんだ。私は遠藤的射」

「白鐘由利よ。よろしくね」

狼次の周りに闘也達も近づき、それぞれが自己紹介する。

「みんな、よろしく！」

狼次はにっこりと笑った。そこに少なからず和気藹々とした空気が生まれた。

しかし、その空気もそう時をおかずに崩れ去ることになる。

「団欒としたところ悪いが……」

「!?!」

闘也達はその声の方向を見やった。そこには、十五人ほどのエスパーを従えた男がいた。男の左目の下には、斜めに切り傷が入っている。

「なんだ、お前ら……」

「俺は滝破羅たきはら。銀滝シルバークォールの頭をやらせてもらってる」

「用がないなら、とっとと立ち去ってくれないかな、銀滝シルバークォールとやらの皆さん？」

滝はそれを聞いてふっ、と軽く笑うと、闘也を睨みつけていった。

「俺達は命令で動いてるんでな。その命令を実行するだけだ！」

そう言いながら滝が指示を出すと、後方で今か今かと出番を待っていたエスパーたちが動き出した。

「上等!!」

闘也と乱州が真っ先に飛び出す。闘也は三人の魂を出現させ、自らは剣を握る。進路を塞ぐ二人のエスパーが繰り出す拳を、姿勢を低くしてかわすと、その二人の心臓へと剣をそれぞれ突き刺す。そのまま剣を滑るように抜き取ると、更に前進していく。先行していた魂が二人のエスパーと戦っている上を飛ぶ。そこに一人のエスパーが躍り出てくる。そこにもう一つの魂が飛びついて墮ちる。間髪いれずに眼前に躍り出たエスパーを左手の剣で切り裂くと、両足で着地し、また走り出す。

六人ほどのエスパーが前方を塞ぐ。そのうちの端の二人が、的射の銃弾によって頭を撃ちぬかれて崩れる。

更に接近したところでまたも塞がれた進路を、秋人が吹き飛ばす。前方を塞ぐエスパー三人を余裕の体でかわし、最後の関門のように迫る一人のエスパーへと右手の剣を突き出す。エスパーはその攻撃をかわしてみせる。闘也は振り向きざまに左手の剣を投擲する。完全に意表をつかれたエスパーの体が両断される。

「邪魔すんなよっ!!」

闘也は滝に向かって剣を突き出したが、それを華麗にかわされる。追撃に出ようと剣を振る。しかし、その瞬間に滝は消えた。

「何っ!?!」

真横に気配を感じる。滝が姿を現し、手刀の形にして腕を突き出してくる。

「だがっ!」

鬪也はその攻撃を容易に回避してみせる。だが、かすりもしなかったはずの場所から血が流れる。

「なんだこれはっ!?!」

滝の口元がにやけている。鬪也は剣を振ろうとしたが、その瞬間に滝が消える。今度は背後からの気配。しかし間に合わなかった。背後から滝の蹴りが入る。まるでなぎ払うように繰り出されたそれは、そのまま鬪也の切り傷になっていた。鬪也はそのまま転がりながら倒れる。

「どうした?その程度か?」

滝が不敵に笑う。鬪也はゆっくりと立ち上がる。そして、その口を開く。

「瞬間移動か……」

「残念。俺の能力の一つは、透明だ」

鬪也はどうか体勢を立て直す。滝がその顔に不敵な笑みを浮かべながらゆっくりと歩を進める。

「そしてもう一つは……」

そう言いながら消えた滝が、すこしばかり距離のある場所で腕を振り下ろした。振り下ろしたのと同様の場所から血が流れる。腕は直接触れてはいない。

「切断」

「鬪也あ!?!」

乱州腕を上空から伸ばしてくる。滝は伸ばされた腕の先の拳をかわすと、その手首部分に重なる場所で腕を振る。乱州がすでに腕を縮めていたため、ダメージは防いだ。

鬪也は覚醒し、その体に魂の黄色を纏う。

「ほお……お前が噂の覚醒者か。っーことは、他の奴らも

かな………」

滝がそう呟いたときには他の四人も覚醒して今にも攻撃を開始するところであった。

「いいもん見せてもらっただし、今回はおいとまさせてもらいますか」  
そう言っただけは姿を消し、闘也達に攻撃をしかけてはこなかった。

「げほっ………」がほっ………」

「闘也！ 大丈夫か？」

血を吐き出した闘也は覚醒が解け、膝をついた。

「あれっ？」

的射が異変に気づいた。

「狼次君は？」

戦闘が始まる前まではいた狼次はすでにどこかにいなくなってしまう。戦闘に集中しすぎたせいであろう。

「それより………」滝の言葉、覚えてるか？」

闘也は苦し紛れに全員の意識を集中させた。

「自分達は、命令で動いていると」

「命令されるとしたら………」ソウリールじゃないのか？」

乱州の予測は最もだ。だが、何か引つかかる感じがあった。

「組織名の銀滝。滝が頭トツということは、銀の方にも頭トツがあるんじゃないか？」

「銀っていう名前のやつとの双頭ツツ？」

「そして、ここからは俺の推測に過ぎないが………」

そう言っただけは、自らの推測を話し始めた。

## 2、咆哮者 貳

鬪也の推測は始まった。

「さっきの狼次の探していたやつは銀髪という話だったな」

「それと関係が？」

「シルバークォール銀滝のもう一人の銀かもしれない」

「まさか」

秋人が否定的な意見を上げる。

「あくまで推測だ。そして恐らく、シルバークォール銀滝も、狼次を狙っていた」

「はあ？」

秋人が声を上げる。あまりに馬鹿馬鹿しい考えだと思ったんだろう。それでも仕方ないのは分かっている。どう考えても自分の考えは筋が通っていないのだ。

「そして、俺達と行動を共にすれば、いつまでも銀とはめぐり合わない、と思って抜け出した」

「まあ、筋は通っちゃいないが」

乱州が切り出した。

「とりあえずは、その線でいこうぜ」

乱州が上手くとりまとめくれたことにより、五人の意見は一致し、その方向での考えで行動を開始することにした。

「銀！！ 噂の覚醒クンとやりあってきた」

少年の姿を見るなり、滝はいきなりその話題を切り出した。銀と呼ばれた少年は半ば呆れ気味に感想を聞いた。

「どうだった？」

「覚醒するときは五人一斉にしたけどな、その前は大したことなかったな」

「ターゲットで？ 目標は？」

「………あ」

滝はそのことについてはすっかり失念していた。鬪也達を弄ぶのに夢中で、結局そちらのことを完全に忘れていた。

目の前の銀が明らかに怒りに震えているのが目に見えて分かった。どうにかしてこの状況を打破し、これからの時間をゆったりまったり過ごせるようにしなければ。

「滝………」

「あ、いやあ……ちゃんと思っけはしたんだけど……その……ガードが堅いというか……」

「貴様というやつは……」

まずい。このままでは確実に雷が落ちる。自分は任務を果たせなかったのだ。銀は強くて魅力的だが、ガミガミと説教垂れるところは自分と合わない。

諦めかけたその時、銀の端末が呼び出し音を鳴らす。助かった。あわよくばこのまま逃げ出せることもできなくもない。

「そうか。分かった」

ゆっくりと後ずさりをしていたところで銀がこちらを睨みつけた。

「狂が発見したようだな……」

「え……ああ……そうなんだあ……」

「滝……」

「ひいひいっ……」

鬪也達は別行動をとり、鬪也、秋人と、乱州、的射、由利の二つに分かれて行動していた。

狼次を見つけたのは、乱州達であった。見れば、すでに何者かと接触している。狼次が後ずさりしている。明らかに嫌がっているのが目に見えていた。狼次を追い詰める男の後ろには、ただのお供のように、四、五人のエスパーがいた。狼次が嫌がっているところを見れば、狼次が銀を探しているという面での鬪也の予想は外れていると見える。その逆は当たっていると思われるが。

「おい、待てよ！」

「なんだ、お前」

その顔には表情という者が無かった。

「ら、乱州！」

狼次が驚きの顔を見せている。

「命令は達成しなければならぬ」

「お前、シルバール銀滝か！」

「それがどうした」

無表情のままに、男は狼次に近づいていく。乱州は狼次の前に立ち、静止を呼びかけた。

「お前、やめなさいな、こんなのはよ」

「この方をお前呼びわりするな！ この方は銀様の側近たるはな葉桜狂きょう様だぞ！」

近くにいたエスパーが乱州に向かって言い放ってくる。

「言葉をつつし……」

「うるせー！！」

そう言つて腕を伸ばして狂の両脇にいたエスパーを殴り飛ばす。しかし、その瞬間に狂に掴まれる。そのまま乱州はどうすることもできずに投げ飛ばされる。腕なり脚なりで反抗できたはずなのに、それができなかつた。

「出た！ 狂様のスロウ投擲！」

残っている二人のエスパーが歓喜の声を上げる。乱州は空中で覚醒する。的射と由利も覚醒する。狂が近くにあつた瓦礫に手をつけると、片手でそれを鷲掴み、こちらへと投擲してくる。乱州は腕に装着した盾でそれを防ぐ。狂が連続で瓦礫を投げつけてくる。乱州は飛んできた瓦礫へと腕を伸ばし、日と一つ砕いていく。

「くそつ、きりが無い！」

腕を伸ばして、それを引いてからまた伸ばす間のタイムラグが問題で、じきに限界が来る。だが近づきすぎれば、幾つか通らせてしまう可能性が高くなる。

「乱州！ 左！！」

由利の声が聞こえて乱州が振り向いたときには、瓦礫が高速の回転を持ちながらこちらに弧を描いて向かっていった。

「つつ……！！！」

乱州に瓦礫が直撃する。乱州は瓦礫に吹き飛ばされ、地面に着地する。狂がまた瓦礫を投げる。

「ギガントロングタブルアーム巨大長距離双腕打！！！」

乱州は両腕を巨大化させ、右腕を突き伸ばす。その巨大な腕は、瓦礫を一気に破壊する。それと同時に、乱州は左腕を狂へと伸ばす。狂が乱州の拳を受け止め、投げ返そうとしている。乱州は振り投げられぬように耐える。乱州はもう一方の腕も狂へと向ける。

「これで、終わりだつ！！！」

しかし、乱州の腕は、狂を捕らえなかった。

乱州の右腕は、別の者が受け止めていた。しかも片手である。

「静儀、遅いぞ」

「すまない、靴下選ぶのに手間取った」

片手で受け止めている。完全に受け専門と思える能力。

「キャッチ捕捉か……！！！」

「そこつ！！！」

乱州がその能力名を呟くと同時に、的射が銃弾を発射する。静儀と呼ばれた少年に当たると思われたが、鮮やかな腕の動きでかわされる。

その時、狂が乱州の右腕を弾く。乱州が再び狂へと腕を持っていくまでに、狂が掴めるだけの瓦礫を掴み、こちらへと投げつけてくる。乱州だけではない。狼次にも迫っていた。

「狼次！」

「拡散雷」

由利がその杖を振って雷を広範囲に拡散させる。全ての瓦礫に雷が命中し、ばらばらと崩れ去る。

「こいつはどうだつ！！！！！」

乱州は腕剣に変えて再度静儀へと振り下ろす。静儀が白羽取りでそ

の腕剣を受け止める。

「的射!!」

「了解!」

的射がその体を地面に水平にした状態でスナイパーライフルを構える。その銃弾が発射され、静儀の頭部を撃ち抜く。乱州は更に力を入れて、静儀を切断した。

「おっと……逃げられたか……」

乱州は一つため息をついた。

「とにかく、狼次連れて鬪也のどこいくぞ」

今度は狼次はいなくなったりはしていなかった。まああの戦闘の中を潜り抜けられたとは思えないが。

銀はゆっくりと腰を上げた。滝が嬉しそうに顔を上げた。それも無理はない。何故なら、滝は今までずっと説教を聞き続けていたからだ。

「雷狼様、滝様、せいじょうせいぎ静柔静儀がやられました」

一人のエスパが状況報告を行った。シルバウォール銀滝の守り手、静儀がやられた。おそらくあのサイコスト達によってだろう。大方の予想はつくし、恐らくは当たっているだろう。

「滝、出るぞ」

「は?」

滝は分けの分からない表情で銀の顔を見つめた。何を始めるつもりなのか全く分からない。

「な、何をするつもりで……?」

銀は呆れた様子のため息をつくとき、いまだに状況が理解できていない滝に向かって一言、指示を出した。

シルバウォール「銀滝、全軍出撃だ。奴らを一気に叩く!!」

「おお! やってやるう!!」

滝は勢いよく立ち上がり、そのやる気を見せた。

### 3、咆哮者 参

戦闘の三日後。銀滝シルバークォールが間もなく、全軍で攻め込んでくることは、鬪也達はすでに掴んでいた。向こうの狙いは恐らく狼次。そして、こちらを徹底的に潰すこと。ここで決着がつけられればいいのだが。

「狼次」

鬪也は後ろにいた狼次に振り返った。その目には一点の曇りもなく、こちらをじっと見ている。ここに残る気は恐らくないだろう。向こうの狙いの一つが狼次である以上、彼を戦闘の中に置くわけにはいかない、というのが本音ではある。鬪也は駄目もとで口を開いた。

「お前はここにのこ……」

「いやだよ！」

強い口調で否定される。何が彼をここまで動かすのかは分からない。能力がないであろう狼次が、超能力者同時の戦いの中には、いつかその身を滅ぼすことになりかねない。

「僕だって、探し人がいるんだ」

その視線は、小学生とは思えないほど真っ直ぐで、全く揺らぐ気配がなかった。何かを訴えているのはよく分かる。だが、それが何なのかは分からない。子供の考えることは分からない。どうであれ、狼次はまだ小さい。鬪也達よりも年上の相手とやりあって勝てるとは思えない。

「……」

数秒間、狼次をじっと見続けた。体は背を向けているが、その目だけは狼次を見続けた。彼の覚悟を、その決意がどれだけ丈夫であるかを確かめる為に。

「……行くぞ」

そう言つて鬪也は視線を外し、ゆっくりと歩き出した。一段ずつ踏みしめながら段差を上る。他の四人も上つてゆく。最後尾の狼次も上つていくが、その途中で段差につまずいて転んだ。

「ぐふう………」

「大丈夫か!？」

そんな他愛も無い会話も、それが最後であったのは、言うまでもなかった。

シルバーウォール  
銀滝との戦闘が近づいてきていた。三方からsエスパイ反応がある。三方全てから一つずつ大きな反応がある。先日、乱州と戦った狂という男、滝、そして、銀。誰がどの反応なのかは分からない。  
「左側から攻め込む」

狼次を含む六人で左側のエスパイ反応へと向かう。その反応が近く、大きくなっていく。肉眼で確認できるころには、それが誰であるのかが、六人全員が確認できた。

滝破羅。シルバーウォール 銀滝のトップ。

闘也は覚醒して臨戦態勢を整える。乱州、的射、秋人、由利もまた、それぞれ覚醒し、滝を迎え撃とうとしていた。

「おそろいのところではじめましょうかあ!!」

滝が威勢良く声を上げると同時に、彼の背後のエスパイ達が飛び出す。的射が上空から狙いを定める。正確な射撃は、走り続けるエスパイの頭部を確実に貫き、一人、また一人と、着実にその数を減らしている。

「まあ、雑魚じゃ相手にならないよねえ………」

そう言つて滝が透明ステルスの能力を発生させ、視界から消える。地面を蹴る音が聞こえる。その音が的射の下で消えた。

「的射! くるわ!」

由利が叫ぶとほぼ同時に、滝が的射の背後に出現し、腕を引く。闘也は慌てて魂を呼び出して、的射の背後に向かわせた。間一髪で切断されたのは魂であった。焦りの感情が働いたために、その攻撃一つを受けて魂は消滅した。

「闘也!」

「油断するな、次が来る」

その言葉通り、滝が再び腕を引く。秋人が突撃し、その腕が突き出される前に怯ませる。鬪也がそれに引き続くように滝に接近し、追撃を試みる。しかし、飛び出して間もなく、腕を掴まれ、そのまま地面に投げつけられる。

鬪也が地面にたたきつけられて間もなく、一人の男が地面に着地する。

「葉桜狂！！」

乱州が鬪也を叩き付けた男の名を叫ぶ。投擲スロウの能力を持つ男。

（鬪也。狂には近接戦は不利だ。掴まれたらほぼ確実に投げられる）  
乱州が狂についての情報をテレパシーで伝えてくる。それなら、遠距離戦の方が確実に有利であるはずだ。

（由利！ こいつを頼む！）

鬪也は由利をテレパシーで呼び、狂の相手をしてもらおうように頼んだ。由利は快く承諾し、鬪也は滝の方へと向かう。

鬪也は上空での射への攻撃を外した滝へと接近する。滝は鬪也の接近に気がつくと、透明ステルスを発動させてその視界から消える。当たり前のように、鬪也の攻撃はかわされる。地面に着地する音を聞いた鬪也は、そこに剣を投擲する。しかし、手応えは無かった。恐らく回避したのであろう。足音を頼りに、一箇所を横なぎに剣を振るう。しかし、全く手応えはなく、鬪也は着地する。背後からした気配に振り返って右手の剣を振る。出現した滝がその剣を紙一重でかわしてその腕を突き出してくる。

「ぐっ……」

後方にステップするが、切断カットの能力が鬪也を捉える。深くはないが、確実に攻撃が当たった。滝が左手を振り上げて、それを勢いよく振り下ろしてくる。もちろん、狙いは鬪也であり、その鬪也との間にも間がある。

「それなら……」

鬪也は予測のままに剣をその腕の進路と同じ場所にかざす。そこに、確かな感覚があった。これは……金属の感覚。鬪也のソウ

ルソードとぶつかったときの音はまさしく金属のそれである。

「防がれた!？」

滝の驚きに追い討ちをかけるように、剣を押し返して反撃の突きを繰り返す。しかし、二本に分割し、その手数を増やすツインソウルソードでは、その刀身が短いせいで、滝の体まで届かない。闘也は左手のソウルソードで滝の腕を切断しに行く。しかし、その腕に到達する前に、何かに剣の進路を防がれる。またも金属音。腕の横にも、その刀身がある。よほどの大きさか、複数の剣がなければ不可能だ。

「それでもっ!!」

闘也は入れるだけの力を入れてその腕を弾いた。滝の右手腕から何かが現れる。それは巨大な刀身であった。

「あんな刀身ものがあつたなんて……」

しかし、引つかかることはある。切断カットの能力は人の目には基本的には視認不可能な刃を使って攻撃する能力である。だが、その正体がこんな刀身であるとは聞いたことがなかった。

「滝、お前、能力は切断カットじゃなくて……」

闘也が漏らした疑問、そしてその答えは当たった。滝がゆっくりと闘也の質問に答える。

「巨大剣ライジソード」

巨大剣。所有者の腕よりも太い刀身を持つことができる能力である。腕を剣のように振ることができるので、イメージトレーニングや戦闘のための筋トレなどもしやすいのが特徴である。

それが通常時になぜ見えないのかは、もう一つの能力、透明ステルスにあるだろう。恐らくは、その能力の体質に剣の方が勝手に反応して透明になっていたか、もしくは、滝が透明ステルスに関して能力暴走を起こしたかのどちらかだろう。しかし、後者では能力制御が不安定になるため、先ほどまでのように、任意で消えたり出現したりするのは難しいはずだ。

「とにかく、能力が分かった以上、こちらが貰う」

「目の前の相手にばかり集中して、大事なことを見失ったらお終いだぜ、魂波鬪也君」  
その瞬間に鬪也に襲い掛かったのは、鼓膜が破れるほどの巨大な、それは巨大な、まるで核爆弾の爆発のような、文字通り爆音であった。

鬪也と滝が戦闘に突入したところ、由利、的射は狂との戦闘に入っていた。鬪也達が考えた通り、向こうは物を掴み、それを任意の場所に投擲できることができる。だが、それは実体のあるものであり、由利の起こす雷のような、はつきりとした形のないものは掴みようが無い。掴もうと腕を伸ばせば、その雷の餌食になるだけなのだ。

由利と的射は、確実に狂を追い込んでいた。向こうはまともにこちらの攻撃を掴めないのだ。瓦礫などに寄り付こうとすれば、的射の銃弾がそれを拒み、そのまま追撃に移るものであったが、いまだ決定打は与えられていなかった。向こうは、こちらの雷の進路予測を立て、それを的中させて回避する。狂の背後にある金属棒を時折こちらに投げつけ、避雷針の役割を行ったりもしている。しかし、狂がそれを防いだところで、的射の銃弾は対処のしようがないのだ。  
「由利、一気にこれでなぎ払う！」

的射がスナイパーライフルの銃口から高圧の水を噴射させる。そして、それをそのまま狂へとなぎ払う。

しかし、的射の行動は裏目に出た。  
狂がその迫る水を掴んだのだ。実体のある、確かに握れるもの。その瞬間、的射が放った水は全てが狂の下に集約される。由利が向こうの攻撃阻止のために雷を放つが、避雷針を投げられて上手く攻撃が届かない。

「的射！！離れて！」  
由利が叫ぶと同時に、その水球が発射される。的射は狂から距離を取る。そこに由利が火球を作り出し、それを水球へと飛ばす。

由利の予測どおり、水球と火球は接触した後、盛大な爆発を行う。

由利と的射はその爆風の大きさを想定に入れておらず、予想外の大  
きさに、大きく吹き飛ばされる。その時、二人の攻撃は完全に途絶  
えていた。その隙を狙って、狂が大量の瓦礫を投げつけると同時に、  
その瓦礫で覆われた家を持ち上げる。

「まさか、あれを投げつける気!？」

的射の驚愕はもつともである。由利と的射はそれぞれが瓦礫の処理  
に追われてそちらに攻撃する暇がなかった。

「こうなったら、吹き飛ばすしかない……」

由利は、向こうが投げつける前に、その風を少しづつ呼び寄せ、溜  
め込んでいく。一発に台風の比にならないほどの暴風を巻き起こせ  
ば、すでにその地面から離れているものは容易く飛ぶというものだ。  
しかし、由利が暴風を起こそうとしたのも、狂が家を投げようと  
したのも、一時的にであつても行われないこととなる。

彼女らに襲い掛かったのは、まるで狼がその爆音を誇張したよう  
な音だった。

闘也が聞いた爆音が収まったとき、闘也はその方向を見た。そこ  
には、一人の男がいた。銀のジャケットを着た男は、闘也を見ると  
僅かにその口を綻ばせたが、すぐにまた引き締まった。

「あんたが、銀か」

「お察しの通り、俺が雷狼銀だ」

丁寧な自己紹介の後、銀は更に続けた。

「俺の能力は今ご披露したとおり、咆哮だ」

咆哮。確かに、先ほどの爆音も納得がいく。しかし、何故、咆哮の  
能力者がリーダーを勤めているのだろうか。闘也には、咆哮による  
攻撃方法が、その爆音のような声しか思い当たらない。

闘也は、銀の方へ向かおうとしたが、それを別々のやり方で二者  
が妨害する。一人は、先ほどまで戦っていた滝。その剣を拾い、す  
でに見えなくしていた。闘也を進ませんとしているのだろう。しか  
しそこに、先ほど他のエスパーを殲滅させた乱州と秋人が加わる。

鬪也の前に立ち、滝と対峙する。

「鬪也、この透明野郎あかくびょうものは俺達がなんとかしとく」  
「分かった」

鬪也が進み出て、ゆっくりと銀の方へと向かっていく。滝がこちらに右腕を突き出してきたが、すでにその対処法を心得ている鬪也を左足に体重をかけ、ソウルソードで滝の透明な剣を受け流した。追いつがるうとする滝を、乱州と秋人が攻撃する。

進み出た先に、鬪也の進路を拒んだのは、自らよりも背の低い少年。こちらに背を向けたまま、銀と対峙する狼次であった。

#### 4、咆哮者 四

目の前を塞いだ狼次に鬪也は聞いた。

「狼次、何してるんだ。向こうはお前を狙ってるんだぞ」

「僕だって、探していたのはあいつだ」

そういうと、狼次に変化が見られた。鬪也は驚愕した。狼次がサイコストのオーラを纏っている。今まで超能力者サイコストの感じを全くさせなかったのに、ここにいたっていきなり能力を習得したのか、それとも、ここまで能力を自ら封印したのか。どの道、このときになって能力を使うつもりになったのは事実である。だが、まだ狼次は小学生だ。

「狼次、下がってる。どんな能力であっても、お前はまだ子供だ」

「僕がやる。僕がやる義務がある」

狼次が反乱してくる。戦う気は確かにあるのは分かる。しかし、それだけではどうにもならないことがあるのだ。

「お前はまだ子供だ。こんなところで命を……」

「子供だからなんだよ！！ 小学生だからなんだよ！！ 僕は、子供でも小学生でも」

狼次がここまで大きく反論してくるとは思わなかった。今まで脳内に構築されていた狼次のイメージが崩れていく。

「男だ！！」

そうだ。彼にとって、何かに縁取られて自分のやりたいことができなくなるのが嫌なのだろう。自分も、中学生だからと戦うのを否定されても、彼のように、何かしら反抗するだろう。どんな理由であろうとも、自分のやりたいこと、やらなければならないことを抑えてはいけないのだろう。自分がやるのが正義ではなくとも、躊躇わない。躊躇うだけの理由がないから。敗れて後悔はしなくとも、躊躇って、諦めたら後悔するのだろう。

「なら、俺も戦おう」

「駄目だ。これは僕の戦いだ」

「俺にだって義務はある」

そう、結局こうなったのは、最終的には自分の父親、ソウリール・エスパーの仕業、ということになる。父親が起こしたこんな戦争<sup>こと</sup>を止め、その責任を償うのは、息子である自分の役割。義務。自発的に行動しているこの戦いを、一日、一秒でも早く終わらせる為に、自分は敵を何としても食い止めなければならない。それが自分に課せられた使命であり、義務だ。

「分かった。いこう。一緒に」

狼次がこちらに一瞬微笑んで見せると、すぐにその顔を引き締め、息を吸い込んだ。その瞬間、狼次が爆音と形容するのに相応しい声を張り上げた。

「狼次も………咆哮<sup>バインド</sup>………」

やはり、この二人にはなにかしらの因縁があるのだろう。鬪也はソウルソードを構えると、狼次の咆哮が止むと同時に飛び出した。

乱州と秋人は、滝を相手にし始めていた。鬪也に、滝の情報を求める。以前のような切断<sup>カット</sup>と透明<sup>ステルス</sup>のコンボで来るのか、別方法で来るのか。

（乱州。滝の能力は切断<sup>カット</sup>じゃなく、巨大剣<sup>ライジンソード</sup>だ。体質<sup>スキルオーバー</sup>が能力暴走だろう。あいつの剣をはじけば、攻撃をある程度制限できるはずだ）

「了解！」

乱州は右腕を伸ばす。しかし、乱州の腕が到達する前に、滝が透明になって視界から消える。乱州は攻撃に備えて腕を剣へと変形させる。滝が真正面に出現する。乱州は振り下ろされた腕に腕をかざす。金属の感覚があった。乱州は左腕で押さえながら右腕で更に押し付けた。滝が弾かれ、その剣が出現する。

「秋人お！」

「あいよ！」

秋人は飛び出すとほぼ同時に、滝の顔面へとその拳をぶつける。そ

ここに乱州が飛び出し、滝の右腕を切断する。秋人が再び飛び出して胸部を殴りつける。しかし、滝が耐えた。滝は僅かにその顔をにやけさせると、左腕を振り下ろす。乱州が割り込み、その剣を受け止め、情報へと弾く。滝が左足を乱州へと回し蹴る。乱州がその進路に置いた腕剣と、ガチツという音を立てる。

「ここにも刃があんのかっ！」

滝が逆回転して乱州の氣勢を削ぐと、足裏で蹴りを入れてくる。乱州はくぐもった声を上げる。と同時に、滝は弾かれた左腕の剣を空中で掴み取り、秋人へと振り下ろす。秋人も回避行動を行ったが、完全に回避するには至らなかった。

「痛いっの！！」

そういうなり、秋人は消える。いや、まるで消えるように高速で走り出したのだ。困惑した滝の左肩を腕剣で貫く。そのまま腕を滑らせ、左腕をも切断した。そこに秋人が高速で走りながら滝の後頭部を殴りつけ、そのまま自分は飛び上がる。

「さよならだ！ 滝破羅！！」

完全に対応策を失った滝の胸を、乱州は腕剣で両断した。

一度は中断された由利の暴風と、狂の家の投擲は再開される。的射が狂を狙い撃って決着させようとするが、増援のエスパーを相手にしなければ、ならず、仕方なく近距離用のハンドガンを両手それぞれに持って応戦している。

「これでお前らを潰す」

「返風 超暴風！！」

狂が投げつけた家に、暴風を吹き付ける。止まらずにそのままこちらに家が突っ込んでくるが、由利は構わず風を吹かし続けた。

「横風 超台風！！」

その声と同時に風向きが変わり、的射と戦っていたエスパー達が由利を潰そうとする家の前へと持ってこられる。エスパー達は、持っている爆弾やロケット砲などでわが身を守るのに必死になり、家を

破壊する。

「おい！ 何をしている！！」

狂が怒鳴る。それもそうだ。味方の攻撃を無力化したのだ。たとえばそれが無意識に自己防衛した結果であつても。

「ロングレンジスナイプ長射程遠距離狙撃」

的射はスナイパーライフルを構え、狂へと狙いを定める。狂が瓦礫を的射へと投げつけ、その銃撃を阻止しようとしている。

由利が飛んできた瓦礫を雷で全て破壊する。その破壊作業の間に、的射の中で多くの計算が成される。目標との距離、およそ五百メートル。湿度、温度、風向き。風力。最大誤差、右に〇・五メートル。「発射つ！！」

的射はその銃弾を放った。鉛の弾丸は、そのまま狂の脳を貫き、背後へと抜けていった。

闘也、狼次と銀との戦闘は、未だ始まったばかりであつた。闘也は飛び出し、銀へとその剣を振り下ろす。銀がその斬撃をかわすと、咆哮を放つ。その声量は、衝撃となつて闘也の体に襲い掛かり、吹き飛ばされる。覚醒していたために、地面に体が転がる前に、空中で体勢を立て直す。そのまま剣を握つて直進する。狼次が銀の横から咆哮を浴びせかけている。闘也にも少なからず影響があるが、耐えられないほどではない。

闘也は潜り込むようにして脚部へと剣を滑らせる。しかし、その剣は銀を捉えることなくすり抜ける。銀が自らの拳に咆哮を浴びせる。

「何だ？」

闘也が疑問を抱いたときに、銀の拳が衝撃波のようなものを纏っていた。それはまさしく、咆哮の力を拳に纏わせているものであつた。闘也は振り返つて再び剣を振る。しかし、それをしゃがみこんで銀がかわし、そのまま、拳を闘也へと打ち付けてきた。強烈な打

撃であつた。そこから衝撃が一気に加速する。拳を相手に当ててから、一気に咆哮のエネルギーを放出する。集中的にその部分を攻め立てられるのは向こうの大きな有利要素だ。<sup>アドバンテージ</sup>

「がっ……」

鬪也はその衝撃に耐え切れずに吹き飛ばされる。どうにか地面を転がることなく体勢を保つが、そこに再び銀の拳が突き刺さり、衝撃が押し寄せる。アッパーするように腹部に潜り込んだ拳の衝撃で、鬪也は上空へと叩き上げられる。そこに狼次が突っ込む。狼次もまた、銀のように拳に咆哮を纏っている。それらを連続で銀へと振るっていくが、その全ては銀の華麗な身のこなしで何も捉えられなかった。銀が左拳で狼次の顔を殴りつける。咆哮が纏われていなかったが、それでも十分な威力で、狼次が吹っ飛ばされる。それと同時に、銀が自らの拳に咆哮を浴びせる。

（一度放つたら再装填が必要ということか）

鬪也は、そこに勝機があると感じた。向こうが再装填、もしくは咆哮を纏っていない時に攻撃するのがいいだろう。しかし、今現在その両拳に咆哮を纏っているため、まともな攻撃ができない。

「これでっ！！」

鬪也は握っていた剣を投擲する。高速回転しながら銀へとその剣は向かっていく。銀はその剣の方を見やると、咆哮を放って剣の勢いを抹消した。

「くそ………咆哮が強いな」

「その程度で突き抜けられると思うな」

銀がこちらを睨みつけながら言い放ってくる。

鬪也はツインソウルソードを構える。狼次がその咆哮を銀に浴びせると同時に接近する。鬪也が剣を振る。銀がそれに応じるように咆哮を纏わせた右手を突き出してくる。拳を切り裂けるかと思つたが、その考え諸共、衝撃によって剣が碎かれる。

「音は、気体よりも、液体や固体の方が早く通れる」

鬪也は碎かれた剣を尻目に、左手に構えた剣を突き出す。しかし、

その攻撃をあつさりとかわしてみせた銀が突き出された剣に拳をぶつけ、いとも容易く砕く。

「音は振動だ。内部で揺さぶれば、意思のない物体は壊れる」  
先ほど投擲した剣の勢いをとめたのもその原理だろう。爆音を利用して空気を大きく振動させ、空気運動の流れを強制的に変更することにより、剣には不規則な力が加わる。そうならば自ら動く意思を持たぬ剣はあつけなくその勢いを失う。

「お前の武器など、俺の前では無力だ！」

鬪也は、左手にソウルソードを形成する。銀が咆哮の体勢に入り、息を吸い込む。その咆哮が吐き出される前に、鬪也は開いている右手で素早いストレートを銀の顔面へと繰り出す。銀が咆哮しそこね、体勢を一時的に崩す。鬪也はその機を見逃さなかった。瞬間的な加速で銀の眼前に躍り出ると、銀の胸を袈裟懸けに切り下ろす。しかし、距離が僅かに足りずに、両断とまではいかない。

「うおおおおおつ！！！」

狼次が両手それぞれに咆哮を纏った状態で銀へと突進する。銀は拳に咆哮を再装填すると、狼次へと向かう。狼次の左拳と銀の右拳がぶつかり、互いの咆哮を殺す。しかし、銀はすでに次の行動を起こしていた。銀が突き出した左拳の衝撃が、狼次の顔面を捉えた。

狼次が、その衝撃に耐え切れずに吹っ飛ばされる。

「狼次いいいいいいつ！！！！！」

## 5、咆哮者 五

狼次は大きく吹っ飛ばされ、体勢を立て直そうと足をついて滑るように勢いを止めようとするが、勢いに負け、そのまま転がる。狼次はすでに、立つこともかなりの苦勞であることが目に見えていた。「お前……」

鬪也の中での怒りが大きくなる。その瞳は怒りに煮えたぎる。鬪也は魂を作り出す。その数は二体。

「そんなもの!!」

銀がその魂に向けて息を吸い込む。その魂を砕くため。

「よく言うよな。魂を揺さぶる音とか」

鬪也は呟くようにぼつりと言う。それと同時に銀が咆哮を放つ。その咆哮に包まれた魂が、その勢いを更に加速させて銀へと接近する。「何っ!？」

それぞれが銀を殴りつける。銀は拳に咆哮を再装填すると、向かっていく魂へと拳を打ち付ける。すると、先ほどよりも魂は強力な殴打をお見舞いした。

「俺自身は魂を取り込んで能力強化されているだけだが……」

「ええい!!」

銀が苛立ちの表情を浮かべて、何も纏わない拳で魂を殴りつける。だが、先ほどの咆哮と怒りの感情が相まって、消えうせたりはしない。

「魂そのものは、別だからな」

再び二体の魂は銀の顔面を殴りつける。銀は両拳に咆哮を纏わせる。「鬪也!!」

乱州達が駆けつける。滝と狂はやられたのだろう。どうにか立ち上がった狼次の前に、鬪也はゆっくりとその足を地につける。

「まとめて、吹き飛ばす……」

銀が息を吸い込む動作を行う。鬪也は後ろの仲間へと指示を出す。

「秋人」

「秋人が速いが、秋人が飛び出し、銀の咆哮を阻止すると、由利がその進路を落雷で塞ぐ。そうして動けないところに、的射が銃弾を叩き込み、左腕、そして、その左腕の咆哮も無力化する。それを感じているころには、すでに乱州が上空に飛び出し、右腕を突き伸ばす。その拳が銀の顔面をしたたかに打ち付けるのとはほぼ同時に、鬪也が飛び出す。狼次は自らの右腕に、全ての咆哮を集約させた。

よろける銀の右腕を切断すると、狼次が銀へと走り出す。銀が咆哮を放ったが、狼次もまた、咆哮を行う。その勢いに気圧された銀が怯む。銀がその怯みから回復して目を見開いたとき、目の前に拳を構えた狼次がいた。

「超爆音咆哮殴打！！！！！！」  
ハイバインドパンチ

そう言つて狼次が突き出した拳から放たれた衝撃が、銀の心臓を砕いた。

「何故、彼と戦った？」

鬪也は、戦闘を終えて誰もいなくなったところで、狼次に問いた。ただした。他の四人にはすでに壊滅した銀滝についての情報を捜査させていた。

「僕は、エスパー」

鬪也は、衝撃を受けた。鬪也は、このときだけは、エスパー殲滅という使命から逃れて、狼次の言葉を聞く事にした。

「僕は、次期銀滝の頭として、他のエスパーからも一目置かれていた。もう五年したら、僕が銀滝をまとめていた」

狼次はただ淡々としゃべり続けた。そこには子供を思わせる要素はその身長と顔以外に見当たらなかった。

「銀滝は、元々開戦当時は九州の方で行動していた組織。ソウリール様の要請を受けて、炎天に着たんだ」

やはり、背後にはソウリールの存在があった。九州の方で戦闘行動

を行っていた。こちらで言えば、八幹部。それぞれの地域、あるいは地方で八幹部や銀滝のような幹部組織のようなものがあるらしい。それはそのサイコストに任せるしかない。八幹部は、ソウリール直属の部隊だ。他よりも集まったときの力は強大だ。もつとも、そのうちの七人はもう倒したわけだが。

「けど、やっぱりおかしいと思った。僕は、ずっと攻め込んでくるサイコストと戦ってきた。自分達の身を守るため、そのために戦っていると思っていた……」

狼次が幾日か前のことを思い出しながら話していた。鬪也は黙ってその話を聞いていた。

「でも、こつちにきて、どんどん攻め始めた。僕が『銀滝（銀）から出る』と言ってから、僕は狂に吹き飛ばされた」

「投擲（スロウ）だったからな。狂の能力は……」

狼次は鬪也の言葉に全く反応せずに話しを続けた。

「銀は僕を直接始末する気だったらしくって、僕は追われていた」

「あいつらの執拗な攻撃はそのためか……」

しかし、鬪也はそこで、一つの疑問が浮かび上がった。

「お前も銀と直接やる気だったんだろ？　なんでついていかなかったんだ？」

狼次は、鬪也の言葉を聞くと少々呆れたようにため息をついた。鬪也は少し苛立ちを覚えたが、ここで感情を押し出しても何にもならないと話を聞いた。

「あのままついていけば、拘束されて一方的にやられるのは目に見えている。鬪也達みたいに単純じゃないよ、僕は」

（誰が単純だよ……）

確実にこちらを馬鹿にした発言だったが、それでも鬪也はその感情を口はもちろん、顔にも出さなかった。

「そこに俺達が来たわけだ」

「狂に投げられたせいで、脳がちよつとばかり異常を来たしたんだ。能力の回復までには時間がかかるのは明確だった」

「銀の姿を見たことにより、能力を復活させたわけだ」  
狼次はこくりと頷いた。

「僕、九州の方に戻ろうと思う」  
狼次が唐突に話を変えた。鬪也は「え？」と声を漏らした。寂しいという感情はなかったが、狼次一人で九州に戻って何をする気なのかと考えた。

「戻ってどうするんだ？」  
もし戻ったところで、そこで受ける扱いは、「壊滅した組織のはぐれエスパー」だ。

「僕には、家族はもういない。九州に残ったエスパーも、雑魚と形容して何も問題ない、そんなエスパーだ。もう、殲滅されたかもしれない」

狼次の目は、やはりそんな同胞の死を悼む目であった。鬪也は、離し続ける狼次を見つめ続けた。

「だから、サイコストと一緒に戦うよ。今回のことで、サイコストの方が、ずっと強いつて分かったもん」  
僅かな笑みを、狼次はその顔に浮かべていた。

その後、狼次はサイコスト協会から特別許可を受けた。本来、敵であるエスパーを味方に加えるのは、大変危険なことであるが、子供であることを理由に、狼次は監視付で前線で戦うことになった。狼次は、子供であることという理由には嫌悪していたが、現在サイコスト軍として、中国地方のエスパーを殲滅しに向かっているらしい。

「俺達も、俺達の戦いをしなくちゃな」

乱州がポケットに手を突っ込んだままに鬪也に言った。

「……あぁ」

空の星は、どこかで吼える咆哮に呼応したかのように、いつになく輝いていた。

## 15、融合（前書き）

超能力戦争が開戦し、次々と襲い来る八幹部。

闘也達は彼らに果敢に戦い、その中で、全員がサイコストとしての覚醒を果たす。

そして、闘也は、サイコストとしては稀な三つ目の能力を習得する。

あらゆる武器を生成し、操ることができる能力、武器<sup>ウエボン</sup>。

それが、闘也の手に入れた新たな力であった。

そして四人は、最後の八幹部との一戦を交えるためにも、エスパーの攻め込む炎天へと乗り出す……。

## 15、融合

エスパーの攻撃による各地の被害の拡大はさらに大きくなっていった。サイコストの兵が昼夜を問わず戦っているのに関わらず、エスパーの数は一向に減らず、侵略されていった。これを終わらせることができないのは日本の軍隊ではない。サイコストだ。サイコストしか、この戦いを終わらせることができない。そのサイコストがやられてしまっていては、いつまで経っても、この戦争は終わりはない。そして、その限られたサイコストの中で、本当に戦いを終わらせることができるのは俺だけだ。父であるソウリールを倒さなければ……戦争が始まる前、一人のエスパーからその名を聞いたときからそう考えていた。戦争が始まり、ソウリールと対面してから、その思いはさらに大きくなった。絶対に、必ず。断定的な答えを自分自身に出してきた。人から断定されるのは嫌いだ、自分で断定するなら、問題はなかった。

今日は、昨日搜索できなかった町のはずれの部分と、付近の山のふもととその周辺でエスパーを殲滅させることになった。残る八幹部は一人。いままで戦ってきた幹部よりも壮絶な戦いになることが予想された。作戦会議が終わると、それぞれ、朝食を食べたり、今日の荷物を確認したりしていた。昨日と全く同じ風景だ。昨日は、日中こそかなりすごい日だったが、夜はいたって普通だった。

作戦開始。五人は鬪也を先頭に穴から出た。鬪也は曇っている空を見上げた。頬に冷たいものが当たった。雨かと思った。前を向いたとき、小さな白い物体が目の前で落ちていった。

「わぁ、雪よ、みんな。今年の初雪ね」

「一年ぶりの雪ね。ちよつとつきつきするわね」

雪は一年おきに降るものだが。確かに、雪を見たのは、久しぶりな気がする。今まで、時は短いままに進み、すぐに雪を見ることができた。でも今年は、戦争をはじめ、さまざまなことが起こったせい

で、かなり長いように感じた。闘也達は初雪に迎えられ、送られながら、その歩を進めていった。

住宅地のはずれの部分でも、それなりにエスパーがいた。拠点とされているやつもいれば、その食料を奪っているやつもいた。闘也たちは、全ての家を見て周り、エスパーを殲滅させた。山のふもとまで来たところで、休憩をとった。この山からは、かなりの数のエスパー反応があった。五人で戦えば、そこまで苦戦することはないと思うが、それでも、強力なエスパー反応もある。幹部ほど強くないエスパー反応だが、そこらのエスパーよりは強い反応を感じた。五人で、そこまで苦戦しなくても、結構時間がかかるかもしれない。休憩が終了し、闘也たちは、山の中へと進んでいった。

頂上に到達した。エスパーの殲滅なら、覚醒し、空を飛んで搜索すればいいのだが、そんなことで体力を使っではいけない。万が一のことがあるかもしれないからこそ、地に足をつけて進んでいる。どうやら、ここにきて、その万が一が来たようだ。

「んなつはっは。いくら八幹部を倒しているおまえらでも、これだけの大群、しかも、そこらのエスパーよりも格段に強いエスパーである上級兵にかなうはずがないヨ」

「格段には……」

乱州が腕を巨大化させて、その腕をエスパーに伸ばした。

「自重しろ、お前ら」

避けきれなかった十人くらいは吹っ飛んだが、ほとんどがその攻撃をかわした。なるほど、口だけではなさそうだ。

あれほどの大群を剣だけで対応するのは無理がある。全方向に対応でき、なおかつ攻撃範囲も広い武器……。闘也はひらめいた。これだけの大群は一気に片付けたほうがいい。覚醒。

「ソウルスティック」

闘也は一本の長い棒を作り出した。棒といっても、枝のような棒ではなく、孫悟空の如意棒と形容しても問題ない棒だ。闘也はジャンプし、敵陣のど真ん中に着地した。

「数だけいたつてな！」

闘也はソウルスティックを器用に振り回し、エスパーをなぎ倒していく。

「ええい！」

「やあああ！」

的射と由利は水の球体を作り出し、その中にエスパーを封じ込め、おぼれさせた。どんなに泳ぎが速く、息が続くエスパーでも、そこに、弾が飛んできてはひとたまりもなかった。

「ほらほら、どうした、俺の動きについてこれないのか？」

馬鹿にしたようないかたで秋人は走っている。エスパーたちからすれば、苛立ちを覚えるのは確かなのだろうが、動きが速いせいになかなか攻撃をあてられないようだ。ならば別のやつにと乱州に狙いを変えたが、乱州お得意の「回転両腕雑払」スピンドルアットでなぎ払われた。

それぞれの攻撃で、残りはあと二十人くらいとなった。そろそろ決め時だな。闘也は一言呟いた。

「カッタースティック」

その瞬間、ソウルスティックによく切れそうな刃が出現。闘也はそれを頭上でくるくると回した。そのスピードはしだいに速くなっていく。風を切る音がする。

「スロウスティック」

そういつて闘也はソウルスティックを投げた。その回転によって、ソウルスティックは闘也の周りをこれでもかというほど、回った。突然自分によく切れる棒が飛んできたら、到底よけられない。エスパーを全て殲滅した。が、そこにエスパーが降り立ってきた。かなりのエスパー反応。幹部か。

「我は八幹部の頂点、一部。地の使、ゴード。いざ勝負だ」

五人はそれぞれ構えた。誰もが強いと感じていた。戦わなくても、感覚で分かる。サイコストとかエスパーとかいうのは、そういうもんだ。

「乱州！俺は左に回る。お前は右側を頼む！」

「OK牧場」

古いな。そう思った。OK牧場とかかなり前に流行った言葉だ（流行ったかどうかもあいまいだが）。と思ったのはもう少しあとのこと。今は目の前のエスパーに集中しなければ。

左右に回った鬪也と乱州だったが、それはあっけなく崩された。

ゴードは、周りにあつた土で自分の体の周りに土の壁を作り出した。さすがにスティックでは歯が立たないとは思っていたが、乱州の腕でも壊せていなかった。それだけ頑丈な作りだった。しかし、それだけでは終わらなかった。周りと天井を塞がれる。ここまで頑丈な壁だと、ソードでも歯が立たないだろう。どうやら自分達は戦闘不能な状態らしい。

秋人はいったん山を下り、かなりの助走をつけてからゴードに体当たりをしかけた。が、やはり土の壁に、攻撃は吸収され、周りを塞がれて、鬪也達の二の舞となつてしまった。

とうとう残つたのは的射と由利だけだ。二人とも遠距離が主体のため、近接戦闘は不得意なのだ。ゴードは少しずつ二人に近づき、近くの土を大量の石にして的射たちにぶつけてきた。

「きやあああ！」

「うつつ！」

二人がうめきやら悲鳴やらをあげている。いくら石とはいえ、先がとがっている石を大量にぶつけられては、傷もつくし、出血もするはずだ。

的射が覚醒してバズーカとかでこの壁を壊してくれればいいんだろが、それだと、その破片が当たったり、最悪の場合誤射の可能性も出てくる。そのせいで、的射は覚醒をためらっているのだろう。それをチャンスとばかりに、ゴードは石をぶつけ続ける。鬪也も乱州も覚醒し、土の壁を壊そうとしていた。秋人は、体当たりの反動が大きいせいで、気絶していた。

「これで貴様らは終わりだ」

ゴードは石を作り出した。どんな手段を使っても、これから逃れる

ことはできそうもなかった。

ゴードが石をぶつけてきた。しかし、的射たちには一つとしてあたることはなかった。守られたのだ。そこにいたのは、体は黄色で包まれていて、腕だけが、鋼の盾のようにグレーの少年が立っていた。石の壁は壊れていた。闘也と乱州が一つになっていた。

「これが……融合……」  
由利はつぶやいた。

融合というのは、稀に覚醒するサイコストのなかの極稀に、心の通じ合う者にだけ起こる現象だ。

融合は覚醒状態のときのみ発動可能で、その力は、ただ二人で覚醒して戦うよりも強力なものになるという。融合するときには普通、一人のサイコスト（仮にA）が表面の姿（簡単に言えば外見）となったときには、Aの方の力の方が強くなる。つまり、内部能力（簡単に言えば内面）のサイコスト（仮にB）はサポートになるような感じだ。しかし、Bの意識はしっかりと残っている。けども、その能力を使うのはAなので、Bの能力も使いこなせるサイコストがAの立場になったほうがいい。そして今現在、Aの立場は闘也、Bの立場は乱州ということになっている。

「ほお、坊主。貴様はその女に恋でもしているのか？だからそんなドラマみたいな、アニメみたいな展開を作り出したのか？」  
ゴードは馬鹿にしたような口調で尋ねてきた。

「ちがうな。例えそうでも、そうじゃなくても」

融合状態の闘也はゴードを睨んだ。いつも以上のきつい眼差しだ。「こいつらは、俺の仲間だ。仲間を守ろうと思わないで仲間なんて語れないからな。守りたいという想いが、俺と相棒を一つにしたんだよ」

俺は一人じゃない。一人で今まで戦ってきたのではない。乱州じゃなければ、的射じゃなければ、秋人じゃなければ、由利じゃなければ

ば、倒せなかったエスパーもいる。

「けりをつけるぞ。準備はいいか、乱州」

（ああ。いつでも大丈夫だ）

「巨大棘鉄拳」  
きょだいとげてつけん

その瞬間、鬪也の両手に無数の棘が出現。実は、鬪也の武器の能力で小さな剣を大量に作り出し、乱州の身体の能力を使って、剣と拳を合体させて、棘鉄拳となったのだ。

「うおおおおお！！！！」

大量の棘を拳に込めて、から空きとなっているゴードの腹部めがけて腕を伸ばした。ゴードは土の壁を作ったが、あっけなく崩され、ゴードももろに受けた。

「ぐふつ………。見事な腕だった……。だが、まだ我々の上には……。ソウリール様と、四天王がいる……。これで終わりだと思うな……。よ……。」

そのまま、ゴードは消えていった。正々堂々と、正面から勝負を受けたあいつは、ある意味、自分達に勝ったのかもしれない。鬪也と乱州は分裂し、覚醒も消えた。

それにしても、四天王か。八幹部よりも強力と考えれば、手ごわい相手だろう。なぜか、背中に悪寒が走った。まさか、四天王は一度に俺達をつぶすきではないのだろうか。つまり、四天王は四人いるとして、四人が一度に襲ってくる。かなり大変なことになる。融合を使わなければ、戦って勝つのは到底無理だ……。まあただの予感に過ぎないのだが。

鬪也達は、しずみかけた夕日を見ながら、山を下っていった。

## 16、復活

いつものことながら、あの穴に今晚も宿をおく。皆が寝静まったころ、鬪也は起きた。というより、誰かに起こされた。誰だろうか。乱州や秋人のいびきが聞こえてくる。じゃあ、由利かの射だろうか。視界が少しずつ広がっていく。目の前には的射が立っていた。

「的………いつ!」

腕を引つ張られる。そのまま穴のそとに出た。それからもう少し歩いた。穴から百メートルくらい離れたところに来た。森の外に出たようだ。なんで俺を連れてきたんだろう。

「鬪也………」

「何?」

「その………私、いつつも、鬪也や、みんなに守られてばかりで、みんなに迷惑かけてるんじゃないかと思って………」

「何言ってるんだ。仲間だろ」

そついうも、的射の表情はどこかつかめない。

「その………私もつ………」

的射が鬪也の胸に飛び込んでくる。鬪也は困惑したが、的射の言葉を聞いた。

「みんなのこと、ずっと守りたい!!」

的射は本気だ。その声は涙ぐんでいる。鬪也は、それでもどうするべきが迷った。動揺しながらも、鬪也は的射を抱きしめて言った。

「俺も、お前を守る」

その瞬間、的射は自分の唇を鬪也の唇にそつと付けた。すぐに的射は唇を離して、走り去ってしまった。恥ずかしいのだろうか。まあ自分もそつなのだが。鬪也もゆっくりと歩いて、森の中へと入っていった。

そんなことのある次の日。ブリーフィング終了後、今回はすぐ

に出発した。四天王だろうか。頭痛がするぐらいのエスパー反応がある。エスパー反応のあるほうへと急ぐ。

かなり開けたところに着いた。確かここは運動場だったはずだ。四人のエスパーがなにやら話をしている。幸い、こちらには気づいてないようだ。闘也達は茂みに隠れてその話を聞いた。

「もう八幹部の予備は一つずつ位しか生み出せないぞ」

「分かっている。もうあの御方の命を削ってはならない」

「じゃあ、もう八幹部を生み出したら」

「たぶん、それ以上の戦力は出せないだろうな」

四人の会話を整理する。今までエスパーというのは、何者かの命を削ることによって生み出してきた。けど、もうかなり削ってしまったため、八幹部は再び生み出すので限界に達する。そのせいで、もうこれ以上戦力を増やせない状況らしい。

「ところで」

一人のエスパーが話を変えるようだ。

「そこに隠れているもの。今すぐ出て来い」

どうやら、悪い話が変わってしまったようだ。仕方ない。闘也は茂みから出てきた。他の四人も仕方なく出てきた。

「なに！？こいつら、いつから・・・」

「こいつらは俺達が戦力がどうこうの話をしているあたりで現れた」

「ん？おい！あそこの小僧は、ソウリール様の子供で、要注意サイコストのリストに登録されていたやつだぞ！」

「他のやつらも、リストに載っていたぞ！」

「なら、しかたない。再び八幹部を復活させる。実力者の五人とはいえ、八人が一気に襲って来たら太刀打ちはできないだろう」

そついい終わると、八幹部が出現した。

「もし生き残れたら、貴様らの相手をしてやる。生き残れたらな」

そついつて、四天王であろう四人は運動場の奥の山へと姿を消した。八幹部には強いやつだっている。もちろん、今の自分達なら、簡単に倒せるやつもいるはずだ。闘也の頭の中で、誰が誰と戦うかの作

戦が組みあがっていく。結成完了。

「皆！よく聞け！まず最初は、昨日倒したゴードを全員で倒す！そうすれば、土の壁を作られることもない。そして、その後に、乱州はグライブとウォールを！秋人はスピロとフリーユを！的射と由利はなるべく遠くからライラダを！俺はファーガとビーグルをやる！作戦開始だ！」

全員が承諾し、ゴードに向かって走り出した。昨日と同じ戦法でいけば、楽に倒せる相手だろう。的射と由利は後ろから援護に入った。前衛の三人はそれぞれ覚醒し、三人で融合した。かなりの頭痛がしたが、なんとか安定したようだ。後衛の二人は、周りのエスパーの気を引いている。

「やるぜ！超棘鉄拳！！！」

昨日と同じように、棘を纏った拳を握る。それを巨大化させ、さらにそれを秋人のスピードによって連続で叩き込んだ。土の壁を作ったが、間に合わなかったようだ。

「くそおっ！八幹部の一部である我が、たった一撃でええっ！」

そういつてゴードは消えた。残りは六人。五人はそれぞれの役割のエスパーの下へと散っていった。

闘也はまずビーグルの元へ向かった。いきなり巨大な拳をこちらに突進させてきた。だが、こういうときは頭を使うのが得策だ。闘也は、分身を作り出した。それによって、拳が押さえられる。伸びてきたもう一本の腕に飛び乗り、上っていった。ビーグルの顔の辺りまで上ると、武器の能力を発動させた。

「ソード」

魂の方に大きく気力を傾けているため、覚醒を行うことはできず、ソウルは付かない。ただのソードで切りつけた。顔を連続で斬るが、これといったダメージはなさそうだ。それなら、

「覚醒、ソウルソード！」

覚醒してソウルソードを作り出す。作り出してから間髪入れずに連続で斬りつける。だが、やはりダメージは小さいようだ。もっと、

一度に大きなダメージを与えられる武器じゃないと効果は低い。一撃・・・・・・・・強力・・・・・・・・打撃・・・・・・・・。思いついた。そして、思いついた瞬間、その武器は闘也の手にあった。両手持ちしなければいけない大きさだが、威力は抜群のはずだ。

「ソウルハンマー」

ソウルハンマーを持った闘也は、ビーグルの顔面を思い切り殴った。ビーグルがよろめく。わずかに距離ができた。

「ソウルスティック」

ソウルスティックに切り替えた闘也はそれを頭上で回転させた。そして、それをまん前に投げる。

「その程度の棒に、やられはしない！」

「それはどうかな？ソウルハンマー」

回転していたソウルスティックはソウルハンマーに変わり、ビーグルの顔面を、連続で殴りつけた。かなりのスピードで殴り続けているため、ビーグルはひとたまりもなかった。次で決める。

「ビッグソウルハンマアアア!!!!!!」

巨大なハンマーを作り出し、ビーグルに思いっきり当てた。あまりの圧力に、ビーグルが釘のように地面に突き刺さったあと、そのまま消えた。次はファアガ。振り返った瞬間、火の玉が飛んできた。二回目の戦い。負けるわけにはいかない。

乱州は、グライブ戦で拳同士をぶつけ合っていた。なぜだ。あのとき戦ったころよりも、かなり強くなっている。こちらの攻撃を全て見切っている。ならば、見切っても防げない技を繰り出すしかない。

ギガントランチャーアームマシンガン  
「巨大爆腕連打!!!」

グライブの元で爆発が起こる。爆発の煙が吹きすぎたころには、グライブは消えていた。その瞬間、頭が水に包まれる。頭が水の中ということは、息ができないということだ。こんなかで、この状況の俺を助けられるやつ・・・・・・・・。乱州はテレパシーで伝えた。

(遠藤！白鐘！どつちでもいいから、俺を助けてくれ！頼む！)  
その瞬間、乱州の水が消える。由利が、持っている杖に、水を吸収したのだ。なんとか難を逃れた。感謝するぞ。白鐘。水に包ませたのはウォールだった。予想はついてはいたのだが。

「よし、お返しをさせてもらうぞ！」  
乱州は覚醒し、空に飛び上がった。

覚醒している秋人はスピーロと戦闘。風に浮かせることで楽に倒せたが……おかしい。前はこんなスピードなかったはずだ。周りを風に囲まれる。フリーリウウか。

「大疾風！！」

囲んでいた竜巻と逆の方向に風を起こし、一時的に風が止んだ。秋人は飛び上がる。この勝負、もらった。カクカクと動いて残像ができるほどにすばやく動いた。フリーリウウの目の前に移動する。そして、フリーリウウに向かって、最高速で突進する。秋人の頭突き、パUNCHの両方が直撃したフリーリウウは怯んだ。フリーリウウの周りを高速で回り続ける。そのうち、風の膜が薄くはられる。かなりの細さだが。秋人はフリーリウウの周りから離れた。

「エアカッター」

その細い風の膜は、やがて切れる刃物にかわり、フリーリウウを一刀両断した。見事に真つ二つ。フリーリウウは少しずつきえていった。どうやら、最初にノルマを達成したのは秋人らしい。

(そうだな……あの雷坊主くんのお相手でもしますか)

秋人はライラーダに突っ込んで、顔を強打した。ライラーダが珍しく怯んだ。そのまま、的射と由利に加勢することにした。

ウォールと戦っている乱州。あときは、身体的能力で切り抜けることができたが、今回はそうもいかなそうだ。

(殺つてやる。気の済むまでな)

「ギガントロングアーム遠距離巨大腕打！！」

巨大な腕がウォールに直撃する。後ろにのけぞり、そのまま倒れる。ウォールは、向こうで戦っているライラーダに接触したようだ。二人ともまだ意識はあるようだ。戦闘の続行は可能らしいな。仕方ない。俺もあれに加勢するとしますか。

ファーガと戦っている鬪也。炎による攻撃が絶えずくる。それをかわし続けているうち、周りを炎で包み、炎のガードをファーガは作り出した。目には目を、炎には炎を！近距離での戦闘はやめたほうがいいが、ステイクでも、間合いは遠そうだ。

鬪也は脳内であれに対する攻略法を脳内に創造する。遠距離でも攻撃できる武器。遠距離・・・片手。両方・・・。鬪也の頭の中で回線がつながる。鬪也は、銃を作り出した。

「ツインソウルガン」

かなり軽い設計だが、普通に連射ができる優れものだ。リロード（銃に弾を込める作業）も自動で行ってくれる。鬪也は二つの銃を構え、連射した。炎でのガードを試みたようだが、炎のガードも崩されたようだ。

「ソウルハンマー！」

二つの銃はハンマーに切り替わり、ファーガの頭の横から打ち付ける。ファーガが吹っ飛ぶ。向こうに、エスパーがいる。乱州たちもいる。その方向に、ファーガは飛んでいったこれは偶然だよ・・・。ファーガが他のエスパーと衝突する。鬪也もその方向に急いだ。

どうやら、いいのか悪いのか分からない戦況だな。五対四か。勝てないわけではないと思うが・・・。その瞬間、エスパーの四人は何かを呟いた。うまく聞き取れない。だが、きつい状況になるのは確かそうだ。

そう時間をおかずに、ゴードが蘇った。五対五なんてとても敵わないのではないか？しかし、そんな推理は微妙なところで終わった。なんと、エスパー五人は互いに息を合わせ、五人で融合したのだ！エスパーも融合できるだけの力を持っていたのか。

「よし！俺と乱州と秋人で融合、的射と由利で融合してくれ！五人

で融合といきたいところだが、負担が大きすぎる「  
それぞれが融合した。かなり厳しい戦いになるのは確かであった。」

## 17、完全融合

一対二という数的有利をとってはいるものの、強さは互角と聞いていいだろう。今回は、乱州が一番前に出た（表面のサイコスト）。的射と由利は、的射が前になったようだ。

乱州が秋人のスピードを借りてダッシュする。的射はさまざまな属性の弾を発射している。俺は乱州に、武器の能力が、身体そのものに加わるようにしている。つまりは、ハンマーのような打撃力や、スティックのようにすばやく、みたいなものだ。的射はアサルトライフルと呼ばれる銃でエスパーを撃っている。……昨夜の一件以来、的射のことが気になって仕方ない。表面が乱州だから闘也が的射を見ていることは誰も気づいていないんだろが。

「ギガントハンマーアーム 巨大打撃腕打！！」

乱州がハンマーの能力を使う。だめだ、だめだ。今は戦闘中だ。関係のないことを考えてはだめだ。みんな真剣に戦っているのだから乱州の上から氷の塊が降ってくる。

（乱州！上だ！ガンを使い！）

乱州が上を見上げ、手をピストルの形に変える。その指先から、弾が発射された。なんとか氷は砕けた。乱州は飛び散った破片を秋人のスピードで一つ一つ投げ返す。全て当たった。だが、あまり効いていない気がする。なぜだ。エスパーの融合は、確かに、一つの体にまとまりはするが、各所でそれぞれの特徴が出ている。やつらの場合は、頭と胴体はファーガ、左手はフリーユウ、右手はライラーダ、右足はウォール、左足はゴードのような状態だ。それぞれ、炎、風、雷、土、水の能力が得意と見れば……。

頭の中がかなりの速さで回転する。秋人には分からないくらいの知識が思考の中で交差する。水をかければ炎は消える。炎は風で強くなる。風は土を巻き上げる。土は雷を防ぐ。雷は水を感じさせる。

……。

(乱州、雷技は右足に、風技は左足に、炎技は左手に当てるんだ!)  
「え?なんでだ?」

(いいからそれをやってみろ)  
「分かったよ」

乱州が炎を纏った腕を作り出し、左手に向かって伸ばした。ジャストヒットだ。かなりの大ダメージのようで、大きく怯んだ。お次は、一気に敵に近づき、風を帯びた小さな剣を二本作り出した。

「名づけて、双魂風剣だ!」

そして、それを左足に連続で切りつけた。左足が崩れ、右足で、ほとんど体重で支えている状態だ。

「さあ、いくぜ、<sup>サンダーアーム</sup>雷腕打!」

雷を帯びた拳を右足に当てる。右足も崩れ、体は四つんばいの状態だ。だが、ほとんどの体重は右手で支えている。先ほど左手にも攻撃したからだ。

(乱州。的射と由利に伝えてくれ。右手に土の攻撃を、頭に水の攻撃をやれってな)

「え?ああ、分かった」

「遠藤!白鐘!鬪也からの伝言だ。右手に土の攻撃、頭に水の攻撃をしろってさ」

「え?なんで?」

「いいから、攻撃しろって」

的射は銃を構え、由利の協力で、右手に土の属性をつけてもらい、それによつて、土の弾を発射した。さすがに射撃の能力の能力なので、しっかりと命中した。右手の自由がなくなり、仰向けの状態になった。的射が水の属性をふんだんに詰め込み、頭に目掛けて発射見事に命中。大きなうめき声上がる。そのとき、さきほどの、たぶん四天王と思われるやつらが戻ってきた。

「まあ、ソウリール様が気にかけるほどのことはあるな。八幹部!この程度でやられるとはな!我の中で、生きろ!クズが!」

その瞬間、融合していた八幹部は、小さな光の玉になり、四天王の

トップと思われるやつ胸に刻まれた。

「それでは始めようか。我ら四天王、エスパーの誇りと自らのプライドを懸けて戦うことを誓う！」

その瞬間、四天王のやつらは、融合した。融合とはいっても、姿として見えるのはさつきからいろいろ喋っているやつだけ。だが、さつきまでは剣や盾、鎧等はなかった。となれば、前に出ている者以外は。

「そういえば、まだ名を名乗っていなかったな」  
思い出したかのように話し出した。

「我は四天王で一番力を持つ、体神、ボルドー。いま剣になっていくこいつは、二番目に力を持つ、剣神、ソリド。盾となっているのは三番目に力を持つ四天王、守神、ガシード。我の鎧となっているのは、防神、シライガ。我らがそろってこそ四天王だ！」

威勢のいいだけではない。本当に自信があるのだ。自分と仲間との結束によって、最強だと称したいのだろう。無論、それはこちらだつて同じだ。普通に考えれば、四天王より上はもうソウリールしかないはずだ。だからこそ、今ここで倒すしかない。ここで倒さないと、勝利はないかもしれない。乱州が、変わってほしいと頼んできた。瞬間的に分裂し、再度融合する。闘也が先頭になる。それぞれが身構える。

なぜかその瞬間、ふと、闘也の中である想いが頭に浮かんだ。

なんで戦っているんだ？

そんな想いを考えた自分にまた考えてしまった。でも実際そうだ。俺はなぜ戦っている？守るものがない自分がなぜ戦う？そうだ。思い出した。俺はなにかを守るために戦っているんじゃない。たった一つの目的のために戦っている。

ソウリールを倒す。

そうだ。ソウリールを倒すためだ。そのために、俺はもう後戻りはしないと決めたんだ。目の前の敵を倒すと決めたんだ。

「ダブルソウルソード！」

普通のソウルソードを同じ大きさで二本にする。これによって、それなりの速さで攻撃力の高いソードで切ることができる。

「はあああつ！」

二本の剣を交差させて切りかかる。しかし、盾で防がれる。ボルドーは剣を振り下ろしてくる。乱州の覚醒能力を使い、なんとかガードする。剣を振り払い、距離をとった。ボルドーは剣を頭上に振りかざした。

「<sup>ダイクソード</sup>暗黒剣」

とたん、剣となっているソリドは黒くなっていく。正確には、黒というよりは漆黒の方が似合っている色合いだ。ボルドーは<sup>ダイクソード</sup>暗黒剣の刃先をこちらに向けてきた。それなりの距離はあった。ボルドーはかなりの速さで闘也達へと突っ込んできた。このままだと串刺しになることは避けられない。しかし、的射が足に弾を発射し、進行を食い止めた。態勢がくずれている。叩くなら今しかないと飛び出した闘也だったが、振り下ろした剣はあっけなく盾で防がれる。やはり、向こうもそう簡単にはやられてくれない。一旦の距離を取って再度攻撃しようと試みた闘也であったが、距離を取る前に、<sup>ダイクソード</sup>暗黒剣に捉えられ、剣でつばぜり合いに持ち込む。しかし、すぐに力負けして地面に叩きつけられる。

「ぐっ……」

叩きつけられると同時に的射が銃弾を放ったが、その鎧に弾かれ、不発に終わる。

闘也は、二つの剣を巨大な一つの大剣にした。身の丈ほどの大剣を両手持ちして、飛び出す。

「ビックソウルソード！」

振り下ろした剣が、ボルドーの持つ剣を弾く。その瞬間、引き剥が

されたソリドが強制的に融合を解除され、単体になる。闘也はツインソウルソードに持ち替えると秋人の能力で一気に接近し、状況をよく理解できぬままのソリドを両断した。

再びビクソウルソードに持ち替えると、その鎧へと突き刺す。その鎧は剣を弾くが、接合部分に狙いを定めて突き刺す。しばらくの抵抗の後、鎧部分となっていたシライガが単体となる。的射が飛び出し、その銃口から高圧の水流を放出する。

「弾が駄目でも、こつちなら!!」  
あつけなく、実にあつけなくシライガが切断される。

強制的に融合を解除された負担が襲い掛かり、ボルドーとガシードが分裂する。

「こいつを貫きなさい!!」  
的射は先ほど放出していた水流をそのままガシードへと走らせ、ガシードを一撃の下に両断するが、その直後にボルドーが接近する。的射は銃弾を発射するが、大したダメージを受けている様子はない。そのまま的射達は、ボルドーの腕に吹き飛ばされる。先ほどの闘也達のように、地面に叩きつけられるまではいかなかったが、ごろごろと数メートル転がった。

「我は体神。鉛の銃弾など、恐れるに足らん!!!」  
その言葉に偽りはなくようだ。闘也がソウルガンから銃弾を発射するも、ボルドーは僅かな出血だけで、こちらへと突っ込んでくる。闘也は一言呟きながら剣を構えた。ボルドーはこちらを的射達の二の舞にしようと腕を振る。

「いくら銃弾が恐ろしくなくても」  
闘也は一瞬のうちにボルドーの腕を回避すると、ボルドーの首筋へと剣を触れさせた。

「首刎ねられたら終わりだろ」  
闘也はそのままボルドーの首を突っ撥ねて切り抜けた。ボルドーは斬られる寸前になにかを叫んだ気がしたが、聞き取ることも、ましてや聞き返すことも不可能であった。なにはともあれ、これで残る

はソウリールだけということになった。

四天王が闘也によって切り裂かれた時、ある廃墟ではその報告が、一人の男に対して行われた。

「ソウリール様、四天王、やつらによって全滅させられました！」

「四天王も地に堕ちたものだ。四天王のエスパーエネルギーを吸収しろ。三十秒だ」

「イエッサー。総員、エネルギーの回収を急げ！」

一人のエスパーが指示をだし、四天王のエネルギーを吸収している。すごい上から目線で、指示を出したのはもちろんソウリールだ。

「近いうちに、ここもやつらに知れるはずだ。全国各地のエスパー兵を、この地域に集結させる！全てだ！そうでないと、やつらには到底勝てん！」

俺は、次の戦いに全てを懸けねばならん。全ての人類をひれ伏させる。サイコストは問答無用で殺し、仲間として、エスパーとして生きると思ったサイコストのみ、受け入れればいい。もう、私に家族などいらぬ。一人で生きる。もう自分の妻は殺した。いや、殺させた。あいつは無力だったからまだいい。しかし、まだ闘也がいる。日をおうごとにサイコスト反応が高くなっている。他のやつもかなりの上がりようだ。闘也はすでに、自分に追いつくまいとしている。なにが闘也をそこまで強くしたのだろうか。

ソウリールは奥の部屋へと入っていった。ここは、ソウリール以外は立ち入りを禁じている部屋だ。入ったものは、いかなる理由においても、抹殺する。そういう部屋だった。

ソウリールは部屋の鍵を閉めた。このドアについている鍵は一つではない。軽く数えて十五は鍵穴や錠前がある。まさに立ち入り禁止の部屋にはふさわしい。ソウリールは一つの立てかけてある額に軽くノックをした。そこから、一人の男の音がする。

「久しぶりだな。戦闘技術専門のソウリール様。しばらく会ってい

ないが、元気にしていたか？」

「ああ。ピンピンしているとも。軍兵生産専門のニワード様」

ソウリールと、ニワードはお互いに様付けで名を呼び、タメ口だった。ソウリールに向かつて、ニワードは問いかけた。

「ソウリール様。そちらの日本の侵略は進んでいるか？」

ソウリールは、満足しないかのように、首を横に振った。

「一部の地域では、占領が完了したという報告を受けたが、今私がいるこの炎天エリアはかなりの難所だ。例のやつらのせいでここ一帯のエスパー兵の大半を失った」

「闘也達か……」

「ところで、」とソウリールが聞いてきた。

「そちらの、兵士の収集は進んでいるのか？いくら核を所有している北朝鮮だからといって、強い兵、しかも、エスパーがいるとは思えんぞ」

「そうなんだ。いても大抵はサイコストだ。それで、今ゲルガー様と協力して、ある作戦を計画している」

「生態研究専門のゲルガー様か。それで？一体どんな作戦なんだ？」

「我々の命を削らずに、人工的にエスパーにするのだ」

「何！そんなことが可能なのか！？もしそれが成功すれば、我々の勝利も夢ではないな」

「なにを言ってるソウリール様。最初から我々の勝利は確定しているようなものだ」

ニワードの言葉に、ソウリールは「それもそうだな」と、僅かな苦笑を漏らして続けた。

「もし作戦が成功したらなるべく早く兵をこちらに送ってほしい。通訳もつけてよこせよ」

「分かっている。では、また会おう」

そこで会話は終わった。ニワードは、額の中に、また入っていた。この額からは、ニワードの部屋に繋がっている。実際に部屋がとなりにあるわけではなく、テレポート・サポート・マシン簡易空間移動装置を取り付けて、ニワード

の部屋と繋げてある。勿論、向こうにもそれがある。そして、額をノックすれば、ニワードの脳内に、誰からノックされたかが分かるようになる。

「四天王もやられてしまうとはな……」

兵士の前、あのような言葉を発したものの、あまりにあっけなく四天王が敗れたのには、正直ソウリール自身も驚いていた。

これ以上じぶんたちの命を削つてまでエスパール兵を生み出すわけにはいかない。そのためには、作戦を成功させねばならない。はやいうちに作戦を成功させてくれよ、ニワード様。

そのとき、大きな地震が起きた。いや、地震にしては短い。ただ揺れただけだ。ソウリールは、部屋のドアを開け、ちょうどよく飛び込んできた側近に事情を聞いた。

「ソツ……ソウリール様！ 一大事です！ 闘也<sup>やん</sup>達が、基地のすぐ前に！」

すぐに作戦室まで戻り、窓をのぞくと、五人の少年達がいた。

## 18、大脱走

闘也達は、エスパー反応が、他よりもかなり高いこの廃墟にたどり着いた。四天王を倒した後、エスパーの粒みたいなのが出現した。緑の光を放つ粒は、全てが、ある方向へと飛んでいった。しかも、その方向からは、四天王よりも強いエスパー反応が感じられた。で、来てみると、この廃墟からエスパー反応が出ていると判明した。

「すごいエスパー反応だな。闘也」

「ああ。これほどまでのエスパー反応は、もうソウリールしかないはずだ……」

実際、この感覚は父のものであり、「はずだ」という予感よりは、もう確信しても何も問題がないくらいだ。

「急げ！ 一階にいるやつは大至急二階に來い！ 脱出するぞ！」  
ソウリールは全員を二階に集合させて、一人のエスパー兵に命令を出した。

「よし！全員そろったな！ よし、エンジン点火！ 発進するぞ！  
全員、武器を構えて戦闘にそなえろ！」

いい終わった瞬間、大きな揺れと共にエンジンが点火した。

突入しようとした闘也達の前で、熱気が立ち込めた。一階部分が燃えている。そして、二階部分が宙に浮いた。下からはエンジンとして、炎が吹き出ている。これによって、宙に浮いているようだ。一階部分が激しく燃えて火事になっている。五人がそちらに気を引いている間に、二階部分は全速力で発進した。

「しまった。皆！あれを追うぞ！」

全員がそれに向かって走り出した。とても走るだけでは追いつかない。闘也は覚醒し、黄色い魂の光をその身に纏う。他の四人も覚醒し、空を舞った。二階部分が飛びながら、ソウリールの声を出した。

「どうだ闘也！これが、エスパー01だ！」

「02とか03とかもあるような言い方はやめろ」

闘也は苛立ちの籠った声で言うが、ソウリールはそれを聞くと苦笑を漏らした後に続ける。

「実際にある！ それよりも今は、お前らを落とす！」

01が背を向けたまま、エスパー兵達が攻撃してきた。今までのエスパー兵が使っていない武器だ。どうやら、高出力の光線銃ビームガンのようだ。それをかわす。こちらにだって、遠距離武器はある！

「ツインソウルガン」

二つの銃を作り出し、構える。相手の攻撃を避けたところに、銃を撃ちこんだ。しかし、どうやら塀があるようで、それに隠れられた。上に回りこんで撃てばいいのだが、これ以上スピードがでない。向こうもかなりのスピードだ。少しずつだが離されていくのが分かった。一応こちらは全速力だ。だが、厄介なことに、相手の方からは風を吹かせている。扇風機みたいなもので。

「雷電防壁サンダーバリア！」

そう言ったのはいつも雷の攻撃をよく使う乱州ではなく、ソウリールだった。闘也達の周りに、雷の壁ができた。かなりのスピードのため、当たらない方が難しかった。体中に高電圧が走る。普通の人間なら、有無を言わず塵になっっているだろうが、闘也がサイコストであり、覚醒もしていたため、そんなことにはならなかった。

「さらばだ！ 闘也！ またいつか会える日を待っているぞ！ はっはっは！」

ソウリールが高笑いしながら遙か彼方へと飛び去っていた。闘也以外の四人も次々とその壁に当たる。それぞれがうめき声や悲鳴を上げていた。乱州だけが、自らの属性かみなりと両腕の盾により、感電を防いだ。雷の壁が消えた。どうやら、一定時間経てば、消えるような仕組みになっているようだ。雷の壁が消えるとほぼ時を同じくして乱州以外の四人がその意識を失い、その覚醒の光を消して落ちてい

く。

「くそつ。あの野郎」

乱州は腕を巨大化させ、地面の方へと伸ばした。鬪也達よりも下に伸ばすと、腕を柔らかいものにした。四人はそれに着地した。不時着のようなものだが、地面に直接叩きつけられるよりは、いくらか衝撃を抑えられたはずだ。乱州は受け止めると、すぐに腕を短くしながら地上へと降りていった。四人を安全なところに非難させた。攻撃はしてこないだろうが、一応隠れた。

「大丈夫か？」

乱州は最初に目が覚めた鬪也に話しかけた。まだ痺れがとれていないかもしれない。「ゆっくりしてる」と鬪也に言う。引き続いて他の三人も目が覚めた。鬪也に言ったことと同じようなことを言った。むしろ、それ以外に今かける言葉が見つからなかった。

しばらくの時間が流れた。遙か彼方に消えたソウリールが戻ってくるはずもなく、空は紅くなっていった。痺れも消え、ようやく自由に動けるようになった鬪也達は、今日もあの穴に帰った。

次の日、痺れも完全に治った鬪也達は、サイコスト協会へと足を運んだ。一大決心が、鬪也の中で固まった。

地下のサイコスト協会へと続く階段を下り、扉を開けて、支部長との面会を求めた。受付は支部長に許可を確認し、通してもらった。相変わらず長い道……。いや廊下だ。歩いている途中の部屋が連なる景色にももう飽きた。そのうち、支部長室に到着する。そこまで時間はかかってないが、疲れた。まだなにも喋ってないのに「失礼します」

五人がぞろぞろと入る。支部長の斉藤正義爺さんが迎えてくれた。

「今日はなんのようだね？もしや、とうとう我々の軍に入ってくれると一大決心してくれたのかね？」

別に軍に入ろうと思った、などという一大決心をしたわけではない。

「俺……自分達がこの所属のサイコストであることを、一時的に取り消してもらえませんか」

その言葉を聞いた正義は当然の反応を示し、わけの分らないという表情のままこちらに聞いてきた。

「は？ 取り消してどうするんだね？」

「ソウリールを追います」

「は？ ソウリールとは一体誰だね？」

駄目だ、この爺さん。頭がいかれている。名前を特定するまでに時間がかかる、もしくは、どこかで聞いたような名前であるような仕事を取れば、こうは思わなかっただろう。だが、それを超越してまるで初耳のような挙動を目の前の老人は取った。闘也は呆れながら、ため息混じりに正義に問うた。

「お言葉ですが、協会は、その程度の情報も掴めていないんですか」「いやいや、そんなことはない」

ということ、この爺さんの頭がいかれているのだろう。と勝手に解釈したが、正義が続けた。

「リーダーであるエスパーがいるのは確認されているが、実は、リーダーのエスパーは一人ではないとの予測がされている」

「なっ……！！」

闘也の驚愕が、正面の正義だけでなく、横にいた乱州、的射、秋人、由利にも分かるほどであり、闘也同様に驚愕していた。

「どういうことですか！！」

闘也は聞き返す。リーダーが複数人。そんなことは、いままで片隅にも考えたことがなかった。

「うむ。君達が知っているソウリールを除いても、最低でも二、三人はいる。まあもちろん、それ以上の可能性も高いのだが」

「その……複数人いるという、決定的な証拠はあるんですか」

「うむ。この炎天のあたりにもそれらしきエスパー反応があった。それはたぶん君達の言うソウリールだと思われる」

このうむうむ爺さん、なかなか、核心的なこと話さないなあ。

「他にも、北朝鮮の兵士が、このところ次々と行方不明になっているのだ」

「北朝鮮で軍がどーのこーの言い出したんじゃないんですか」

「それ以外にもある。エスパーはある者によって生成されているものだということは知っているかね？」

「はい。その、ある者の命を削ることによって、エスパーが生み出されているんですね」

「そうだ。各所で大量のエスパー兵や、炎天内、もしくはその付近で出現する強力なエスパーを、一人で全て生み出すのは、かなり無理がある」

「その者の命が、かなり強大なものなんじゃないんですか」

「なかなかいいところを突いてくるな。だが、先ほどの北朝鮮の軍兵誘拐事件と照らし合わせた結果、確かにかなりの大きさのエスパー反応だが、かなり性質が違うことが分かった」

つまりは、一人で大量のエスパーを生み出しながら、北朝鮮で自ら誘拐することは確かに不可能に近い。それに、確かに今まで炎天にこの町にいたのだ。これで、この爺さんの話が繋がった。……  
・こんな話をしている場合ではない。早く取り消してもらって、ソウリールを追わねば。という鬪也の考えは、誰よりも早くその口から吐き出された。

「すいません。時間がないので、取り消しの許可をもらいますよ」

「仕方ない。君達子供に戦いをさせたくはないが、君達が、この流れを作ったのだからな。君達でないと、この戦争は終わらせることはできないかもしれないからな」

「ありがとうございます。それでは、失礼します」

鬪也につられて、立ち上がった。支部長に背を向けたとき、彼は、鬪也に言った。鬪也は立ち止まり、背中と言葉を聞いた。

「ソウリールとは鬪也君、君の父だと知っている。だが、この戦争は彼から始まったのではない。彼が計画を企てる前から、他のやつらが準備を進めていた予測がかなり高い。お父さんを責めてはいか

んよ」

あんな言動をしておきながら、ソウリールのことは知っている。なんだか負けたような気がした。

「物事を決めるのは、予測じゃなく、事実ですよ。支部長」  
闘也は正義にそう返すと、ドアを勢いよく閉めた。

あのようなことは言ったが、確かに、複数人いるやつらの中なら、あらかじめ計画しておくこともできたのかもしれない。だが、ソウリールが加わって、初めて計画が実行されたはずだ。

協会から外に出たあと、闘也は小さく一言、ぼそりと言った。

「皆。北朝鮮に渡ろう」

一同が驚いた。だが、闘也が自ら決断したことだった。

## 19、渡来

「闘也！どういうことだよ！まさか、あの爺さんの言ったこと信じ  
るのか」

「ああ。それにいろいろと確信もある」

「そのいろいろを今ここで話せ」

乱州には珍しい命令口調だった。明らかに苛立ちの籠った声である。  
「第一に、先ほどの会話だ。何者かの命を削ってエスパーを生み出  
している。まず、それはいいな」

「ああ。四天王が言ってたからな」

さすがに、エスパー自身が言っていたことには信用があるらしく、  
乱州も反発しなかった。

「例えば、それがソウリールだったとする。ここで生み出しながら、  
北朝鮮に、自ら乗り込んで誘拐するなんて無理だ。現に、さつき  
俺たちから逃げたじゃないか」

「確かにそうだな」

「そして、もう一つ確信がある。ソウリールは逃げるときに、エス  
パー01というのに乗り、さらに、02、03もあると言っていた。  
わざわざ一人で全部乗る必要ないだろ。01が壊れたなら別とする  
が」

「そうか……でも、北朝鮮にいるかなんて分からないぞ」  
「自ら乗り込んで誘拐したエスパーが、そこに拠点を構えている可  
能性がある。例えいなくても、事情を聞くことくらいはできるはず  
だ」

闘也は淡々としゃべり続け、乱州がそれに引き込まれるように、納  
得の表情を浮かべる。

「北朝鮮に渡ること、反対のやつは理由付きで言ってくれ。納得  
のできる理由なら渡来はやめる」

反対する者は誰一人いなかった。これで決まった。北朝鮮に渡り、

そこにいるエスパーを殲滅し、事情を聞く。さつそく、船かへりの手配をしてもらわなければ。

「話は固まったかね」

後ろから先ほども聞いた声がある。支部長だった。どうやら、俺達がかこうへ渡るだろうと、予測していたらしい。本当に予測するのが好きな爺さんだ、と呆れていたが、この際どうでもいい。

「大丈夫だ。向こうへの交通手段はへりだ。本土の真上を通らず、中国に降り立って、そこからは陸上の移動となるが」

「構いません。出発は明日でもいいですか」

「分かった。では、明日の十時ころに、またここに来てくれ。へりと、同行する兵士を手配しておく」

「ありがとうございます」

闘也は頭を下げ、また、あの穴へと向かっていった。他の四人もその後を付いていった。

「若いのはいいねえ……」

闘也達が見えなくなったころ、ため息をついて、支部長は呟いた。老いつつある自分の体を皮肉りながらも、闘也達への少なからぬ期待であった。

次の日の九時半過ぎ、闘也達は協会の前に来た。そこには、立派な戦闘へりが三機ほど用意されていた。

「中国へはすでに入国許可をもらった。君達は、この一号機に乗り込んでくれ」

指し示されるまま一号機に乗る。他の二つには、軍服に身を纏った兵士達が、すごいスピードで乗り込んでいる。まるで飛行機が兵士を食っているかのようだ。突然に、乱州がへりから飛び出し、ある一人の兵士の下へと駆け寄った。

「正人さん！ 久しぶりです！」

正人と声をかけられた少年は懐かしいような顔をして応答していた。

「久しぶりだな。乱州。仲間とはうまくやってるか」

「もちろんです。そうでなければ戦えませんし、正人さんにも悪いですから」

「僕が？ どうして？」

「俺の言葉をすっかり受け止めてくれた人だからです」

瞬間、沈黙が二人の間で起こった。正人は「そうか………」と、一言言つと、乱州に手を差し伸べた。

「この作戦、がんばれよ」

「お互いに」

がつつりと握られた手が、ほどける。正人が二号機に乗り込む。乱州が戻ってきた。かなり嬉しそうな表情だ。

声をかけようとした鬨也より先に、支部長が出撃命令を出して、ヘリのプロペラ音が響いた。少しずつ、地面から遠ざかり、人が、町が、少しずつ小さくなつていった。

五人は驚愕した。彼らの目に飛び込んできたのは、焼け焦げた自分達の町だった。五人それぞれが、それぞれの表情を浮かべた。鬨也は口の中で歯を喰いしばり、拳が震えていた。乱州は真剣な表情を浮かべ、秋人は驚きのあまり口がポカンとあいている。的射や由利は両手で口を覆っていた。驚き、怒り、悲しみ。さまざまな感情を作らせた町はやはり少しずつ小さくなっていった。やがて、彼の目には、青い日本海が映った。そして、その向こうには、うつすらと陸が見えた。鬨也達は、ずっと内陸暮らしだったため、海を見るのは初めてだった。そして、水平線に陸を見るのも初めてだった。太陽が真上に昇りきったところ、北朝鮮……ではなく、韓国が見えてきた。北朝鮮より南東の位置にあるこの国にも、サイコストがいるのだろうか。しかし、韓国も徐々に遠のき、再び海が見えた。

しかし、中国の到達前に事件は起こった。突然に、ヘリの警報アラームが鳴り出した。何が起こったのか。五人は、一斉に四方八方を見回した。

「君達！ 念のため、天井についてるパラシュートを装備してくれ！」  
闘也達は指示されるがままに、腰にパラシュートを巻きつけ、腹でしっかりと繋いだ。

「くそつ。ここは北朝鮮の領空じゃないはずだ。なのになぜ北朝鮮の戦闘機がいるんだ！」

ピピッ。ヘリの無線機に通信が入った。

>こちら一号機<

>こちら二号機。北朝鮮の戦闘機を肉眼で確認した<

>こちらも肉眼で確認した。攻撃されないように、なるべく戦闘機とは距離を取ってくれ<

>了解。二号機、三号機ともに後に続く<

そこで無線が終了する。ヘリが僅かに右に傾く。そのときだ。ヘリの左側で音がした。鉄と鉄が傷つけあうような音。戦闘機が攻撃をしかけてきたのだ。

>こちら一号機！機関銃と思われる弾丸に被弾！ 損傷は軽微。これより武装変換に移る<

>了解。こちらも武装変換に移る<

その瞬間、ヘリは周りの装甲を分厚い地金に変えた。そして、プロペラを収納し、その代わりに後部からジェットエンジンを突き出した。そこからエンジンが点火された。どうやら、プロペラを動力としていたヘリは、ジェットを動力とする戦闘機へと、その姿を変えた。これは、武装変換というよりは、機体変形といった方が正確と思える動きであった。

「君達！ 今から北朝鮮の本土の真上を通って、君達を投下する！ いつでも下りられるような態勢を作っておいてくれ！」  
闘也達がつつ伏せの状態を取った。無線機に通信が入る。

>こちら二号機。パイロットを除いて、総員六名、投下準備完了<

>こちら三号機。こちら総員六名、パイロット以外は投下準備完了<

>了解。こちら五名、投下準備は完了だ。無線による通信が切れる。一号機は先頭を飛んで、北朝鮮に近づいた。

「君達！ そろそろ投下する！ 心と体の準備をしておいて！」

パイロットは、右手で操縦しながら、左手の指先で、投下ボタンを押しかけていた。もう少し力を加えれば、スイッチが作動し、床が開いて、投下される。

「投下するぞ！ 皆……グッドラック！」

その言葉を最後に、床が開いた。両手両足を全面に広げ、落ちていく。少しずつ陸が近づいてくる。先ほどのパイロットから、無線が入った。

>今だ！ 第一号機部隊、パラシュートを開け！<

言われるままにパラシュートを開く。五つのパラシュートはゆっくりと降りていった。なんとか、海岸に着陸完了。そのうちに、他の部隊も下りてくる。闘也たちも含めた十七人が、北朝鮮に降り立った。闘也は無線に話しかけた。

「こちら魂波。第一部隊「魂」、他二部隊、無事着陸した」

>了解。気をつけて<

無線が途切れると、闘也は大きく深呼吸した後、闘也は一本の剣を作り出した。

## 20、潜伏

五人は北朝鮮の大地に降り立った。少し横暴なやり方ではあったが。隊長であるうものが話しかけてきた。

「「魂」隊。基本的に我々第二、第三部隊は、周辺の見張りをを行うので、そちらは進行しつつ、エスパーがいたら殲滅してほしい。北朝鮮の軍が攻撃したら、反撃をしてくれ。北朝鮮の弾は、エスパーのようなものとは違う。当たったら死ぬ。その考えの上で行動してくれ」

「分かった。それでは、いつてくる」

「気をつけて」

兵士全員が敬礼し、鬨也達も、敬礼した。鬨也は地図を開いた。北朝鮮の軍事施設の内部とその周辺の地図だ。かろうじて、自分達の場所も記されていた。方位磁針と照らし合わせ、方角を確認し、そちらに向かって足早に歩き始めた。

「乱州う！」

正人が叫んだ。手を振っている。

「がんばれよーっ！」

乱州は足早なまま、振り返って手を振った。

北朝鮮の軍事施設が見えてきた。兵士に警戒され、攻撃されても面倒だ。だが、なにやら慌ただしい。自分達が見つかったら、撃たれるか、報告されるはずだ。

向こうの部隊が見つかっているはずもない。なのになぜ………。いつもは聞き取れる会話も、残念ながら日本語ではないため、意味は理解できない。

そのとき、軍の戦闘機が、豪快なエンジン音を上げて十機ほど飛び立った。その先を見上げてみた。あれは！ 先ほど、ヘリから戦闘機へと変化した自分達のものだった。なるほど。あれが標的か。

それで慌ただしいというわけか。言葉が分からない以上、行動から理解するしかない。闘也は無線のスイッチを入れた。

>こちら一号機<

「こちら魂波。現在、軍事施設が見える範囲内のところに潜伏中。しばらくここで様子を見る」

>こちらもなにか・・・うわっ！ もうあつたようだ！ 敵の攻撃を受けている！ 戦闘機が十機！ 北朝鮮のものと思われる！<

闘也は、無線を切ると、横にいた的射に話しかけた。

「的射」

「なに？」

「あの戦闘機、一機残らず落とせ」

「分かったわ。やってみる」

的射は覚醒し、バズーカを構えた。バズーカは元々対戦車用だが、中には対空のバズーカもあるため、空に向かって打ちあげても問題はない。的射が、一機、また一機と撃ち落としていく。ここから撃つと、それなりの煙が発生して、潜伏がばれてしまうため、秋人に煙を吹き飛ばさせた。

しばらく待ち、夜になった。ここまでで特に変わった様子はない。強いて言えば、あれ以上、戦闘機は出撃されなかったことぐらいだ。しかし、とうとう変化が現れた。黒い衣服に身を纏い、そいつはやってきた。人目を気にせず、どんどん進んでいった。闘也達もあとを追った。そいつから、多量のエスパー反応がしたからだ。

こいつが、例の複数人いるリーダーのうちの一人であろう。ソウリールがここに逃げてきたとは思いつらいが、少なくとも、こいつは、ソウリールと同等のエスパーのはずだ。さらに奥へと進むそのエスパーを、尚も追い続ける。エスパーは、一つの部屋に入っていた。近くの柱に身を隠し、再び出てくるのを待つ。やがて、なんの変わりもなく部屋から出てきた。だが、さつきより足取りは重い。何かを抱えているかのようだ。尚も後をつける。そいつが軍事施設

を出たころには、外は暴風だった。そいつの姿が月明かりに照らされる。なんと！人を抱えている。しかも、一人や二人ではない。十人もだ。しかも、奪われている人間は、小さい。一日中見張っていても、あそこまで小さな兵はいなかった。つまりやつは、対象のものや人の大きさを変えることができるというのか。

「貴様ら」

そういつて、そいつは振り向いた。いつから気づいていたのかは分からない。今気づいたのか、部屋に入るときや出るときに気づいたのか、もしくは、初めから気づいていたか。

「我のような身分の高いエスパーを尾行するとはいい度胸しているな」

「どのみちこうして対峙する。そんなのは関係ない」

「まあいい。俺ははやいところ、お前らを、ありのような大きさにして、ひねり潰したいからな」

「闘也」

乱州が後ろから話しかけてきた。

「あいつの能力は、トルチェンジ全長変形。俺の身体ボデーの能力の上位能力みたいなものだ。気をつける」

「ああ。言われなくてもそうするつもりだ」

闘也は覚醒した。黄色い魂の色が闘也を包む。右手に握られた剣にも、黄色い魂の色がうかがえる。

「そついえば、まだ名を言ってなかったな」

思い出したかのようにエスパーが話す。

「我の名は、エスパー軍、最重要組織「ESP」軍兵生産専門、二ワダ・エスパー」

姓がエスパー。ソウリールもエスパーだった。エスパーは、やつらの言う「ESP」の者だからエスパーがつくのか、あるいは……

「名がどうであろうと、俺はあんたを倒す、それだけだ！」

「それでは、お手合わせ願おうか」

「臨むところだ」

闘也は、ニワードの方へと走り出した。闘也はソウルソードで、斜めに斬りつけた。かわされる。その後も斬り続けるが、一向に当たらない。

「その程度か。なら、こちらから攻撃させてもらおう」

ニワードは両手を上に掲げた。

「ダイクサイス  
暗黒鎌」

そこに巨大な鎌が現れる。黒いその鎌は、ニワードよりもはるかにでかい。こんな巨大な鎌を扱えるのか。しかし、いとも簡単に扱ってきた。よくみると、やつ腕は鎌に見合った大きさになっている。なるほど、能力を使って、腕を大きくしたということか。だが、それはこちらにもある。乱州に呼びかける。

「乱州！融合だ！」

「分かった。一緒にやつを倒すぞ！」

二人は融合し、巨大な剣を構えた。

「ビックソウルソード」

乱州の能力を使い、腕を巨大化させ、そのビックソウルソードを軽々と振り回した。ニワードの鎌と、闘也の剣がぶつかる。僅かに火花が散り、つばぜり合いになる。刃先がギリギリと音を鳴らす。闘也は、無防備なニワードの腹部へと蹴りをいれる。ニワードがよろけ、少し下がる。チャンスとばかりに斬りかかるが、かわされた。なんてやつだ。今まで戦ってきた八幹部や四天王よりも、はるかに感応力が高い。でも、かわし上手は、大抵は……。

「脆い！」

闘也が、腕をめいっばいのばし、腕のドームを作り出した。これで逃げられない。連続で斬りつける。狭いドームの中でさえ、すばやく動いていたが、当ててしまえばこちらのものだ。そう。かわすのが上手いやつは、だいたいは打たれ弱い。先ほどのキックであればどよめいたのだから、これだけ斬りつければひとたまりもないはずだ。ドームを開けると、ニワードは、ほぼノックダウンしている。

だが、また立てそうだ。ここで決めるか。

「ダブルソウルソード」

そういつてソウルソードを二本作り出すと、大きくしていた腕を、長い腕へと切り替える。そのまま回転する。

「秋人！」

呼びかけられた秋人は、その中に飛び込み、融合した。秋人が入ったとたん、闘也達を中心に竜巻が起こった。闘也が回転することによって、さらに風速が早くなる。いつしか巨大になった竜巻は、ニワダを飲み込んだ。

スピンソウルソードタイプワン  
「高速竜巻回転魂剣斬！！！！」

巨大な竜巻に完全に身動きがとれなくなったニワダに、回転しながら突っ込む。竜巻の真上に投げられたニワダに、両手を伸ばし、その先に剣を持ち、高速回転をした闘也達が突っ込んでいく。見事命中し、連続で斬り続ける。

かなり上空まで上り詰めた。後は……………。

「ソウルハンマー」

ソウルソードをハンマーに変えた。しかも、片手に一つずつだ。つまり、二つ。

プレスハンマー  
「重圧力棍！！！！」

二つのハンマーを左右から押し付け、圧力をかける。ニワダはいつも簡単に潰れた。かろうじて、僅かな意識が残っている。ニワダは、最後の言葉のように、話し出した。

「わ……………我を倒したところで、サイコストに……………勝利はない……………。貴様らが、あがいたところで、もうエスパーは、戦力を下げることなく、戦い……………続け……………ら……………」

そこで、開いていた口が動かなくなった。その瞬間、ニワダから、大量のエスパーのエネルギーのようなものが、あふれ出した。そして、それらは軍事施設の中へと入っていった。兵士達をエスパーにする気か。闘也たちは急いだ。エネルギーに追いつく。五人がそれ

その属性を使い、それらを球体に封じ込める。そして、それを外に持ち出し、乱州の能力で、思いっきり遠くへ吹っ飛ばした。

月の光が、静まっている夜の日本海を照らす。ソウリールは、闘也達から逃げ切った後、日本海南側の上空を、エスパー01に乗って飛んでいた。あのままあそこにも、どんどん兵士を失うジリ貧に陥る。それよりだったら、今、軍兵を大量生産しているニワードがいる北朝鮮へ向かうのが最良の選択だったと思う。

そんななか、一つの球体が飛んできた。レーダーを確認させると、なんとそれは、ニワードのエネルギーだった。まさか、ニワードがやられたのだろうか。誰に、いつ。しかし、その見当はつく。誰かは、闘也達、いつは、ついさっき。そして、死に際にエネルギーを全放出したのだろうか。

「闘也達に属性のお土産つきで飛ばされるとはな。回収しろ」

「イエッサー。回収作業に入ります」

そういって、エネルギーが回収された。ソウリールは、後は頼んだぞ、と言い放って、自室へと戻っていった。

自室で鍵を何重にもかけると、額をノックした。この間の額とは違う額だ。そこから、一人の男が出てきた。四十ほどの男は、がちりとした体型だ。ソウリールはその者の名を呼んだ。

「お久しぶりだな。ゲルガー様」

「久々に会ってみれば、さらにたくましくなったな。ソウリール様」  
「あんたほどじゃないさ」

「それで、今日は何ようだ。私は眠いのだ。手短かに頼む」

「単刀直入に、ニワード様がやられた」

その一言で、ゲルガーが驚愕しているのは、その表情と言動から目に見えて分かった。

「なんと！ ニワード様が！」

「ところで、ゲルガー様、ニワードと計画していた例の作戦はどうなった」

「安心しろ。すでに完成済みだ」

「それはよかった。それで、その……機械の名称は？」

ちよつとたじろぎながらソウリールはゲルガーに問うた。ゲルガーはそんなソウリールを「ふふっ」と笑うと、そこに続けた。

「おどおどするなんて、君らしくないな。名前は、RX - s i r a。日本語でルックス・シーラ。通称はルシーラ」

「ルシーラか。いい名前だな」

「だが、この名前をつけたのは、私ではなく、ニワード様なんだがな」

つい先ほどエネルギー体という死を迎えた者の名を出され、ソウリールは「そうか……」と答える以外なかった。ソウリールはしばらく黙ったが、思い出したように口を開いた。

「まあいい。眠いんだろ？ そろそろ、おひらきとさせてもらうよ」

「ああ。今日は、朝から一日中開発していたからな。では、よい夢を、ソウリール様」

「お疲れ様」

そういって、ゲルガーは額の中に帰っていった。部屋には沈黙が広がった。もちろん、ソウリールしかないからだ。ソウリールは、時計を見上げた。大きな時計で、ふりこで動いている。どこから見ても古時計だった。現在時刻二十二時五十三分。俺の計画の成功まで、あと三日と一時間七分。

ソウリールは、作戦室へと戻っていった。

## 21、悪夢

ゲルガーとニワダの作戦により、再び軍兵の生産力を取り戻したエスパイ。この作戦は見事に成功したが、ニワダが、我がエスパイ軍、最重要組織「ESP」の存在を教えたため、やつらは、それを倒そうとさらに力を上げてくるはずだ。

「ESP」のメンバーは、戦闘技術専門、ソウリール。軍兵生産専門、ニワダ。生態研究専門、ゲルガー。戦争が始まってから顔をあわせたのはこの三人だけだが、あと一人だけ、「ESP」のメンバーは残っていた。

偵察指揮専門、ガルラ・エスパイ。それが彼の名だ。

今はどこで行動しているのかは分からないが、きつとどこかで、やつらの情報を得ているか、もしくは、直接尾行しているかのどちらかだろう。あいつはかなり破天荒なやつで、ときに、自ら偵察に出たりもするほどだ。

ソウリールは部屋でモニターを鑑賞していた。現在、ソウリールの所属のエスパイがどこで活動しているかが人目で分かるものだった。そのとき、脳内にノック音が響いた。誰かから呼び出されたのだろうか。……呼び主は、ガルラ！なにか報告があるのか？

闘也達は、ニワダを倒し、しばしの休息をとっていた。しばらくして、無線に通信が入ってきた。

>こちら一号機。応答願う<

「こちら魂波。任務は終了。これより、帰還します」

>分かった。着陸地点は、海岸だ。五分で到着するから、準備しておいてくれ<

「分かった」

そこで無線は切れた。無線で応答するのは、闘也しかできないが、聞くだけなら、他の四人も可能だった。

「皆。聞こえたな。これから海岸に向かう。歩いて七分くらいだったから、走れば五分くらいで着くはずだ」

「よおつし！海岸まで競争しようぜ！」

「えー。秋人だけずるーい」

「秋人は四分待ちね」

「えー」

笑い声が起こる。秋人以外が一列に横に並ぶ。秋人が「よいい・・・スタート！」と言い、四人は一斉に飛び出した。トップは乱州。その次に闘也、由利、そして的射だった。それぞれ、女子同士と男子同士で競っていた。

四分後、秋人は最高速で走り出した。周りの風景は一瞬にして移り変わっていく。闘也達が少しずつ近づいていると感じていた。さらに先に海岸も見えてきた。夜とはいえ、月明かりに照らされていて、道は明るかった。

闘也達は、海岸を目前にして、かなりのデットヒートだった。闘也と乱州は、追い越し追い越されの連続を繰り返し、的射と由利も必死にそれに食らい付いてきた。そんな中、後方から、大きな砂煙を上げて何者かが迫ってくる。誰かは分かる。秋人だろう。

「秋人が追いついて来たぞ！」

闘也が叫ぶように言うと、他の三人は後ろを確認した。

「スキあり！」

三人が後ろに気を取られている間に、闘也はラストスパートをかけて、スピードを上げた。かなりの速さだった。他の三人を引き離れた闘也は、そのまま海岸に到着した。秋人はかなり近くまで追いついているようだ。

「俺が奇跡の大逆転をおおおー！！」

秋人が三人を追い越す。そのまま海岸に突っ込み、ゴール。つまり秋人は、他の四人よりも、四分待ちしたのに、五位から二位まで上がったのが誇らしいんだろう。そのまま、乱州、由利、的射の順番

で海岸に飛び込む。秋人を除いて誰もが息を切らしていたが、顔は笑っていた。

そこへ、ヘリが下りてくる。こちらにもものすごい風をあてながら、ゆっくりと下りてきた。

「お疲れ様」

「ああ。ありがとう」

パイロットに軽く笑顔で語りかけた。

しかし、労いの言葉を言い放ったすぐ後にパイロットの表情は固くなり、こちらを見てきた。

「実は、たった今協会から連絡があった」

協会から連絡。この表情で連絡があったと言っつてことは、たぶん、いい連絡ではないだろう。

「何があつたんですか」

闘也はたずねるように聞き返した。パイロットは、まず全員を乗せてからと言っつて、五人をヘリに入れると、開きたくなさそうな口を開いた。

「炎天エリアがエスパーによって攻撃されているらしい。しかも、かなり苦戦しているようなんだ」

今までの笑いが一気に消え去った。攻撃された！？そこまで弱かったのか、炎天の軍は！いや、それとも、俺達が北朝鮮へ向かったというのを、誰かが誰かに知らせ、その隙を狙って攻め入ったというのか。

「ソウリールはいるか分かりますか」

「いや。協会からの連絡では、ソウリール、もしくはそれに匹敵するほどのエスパー反応はなかったらしい」

ということは、通常の兵、もしくは上級兵が数で攻撃しているということがある。ということは、炎天に直接ヘリを下ろすのは難しそうだな。ということは、覚醒して降りていくしかないだろうな。

「これ、戦闘機にすれば、スピード上がるんじゃないんですか？」

「そうなんだが、変形する度にメンテナン스가必要なんだ。実際、

このへりは一度も降り立ってないんだ」

「そう……ですか……」

「到着まで二、三時間はかかる。それまでに仮眠を取っておけ」

しかし、そう言われてもあんなことを聞かされてそう簡単に眠りにはつけない。何か言いたそうな鬪也へと、パイロットは言った。

「大丈夫だ。もっと炎天の皆を信じてやれ」

「……はい」

鬪也達は、言われるままに眠りについた。

……ここは？ 一体何があつた？ 皆は？ 俺は？ 夢だろうか。たぶんそうだろう。真下には、町がある。覚醒もせずに浮いているんだから、たぶん夢だ。

「おい」

正面から声をかけられた。はっきりしない声だが、男のような太い声だった、

「お前が町を出て行ったせいで、こうなった。これはお前が引き起こしたことなのだ」

口が開かない。はっきりしていることは、これは夢だという意識があることだけだ。

「お前だけでも残っていれば、こんなことにはならなかった。眠っているお前には、今は誰よりも非力だ。力を持たぬただの動物にすぎない！」

シヨックがこみ上げてきた。通常なら言い返してやりたいが、口が開かないんだからどうしようもなかった。

「お前のせいでどれほどの人間が死んだと思っっている！ どれほどの住居を失ったと思っっている！ どれほどの人間の、生きる希望を奪ったと思っっている！」

うるさい、うるさい、うるさい！ 黙れ！ お前にそれができるのか！ くそつたれ！

俺はいつだって仲間と共に戦ってきた。だからこそ、見捨てるわ

けにはいかない。例え侵略が免れたとしても、向こうで仲間がやられたなんて報せを聞きたくない。せめて、目の前で見届けたい。お前は仲間を信頼していかないのかよ！

「信頼しているからこそ、私は見送るべきだったと思う。むしろ、お前の方が、よっぽど信頼していないように見える。自分の仲間は弱いから、自分がいないといけないと」

悔しいのはやまやまだが、確かにそうだった。信頼し、大丈夫だと思っからこそ、見送る。逆に付き添うのは、自分の仲間は非力だ。自分がいないと何一つ力を発揮できず、死に行く者たちだと決め付けるようなものだ。だけど俺はちがう。逆だ。仲間が後ろに、ただ突っ立っているだけだとしても、それが俺の力へと変わっていく。加勢したなら尚のこと。

「どうやらお前は、我と戦う資格があるようだな。いつか会えるのを、そして、お前と剣を交えることを、楽しみにしている」  
その言葉を最後に、そいつは少しずつ薄れ、やがて消えた。

目が覚めた。息が荒くなっていた。外はまだ闇に閉ざされていた。パイロットに時間を聞くと、三時らしい。他の四人も、息が荒くなりながらも目が覚めた。

「もうすぐ日本の領空に入る。領空に入って、十分もすれば炎天につく。しっかり目を覚ましておいたほうがいい」

「……はい」

## 22、力

パイロットの一言から一分もしないうちに、日本の領空に入り、その十分後には、炎天が見えそうなところまで来ていた。さらに先へと進んでいくへりは、炎天の真上まで来た。そこに来て、闘也達は、炎天の様子を目の当たりにした。出発したときよりもひどい。あちこちの建物が壊され、こんな上空でも見えるほどのエスパーがいた。溢れかえっていた。炎天で一番高い山、炎高山の頂上には、大きく「ESP」と書かれた旗が風になびいていた。とうとうエスパーは、この炎天を手に入れたといっても過言ではないだろう。すぐに協会まで戻り、協会の中へと入った。

遅かった。すでに中にはエスパーしかいない。他に誰もいない。闘也達に気づいたエスパーは、闘也達に襲い掛かってきた。

「よし！戦力を分散して戦うぞ！」

「了解！」

全員が承諾し、五方向に飛び出す。各所で奮闘しているようだ。

その瞬間、地面が揺れた。いや、協会は地下にあるのに、上からもゆれを感じる。奥の方で戦っていた五人は、その音とゆれの方向を感知した。

「入り口側か？」

闘也はエスパーに数発の弾丸を撃ち込むと、今来た道を逆戻りした。五人全員が入り口付近まで集まった。天井に穴が開いている。一人のエスパーが、五人全員を見渡した。

「我は「ESP」生態研究専門、ゲルガー。貴様らをここでひねり潰す」

さらに天井から、もう一人のエスパーが現れる。ソウリールではない。

「私は「ESP」偵察指揮専門、ガルラ。エスパーのため、この命を懸ける」

二人の男のエスパー。さらにESPのメンバーということは、かなり強いはずだ。だが、闘也からすれば、研究専門と偵察専門なら、戦闘能力はそこまで高くないのでは、と。だが、油断はできない。研究員とか偵察隊の隊長なら、そこらへんのエスパーでも、やれといわれればやれるはずだ。つまりは、戦闘能力もかなりのものだということになる。それに、偵察の隊長エスパーの方は、姿を確認するまで、エスパー反応がしなかった。つまりは、それほどまでにエスパー反応を薄める力を持っているということになる。

こいつら、そう簡単には倒せそうにないな。

戦う前からでも分かる。闘也は一本の剣を作り出し、二人のエスパーにその刃先を向けた。

「望むところだ。だが、たたき潰されるのはそっちの方だ！」

「闘也。たたき潰すじゃなくて、ひねり潰すだぞ」

乱州が口を挟んできた。言うてから気づいたのでどうしようもなく、一言返すだけにした。

「分かったよ」

闘也はその過ちを認め、そして、自分の後ろにいる仲間たちに向かって言った。

「よし、やるぞ！ 皆ー！」

五人は各方向に散り、エスパー二人を攻めた。闘也は正面から攻めた。ゲルガーの目の前まで接近すると、握っていた剣を真横に振った。見事に命中。

「この程度か。これはガード態勢をとるまでではない」

乱州は、腕を伸ばして、ゲルガーを攻撃する。しかし、先ほどと態勢は変わらない。腹部にもろに命中したが、その腕を苦もなく捕まえる。そちらに気を取られている間に、闘也は連続で斬りつけた。だが、効果は薄いようだ。

「<sup>メンタル</sup>耐撃か・・・」

<sup>メンタル</sup>耐撃は、そのダメージを軽減したり、応急処置のようにある程度の怪我を数秒で回復される、防御に適した能力である。

「こんにやるおおっ！」

乱州は掴まれている腕を取り戻すため、腕を縮め、それによって自分が近づき、その反動でもう一つの腕を伸ばした。

見事、ゲルガーの腕に命中した。腕が縛られていた感覚がなくなり、自由になる。すぐにその腕を巨大化させて、ゲルガーの顔面を強打した。ゲルガーがよろめく。よほど効いたらしい。

しばらく腹部を斬りつけていた闘也は考えた。頭部であんなによろめくということは、あそこが弱点か。だが、腹部もかなりダメージを与えてあり、傷も多い。それなら。

「乱州！腹部の傷を狙って攻撃してくれ！俺は頭を狙う！」

「分かった！」

言われるがままに乱州はその巨大な拳の中心を、一番深そうな傷のところへ当てた。ゲルガーは、その腹を押さえ、体が丸くなり、頭を下げた。

「頭下げて痛がってる暇なんて与えねーよ！」

闘也は、ソウルスティックで顔面をはじくようにして頭を起こした。ゲルガーは、上を向いた状態になっている。

「ソウルハンマー！」

闘也はそこに、巨大なハンマーを作り出し、頭上で振りかぶった。

「ブレイク・ハンマアアア！！！！！」

勢いよくそのハンマーは振り下ろされ、顔面を強打した。

「ぐふふふふふふふああああああ！！！！！！！」

ゲルガーはその悲鳴にも雄叫びにも聞こえるような声を張り上げて、消えていった。そこから、大量のエスパーのエネルギーみたいなものが現れた。そのエネルギーは、どこかへと飛んでいってしまった。そちらに気をとられた一瞬、闘也と乱州は吹っ飛ばされた。向こうで、ガルラを相手にして秋人、的射、由利が戦っていた。かなり苦戦している。どうやら、ゲルガーがいなくなったことで、いつきに力を解放したという感じた。

「君達の動きはすでにインプット済みだ。だからこそ、君達は勝て

るわけではない」

あの秋人のスピードさえもかわされている。完全に秋人の動きを見切っていた。

インサット 読込。目の前にある人、物、動物等の状態や行動パターンを読むことで次の行動に繋げる能力である。

「余所見をしている暇はありませんよ？」

いつのまにか後ろにはガルラがいた。だめだ。逃げ切れない！そう思ったとき、背中に衝撃がくる。痛みがガルラの拳を通して伝わってくる。一瞬、骨が折れるんじゃないかと錯覚した。それほどのものだったのだ。

「ぐはっ！！」

闘也がうめき声を上げる。かなりの距離を飛んで闘也は倒れる。背中が痛む。足と手を壁や床につかせながらゆっくりと立ち上がる。

両足がしっかりと地面についた瞬間、また背中が痛む。このようにだと、この猫背の状態のまま戦わなければならない。ガルラが突っ込んでくる。目の前で乱州がガードする。闘也は、痛みあまり、声もでなかった。乱州にテレパシーを送る。

(乱州、融合して俺を取り込んでくれ)

(確かに、その体じゃまともに戦えそうにないな)

乱州はそういうと、融合し、闘也を取り込んだ。目の前で力を発揮しつつあるガルラに向かって言い放った。

「ここからが本番だ。俺達の本気を見せてやるぜ」

絆で結ばれた相棒の二人は、乱州を前にして戦闘を開始した。

ガルラは、正面から攻撃してきた。ガルラの右手が光る。

「光拳、ライトパンチ！」

しかし、どうやら転んだらしい。滑って転んだのだろう。足元を見ると、そこには氷が張られていた。

「私の水を、限界まで冷やしたわ！今のうちに攻撃を！」

的射のその言葉に惹かれるように、乱州は腕を巨大化させ、その腕をガルラに向かって伸ばす。ガルラは立ち上がろうとするが、氷に

足を取られ、立てないようだ。成す術もないまま、命中。今度はガルラが吹っ飛んだ。

(乱州、いい作戦を思いついた)

「まじか!? よし、じゃあ言え! 実行に移す!」

闘也がテレパシーで説明する。そのうちにガルラは再び突っ込んでくる。乱州は、闘也の炎を使って、氷を溶かし、水にした。ガルラはそのまま突っ込んでくる。闘也が指示を出した。その指示を聞き、乱州は拳を構える。しかし、殴りつけはしない。その拳の中には、電気が纏われている。ガルラが大きな音を立てて水に足をつける。

今だ!

「ビームサウンダー光線雷!」

乱州は両手を開き、その先から、雷を作り出し、それを水に向かって打ち出した。水は雷に触れた瞬間、黄色と白が混ざったような色を作り出し、発電した。もちろん、水に浸かっていたガルラも共に雷を受け、痺れ、その場に倒れこむようにして座ってしまった。体が痺れ、思うように体が動かない。それが今のガルラの状況だった。(もう俺は大丈夫だ。分離してくれ。いやと言われても分離してもらう)

闘也の意図は分かっている。この状態の時に、全員で、攻撃するというのだらう。確かに今以上に、こいつに大きなダメージを与えられるチャンスはない。乱州は闘也と分離した。

「よし、全員、こいつに最強の技をぶち込め!」

闘也自身、この言葉を懐かしく感じていた。八幹部のビーグルと戦った際、一気に勝負を決めるためにこの言葉を言い放ったのだ。もつとも、その当時、由利はいなかったのだが。

五人がそれぞれの態勢を取る。最初に攻撃を開始したのは、的射だった。

「ダブルバズーカ!...ファイヤツ!」

肩にずっしりと構えられた二つのバズーカが火をふいた。二つの銃口から撃ちだされた弾は、一直線にガルラに向かっていく。

「オールドタイム全属性　　発射！！」

由利は持つていた杖から、火、水、雷、土、風の全属性を作り出し、それをガルラへ向かって攻撃に移した。

「マツハGパンチ！！」

秋人は、的射、由利の攻撃が当たったのを確認して、全速力でガルラに突っ込んだ。建物の中でさえ、助走なしでここまでスピードが出るのはすごい。

「ハイギガントアーム超巨大腕打！！！！」

乱州は右腕を巨大化させた。かなりの大きさだった。いつも繰り出している「巨大腕打」よりも格段に大きいものだった。この拳をくらったら、ひとたまりもないはずだ。

「フルウェポン・コンビネーション全武器連携攻撃！！！！」

技の名前からして、全ての武器を使うようだ。他の四人の攻撃はすでに終わっている。つまり、もう自由に攻撃可能ということだ。

闘也は最初にふたつの銃を作り出した。二つの銃から弾丸が発射される。その弾が当たったかどうかを確認するまえに闘也は飛び出している。

二つの銃を一つの長い棒に変える。棒の先で顔を強引に上げる。そして、その先を放し、再び顔が下がらぬうちに、もう一方の棒の先で顔を殴りつけた。真上に飛び上がった闘也は、スティックをハンマーに変えた。そして、そのまま腰を強打した。ガルラは仰向けの状態になる。闘也は一本の剣を作り出し、飛び上がった。その瞳が狙うのは、紛れもなく、ガルラの心臓だった。

「はああああああ！！！！！！」

闘也はその剣を心臓に突き刺した。剣の先から血がにじみでている。闘也はまだ剣を握っていた。そのうちに、ガリガリと鉄のような音がする。どうやら、床に剣の先が届いたようだ。つまり、貫通したのだ。

闘也は剣を抜き取り、覚醒したまま飛び上がり、地上に出た。他の四人もあとに続いて地上に出た。

力は、ただの力。他の何でもない。それを世のため人のために使うのはいいことだ。だが、彼らエスパーは、自分達はその能力を使うことによって全ての人類を支配下におき、それが世のため人のためになると思っっている。世界に必要なのは、支配する人間でも、人に恐怖を与える力を持った人間でもない。人の意見を聞き、なおかつ自分も意見する。そんな「力」を持った人間が必要はずだ。だが、現実に、その力を使いこなせる人間がいないのが現状だった。戦争前の政治家ですらもそうだった。

闘也達は、目の前に人の気配を感じた。闘也はその顔に怒りを覚える。

「ソウリール……！！！」

## 23、決戦

闘也はその男に向かって怒りが含まれた口調でその名を呼んだ。ソウリール・エスパール。この戦争を起こした張本人でもある。全ての戦いの原点にある者。そんな呼び名が一番似合いそうなほどだ。闘也は、ソウリールを心から憎んでいた。戦争を起こしたからでもあるし、母を殺させたからでもあるし、自分達の前から突然姿を消したからでもあるが、なによりも、自分の力を過信し、それを自分達に見せつけ、押さえ込もうとしていることだ。

だからこそ、絶対に許さない。俺が倒す。いや、俺しか倒せない。俺は……貴様を討つ！」

闘也は一本の剣を作り出す。闘也が一步前に出たとたん、後ろが塞がれた。電気の膜が張られている。その中にいるのは、闘也とソウリールだけだった。

「この電膜、貴様が逃げたときのものか」

「よく覚えているな！ あれの強化版みたいなものだ」

ソウリールは一本の剣を取り出す。光を放っている。

「この剣はただ刺すための剣ではない。光でできた剣。そう、これぞ！ 人類の最高傑作と言われた、鬼光剣、ビームソード！」

ビームソード……。伝説に聞いたことがあった。古い昔の偉い学者が書いた予言書の中に、ビームソードのことが載っていた。その伝説と言われたものが、今やつの手元にある。どんな能力を使ったのかは知らないが、強力な武器になることは間違いないはずだ。

「始めるぞ。闘也」

「……………」

沈黙が一瞬広がる。その後、すぐに闘也とソウリールが走り出す。二つの剣が、電膜の中心で交差する。互いに再び距離をとって、相手の出方をうかがっている。闘也は覚醒して戦っている。この戦い

で、全てが終わり、全てが始まるはずだ。しかし、この戦いに勝てなければ、その終わりも始まりも、悪いものとして進んでいってしまう。だから、勝たなければならない。

「てえええい!!」

闘也が剣を振り下ろし、ソウリールを攻撃しようとする。待つてましたとばかりにその剣を受け止めたソウリールは、右足を突き出し、闘也に蹴りを入れる。その攻撃をまともに受けた闘也は、五メートルほど後ろに下がる。闘也は片方の手に銃を作り出して、ソウリールに打ち込んだ。ソウリールはその弾丸を完全に見切り、剣ではじいたり、かわしたりしながら近づいてきた。

「その程度か？」

ソウリールのビームソードは、闘也の腹に向かって突き出された。闘也は飛び上がり、紙一重でなんとかかわした。あの剣で斬られたら、斬られた場所から解けていく。それによって、体が分断されたりしたら、戦闘どころか、一撃で死ぬ。

「ソウルツ！」

闘也はたくさん分身を作り出した。これこそが魂の能力だ。今、怒りの感情を大量に詰め込んだ闘也の魂は、かなりの強さのはずだ。魂はそれぞれ、ハンマーやステイク、ガンとソードを片手ずつに持ったり、巨大な剣を両手持ちにしたりしている。闘也本体は、二つの剣を持っていた。闘也は、右手に持っていた剣の刃先をソウリールに向けた。

「やるぞおおおっ!!!!」

その瞬間、闘也の魂たちは一斉に走り出す。闘也は、なるべく自分に被害がないように、離れて様子を伺っている。この程度で簡単に敗れるとは思ってないが、無傷でいられるとは思わない。

そのとき、ソウリールが闘也に向かって突っ込んできた。なんとかかわした闘也はその光景に気がついた。向こうにも、ソウリールの分身がいる。ということは……。

「あんたも魂ソウルの能力を使えるのか」

「お前にこの能力を教えるくらいだ。教える側が使えないわけないだろうに」

ソウリールがビームソードを横から振ってきた。闘也は片方の剣でそれを受け止めた。そして、もう片方の剣でソウリールを斬りつける。ソウリールは僅かにうめき声を上げ、後ろに下がった。闘也はこの期を逃すまいと、ソードをガンに変えて、弾丸を撃ちだした。至近距離で撃ちだされた弾は見事にソウリールに命中した。

「そこっ！」

闘也はハンマーに切り替え、ソウリールに突っ込み、腹部を殴りつける。ソウリールがよろめいたところにもう一撃を加える。闘也は、ハンマーを再び剣に変える。

「これでええっ!!!」

闘也はその剣の刃先をソウリールに向かって突き出した。何の躊躇も迷いもない。ただ一心にソウリールを倒すという思いで戦っていた。

しかし、その思いもむなしく、軽々と頭をよけられた。この程度はかわせるということか。

ソウリールは、この攻撃を一番のチャンスとみたのだろう。再びキックして闘也を自分から遠ざける。闘也は再び突っ込む。だが、すでに見切られていたのだろう。軽々とかわされ、ビームソードを頭上から振り下ろしてきた。

「まだまだ！」

闘也はスティックに変えて、腰の辺りに下ろされたビームソードを受け止めた。だが、その腰以外は無防備な状態となっていた闘也にとって、このままはやばかった。もちろん、そのすぐ後に反撃が来た。腹に膝蹴りをいれられる。体を起こされて、その拳で殴りつけてくる。闘也がよろめいているところに、ソウリールがビームソードを振り下ろし、闘也の腹部を斬りつける。深くはないが、焼け付くような、今までに味わったことのない痛みに負け、闘也は仰向けに倒れた。追撃を食らうまいと、ツインガンを作り出し、仰向けの

態勢のまま、ソウリールに向かって撃った。

撃ちだされた弾は見事に命中した。もう闘也もソウリールもかなり体力を消耗していた。闘也は、分身している魂を戻す。ソウリールも、自分の分身を戻したようだ。

次が最後だ。

闘也もソウリールもそう感じていた。次の一撃で全てが決まる。

闘也は片手持ちの剣を両手持ちにした。ソウリールも走り出す準備をしている。二人が睨みあう。闘也が走り出した。それとほぼ同時にソウリールも走り出した。魂剣は、黄色い魂の色を帯び、持ち主の感情に応えまいとしている。鬼光剣はその輝きをいっそうまし、持ち主のために全力を尽くそうとしている。それぞれが剣を振り上げ、それを目の前の敵にあてようと振り下ろした。闘也とソウリールがすれちがう。

一閃。その言葉が似合うような光景だった。お互いの表情は固くなっていく。そのうち、片方の表情が、敗北の表情を浮かべ、倒れる。

しばらくの時間が過ぎた。ソウリールが、まさしく敗北の表情を浮かべてゆっくりと前に倒れていく。それと同時に、生命力を象徴していたかのように、ビームソードの光が消えかかる。

そのとき、闘也の心から憎しみの感情がその瞬間だけ抜け落ちていた。倒れた父を振り返る。もうほとんど動かない。ようやく肩で息をしているといったところだ。

「ソウリー……ル……父さん……」

闘也はソウリールの元に駆け寄る。自分が父を殺したというのが、世間からの目。息子が憎しみという感情を武器に父親を殺害したという世間の目が自分を見ていたような気がしたが、今闘也の中に渦巻いていたのはそんなものではなかった。

「父さん！ 父さん！！」

闘也は必死に叫ぶ。もう戻らないとは思っていた。それに、生き返ってもいいことはない。

「とう……や……」

「父さん……」

ソウリールは最後の力を使ってその口を開いた。ひどく息が荒れている。

「こんな……俺でも……かなえられる……  
ことを……ひとつ……かなえてやる……」  
「じゃあ……」

闘也は、なるべく無理をさせまいと、すぐに口に出した。

「父さんの名前を教えてくださいよ……」

もう、本人以外から名前を聞き出すことができる人はいない。

「俺の……本当の……名前は……ソウリール……エスパー……すまないな、闘也……  
……おまえもっ……」

そこで会話が途絶えた。ビームソードが、持ち主の命の消滅に呼応するようにその光を消す。すでに闘也の頭は真っ白で、ただ叫ぶことしかなかった。

「うおおおおおおおおおおおお!!!」

力一杯闘也は叫んだ。もう息が戻ることはない人間が目の前にいる。それだけでも胸が苦しくなる。ましてや、それが自分の父親だということとは、もう何も考えられない。

闘也を包んでいた電膜が消滅する。ソウリールが死んだからである。乱州達が闘也に駆け寄る。闘也の目からは涙があふれ、頬をつたって下へと流れていた。

「闘也……」

乱州は、心配するように闘也の名前を呼ぶ。返事はない。ただ一人の男の前で泣いていた。もう彼に、血の繋がった者はいない。闘也はこれから一人で生きていく。たぶん、それは可能であろう。闘也

は、戦闘的などころだけでなく、精神面でも、他の人よりずっと強い。たぶん大丈夫だろう。

乱州達は、ただ黙って、闘也のそばにいた。こうすることが、今自分達にできる、最良の行動のはずだと信じ、そうし続けた。

日本領空、炎天より南に五十キロ地点を、エスパ―01が飛んでいた。その中には、ソウリールが残したエスパ―達が未だに居続いていた。そして、その時に知らされたのが、ソウリール 彼らの指揮官の死であった。

エスパ―01の乗員達は、皆、嘆き悲しんだ。もう自分達を率いてくれる者はいなくなつた。もう自分達は終わつたのだと思つた。

『何ヲグズグズシテイル!』

嘆き悲しむエスパ―達の後ろから、機械音声が聞こえる。振り返つたエスパ―達の目の前には、機械があつた。

「おい!あれつてもしかして……」

「ああ。「ESP」が作つた軍兵生産機、ルシーラじゃないか」

ほとんどのエスパ―がそれに驚いている。ルシーラという機械は、自立神経を兼ね備え、自らの意思で行動することができるとは知らなかつたからだ。だが、そのうちの数人のエスパ―は、驚いているエスパ―を怒鳴りつけた。

「何をしているお前たち!この方は新しい指揮官、ルシーラ様だぞ!」

「はあつ!? 何を言っているんだ。お前は!」

「ソウリール様は、戦闘出発の前に、もし自分が死んだときのために、遺書を残されたのだ。それには、新たな指揮官をルシーラに任命すると書かれていた。その遺書を今私が持っている」

そういつてそのエスパ―は、一枚の紙を取り出し、順々にエスパ―に見せていった。確かにソウリール様の字だな、と納得したものがほとんどだった。そして、その意味を理解した者はすぐにルシーラに向かつて敬礼した。

「ではルシーラ様。最初のご命令を」

『ウム。マズハソウリールノエスパ―エネルギーヲ回収シロ』

「ルツ、ルシーラ様!？」

『ドウシタ』

「ソウリール様を呼び捨てにするのですか!？」

『モウ死ンダ者ダ。ワザワザ様付ケスル必要ハナイ。文句ガアルノ力?』

「あ、い、いえ! 失礼しました」

その間にも、他のエスパ―はソウリールのエネルギーを集めた。

「ではこの後はどうされるのですか。ルシーラ様」

集め終わったのを確認して、一人のエスパ―が話しかけた。

『・・・・・・・・』

「ルシーラ様?」

『・・・・・・・・死ネ』

そういつてそのエスパ―を腰に装備していた剣で刺し殺した。

「ルシーラ様・・・・・・・・何を・・・・・・・・」

そういつてそのエスパ―はエネルギー体となる。

『貴様ラモ死ネ!!』

そう言つと、次々に殺していく。エスパ―のほとんどは、ルシーラの行動に驚き、その驚愕に体を硬直させたままに死んでいったが、中には応戦体制を取る者も少なくなかった。

斬りかかってきたエスパ―の剣を弾くと、その首筋に剣を滑らせる。背後から銃弾を浴びせられるが、そんなものは、特殊な合金で守られたルシーラの装甲を貫くことができるはずがなかった。

『無駄ナ足掻キダ!!』

ルシーラは左腕に内臓された銃から弾丸を連続発射して薙ぎ払う。最後の一人が消え、そのエネルギーが回収されたころ、ルシーラはぼそりと呟いた。

『ソウリール。少シバカリ早く作戦ヲ決行スル。許セ』

そういつて、ソウリールの自室に入ると、赤いボタンを押した。そ

の瞬間、警報アラームが鳴る。退避の命令だ。このボタンを押せば自動でそうなるのだ。まもなくこの船も爆発し、そして……。

『完全ナル復活ヲ……』

その瞬間、船は爆発し、一人の男がそこから出てきた。

その男の瞳は殺気に満ちていた。

## 24、最終決戦

ソウリールは、ある作戦を考えていた。それは、自分一人ではどうあっても成功させることができないことである。そのために、ニワダやゲルガー、ガルラにも協力を仰ぎ、ルシーラも完成させた。ソウリールの死後、その作戦は、ルシーラへと受け継がれ、ルシーラはその作戦を成功させた。ソウリールの作戦。それは……。

「エスパーの血を色濃く受け継ぎながらも死んでいったエスパーの神とも言える存在。自分達を生み、多くのエスパーを生み出した男。自分の父である一人の男を復活させるためだった。」

その男の名は、キラール・エスパー。

その男をととう復活させたのだ。今までソウリールがエネルギーの回収を続けていたのは、このエスパーを復活させるためのエネルギーを集めるためだった。もとより、四天王や八幹部は、彼によって生み出された。ソウリール達はキラールの『息子』であるために、そのエスパー生産能力という遺伝子を受け継いで生まれてきた。キラールはゆっくりと空中を進み始め、闘也達の下へと進み始めた。

闘也は、すでに形もなくなったソウリールから目を放していた。もう何もすることはない。全てが終わったのだと感じていた。ソウリールとの決着から、かなりの月日がたった。ソウリールの死後、炎天におけるエスパーの進攻はほぼ完全に収まった。各地のエスパーもまた、ソウリールの死の報告を受けると、自ら命を絶つか、降伏するか、逃げ出すかのいずれかがほとんどであった。

どこか無力感に苛まれたまま、闘也達は未だに蔓延っているであ

ろうエスパー捜索のために動き出した。しかし、その姿はここしばらくそうであつたように、全く見なくなつてしまつた。

そんな静寂と平和が破られたのは、ソウリールとの対決から一ヶ月近く経つてからだつた。

「闘也、あれは……?」

乱州の声に振り返つた闘也は、その方向を見て目を細めた。

光を放つ人間が空を歩いている。彼は闘也達の前に降り立った。かなりのエスパー反応。軽い頭痛がする。それほど強力なエスパー反応だつたのだ。

「俺はキラール・エスパー。ソウリールの協力により、復活した」

だれだ、こいつは。それが率直な感想だつた。あまり考える気力はない。敵であることは間違いない。だが、こいつはソウリールの協力でと言つた。ということは……。

「俺はソウリールの父だ。そして闘也。お前は俺の孫だ!」

孫……つまり、血が繋がっている。エスパーの祖父と父ということ……まさか、俺は……。

「闘也。お前もエスパーだ!!!」

自分もエスパー。その一言が頭に強く響いた。

闘也……おまえも……。

一ヶ月前のソウリールの最期の言葉と、目の前の男の言葉が重なる。そんな闘也に構わず、キラールは話続ける。

「だが、お前は自らのエスパーの血を、自力でサイコストの血へと変貌させた。だからこそ俺達の敵となつた」

俺に……そんな力が……。

「だが、世界を統べるのはエスパーなのだ。サイコストではない!」  
「違う!」

闘也は叫んだ。その目はキラールを睨みつけている。その瞳には、決意があふれていた。

「本当に世界を統べるのは、サイコストでも、ましてやエスパーでもない!」

闘也の言葉に、キラールが反論する。

「なら、誰が続べる？」

キラールの問いかけにも、闘也は動じていなかった。この戦争の中で、闘也はその答えを導き出していた。

「たった一人でもいい。人の話を聞き入れ、それを世の中で提案していく力を持った「人間」なんだよ!!!」

闘也は覚醒した。黄色い魂の色が闘也を包む。もう、闘也の目に迷いはない。いままで自分の父親であるソウリールを倒すのが目的だった。だが、今は違う。戦いが生んだ力は、何者も従うことはないということ、エスパーに教えなければならぬ。それが、サイコストでもあり、エスパーでもある自分の使命のはずだ。

「戦うのはお前だけじゃないぜ、闘也」

闘也は後ろを振り返る。そこにいたのは、ともに戦ってきた仲間達だった。自分は一人ではない。一緒に戦ってくれる仲間がいる。五人とも覚醒していた。

「うおおおおおっ！」

キラールはさまざまな属性の玉を撃ちだした。かなり大きな玉だ。よけきれそうにないか。

しかし、その玉は途中で何かに飲み込まれた。黒い物体が目に見える。さらにその後、何者かが、すばやい動きで自分達と全く同じ人間を作り出し、それをキラールに向かって突撃させている。

「おう、野郎ども！あのイカれた爺をぶつとばすぞ！」

え！？あれは黒い三彗星！なぜここに！

「お前ら………なんで………」

そんな五人の共通の質問をぶつけた乱州に、リーダーの黒田が答える。

「サイコスト協会とやらで、人工的にサイコストに細胞を改造する改造超能力者計画つてのが行われてて、それに俺達は参加したんだよ」

「守られっぱなしは俺達の………彗星の血が騒ぐんだよ！」

黒田に続き、黒岸も付け加える。さらに黒谷が、能力説明をする。  
「リーダーはブラックホールの力を転用して移動する黒動、黒岸はブラックホールの力を逆にして、放出しながら攻撃する黒撃そして俺はブラックホールの能力をそのまま使った黒吸の能力をもっている」

「無駄話はそこまでのようだ」  
闘也が三人を戒める。キラールが再び球体を飛ばしてきた。しかし、それは別の闘也達に当たる。あれは偽者。ということは……。

「兄貴！」

乱州が叫ぶ。偽者の能力を持つ明文も援護に来たようだ。明文はにつと口元で笑みを作ってこちらに視線をやると、すぐに目標へと視線を戻す。それと同時に黒い三彗星が融合する。

「カスタムは、融合もできるんだよ！」

そこから黒岸を先頭にしてその能力を使い、ブラックホールを逆流させて、飛び出させた。その瞬間融合は解けた。そう。黒岸は融合を瞬間的に戻すことで、自分も吹っ飛べるようにしたのだ。三人はキラールに向かって飛び出す。

「まずは俺が！」

そう言つて黒谷はキラールをブラックホールに吸い込んだ。そして、黒岸の目の前に逆放出した。そこに黒岸のパンチが決まる。かなりの衝撃だったのだろう。動きが鈍る。

「まかせろ！」

そこに、リーダーの黒田が突っ込んでくる。黒田は何度も移動してキラールの目をくらませた。明文がさらに黒田の偽者を作り出す。もちろん、偽者も能力を使い、移動している。本物を見極めるのは難しいだろう。そこに本物の黒田が背後から殴りつけた。そのまま逃げようように地上に降りてきた。

「こういふのを、一撃離脱戦法つて言うんだぜ」

聞いたことがある。一回攻撃したら、追撃せず、距離を取って、す

ぐに反撃されないようにする戦法だ。

皆、がんばっている。どんな理由であれ、何かのために戦っている。家族、友、仲間、自分、町……。

黒田の目の前にキラーが接近し、黒田を斬り付ける。先ほど攻撃した黒田を狙っていたのだ。黒田は背中中に切り傷を負う。

「この野郎！」

黒田が振り返ってブラックホールへと消えるとキラーの正面へと躍り出て、右拳を構える。

「攻撃が大振りだ」

キラーがその黒田を弾くように左手の剣で薙ぎ払う。それと同時にキラーの背後から黒岸が躍り出るが、右手の剣で黒田の二の舞を演じる。

「てめえ……只で済むと思うなよ！！」

黒谷がブラックホールを構える。キラーを吸い込むつもりであろう。しかし、キラーはその顔に不敵な笑みを浮かべると、黒谷へと告げた。

「戦う時は周囲に気を配れ」

告げられた黒谷の後ろには、僅かに白みがかったキラーがいた。この能力を使うことができる。これはもう、闘也やソウリールとの血の繋がりを象徴するものである。

魂<sup>ソウル</sup>。

黒谷が振り返ると同時に、キラーの魂が黒谷の両腕を切断する。

体のバランスを失った黒谷は、そのブラックホールを消滅させ、仰向けに倒れる。

「ちっ……数が多くてもこれは無理か……」

そう毒づいた明文へと、キラーの魂が剣を投擲し、その肩を切り裂く。キラーが直進型雷の発射体勢に移る。それを見た乱州が飛び出す。

「兄貴いつ……！！」

乱州は明文とキラーの間に割り込むと、その腕に装備された盾を構

える。乱州はどうか雷からは明文を守りきつたが、予想以上の電圧に膝をつく。

「乱州!!!」

闘也が叫ぶと同時に、的射へと炎の弾が発射される。

的射は水の弾を作り出してそれを発射する。一発目を破壊すると同時に起きた水蒸気爆発の爆風に一瞬怯んだ的射へと、二つ目の炎の弾が迫った。

的射は二つ目の水の弾を作り出したが、それは目の前で水蒸気爆発を起こさせる要因となってしまう。水蒸気爆発の爆風を諸に受けた的射が吹き飛ばされる。

「的射!!!」

次いで由利に水球が迫る。由利は水に対しての雷の壁を作り出す。

しかし、その雷の防壁をも突き破った水球は、不幸にもその雷の効果を纏いながら由利に直撃した。由利が大した時間を掛けずに振り払うが、その勢いが大きすぎた故に、両膝と両手をつく。

「由利!!!」

その後、黒い三彗星を吹き飛ばそうと風を吹き付けてくる。秋人がそれに対抗して風を吹き返すが、その風に負けて秋人は空中に吹き飛ばされる。そこに真空刃が襲い掛かる。そのうちのいくつかは、秋人の高速の能力で回避に成功するが、更に追撃してきた真空刃に右足と左腕を突き抜けられる。幸いなことに、対してその傷は深くないが、その威力は計り知れない。

「秋人!!!」

最後に闘也に向かつて大量の岩石が投げつけられた。闘也はツインソウルソードを構えて対抗しようとしたが、強固な岩石を破壊するには、剣では余りに貧弱すぎた。

「くっ………!!!」

闘也を大量の岩石が押し包む。

「闘也ア!!!」

「闘也!!!」

自分を呼ぶ声がする。そうだ。まだ誰もこの戦いを諦めてはいないのだ。闘也はソウルハンマーに切り替えると、それに思いを乗せて岩石を吹き飛ばす。

「乱州、的射、秋人、由利。五人で融合するぞ」

闘也は四人の方を向いて言った。この一撃で、決める。終わらせる。本当の終わりなのだ。五人は、闘也を先頭に融合する。そして、キラからそれなりの距離をとり、剣を作り出した。その剣はどんどん大きくなっていく。由利が先頭に出て、話す。

「大地の怒りを秘めた刃」

すぐに秋人に切り替わり、秋人も口を開く。

「幾億も切り刻む刃」

さらに的射が先頭になり、

「どんなものも捉える刃」

乱州が、的射の次に話し始める。

「悪しき者を一振りで打ち抜く刃」

闘也が先頭になり、決意をこめるように叫ぶ。

「その刃!!! 我にありっ!!!!!!!!!!」

かなり巨大な剣ができる。巨大なため、乱州の剛力となる体にしてその剣を持った。五人が一斉に叫ぶ。

フルキガントソウルソード  
「超重魂剣!!!!!!!」

その剣を頭上からキラに向かつて振り下ろす。キラは必死にかわそうとしていたが、その巨大な刀身と秋人の能力によって高速で降られる剣に対処できなかつた。キラがその光景に息が止まる。

一瞬のうちに、キラの頭頂部へとその剣先が触れる。真つ二つにした感覚が一瞬あった。さらに横から斬り、すぐに斜め上から斬る。キラは最期の言葉を言うことも、最期の息をすることも叶わぬままにその体を切り刻まれた。

終わった……戦争が……。

闘也達は、全てを悟った。そして、サイコスト協会に足を運び、

勝利報告をした。

全ての元凶であるキラーがやられたことによって、未だに諦めずに戦い続けていた各地のエスパーも撤退した。戦争にサイコストは勝ったのだ。沢山の犠牲を出し、嘆き、悲しみ、喜び、怒り、様々なことを経験することになったこの戦争を、闘也達は生き抜いたのだ。

「帰ろう。帰るべき場所へ」

闘也は、一言そう言った。

## 25、超能力戦争、終結

あの戦いの後、エスパーからは、鬪也を指揮官にしてほしいと頼まれた。そして鬪也は、快くそれを承諾した。そしてすぐに、終戦協定をサイコストと結んだ。だが、すぐに指揮官の場を離れた。だが実際、表向きはまだ指揮官をやっているということになっている上に、鬪也の更なる政治を、エスパー達は求め続けていた。鬪也がそれに応えまいとしていたのは、誰の目からも明白であった。

戦争の終結後、日本各地で、復興作業が開始された。食料が少なিদらうと、アメリカから食料等が送られてきた。そして、戦争終結から二年、炎天は見事復興し、戦争前の活気を取り戻した。

ちなみに、二年後ということで鬪也達は中学三年となっていた。日本の政府から、全国の中学三年の高校は、好きなところに入れるようにしてくれた。さらに鬪也達には特許が与えられ、各自が優先的に学校に入れるようにしてくれた。

鬪也は、山の上で、振ってくる雪を眺めていた。今は、二〇一一年二月九日。戦争終結から、二年と数日の月日が流れている。受験勉強もする必要のない鬪也達は、各自がゆっくりと過ごしていた。つい数日前まで、自分達も復興作業を手伝っていたのだ。それぞれが疲れていた。ふいに後ろから声をかけられる。

「乱州……」

そこには、相棒の姿があった。復興作業以来、顔を見てなかった。

「よくここが分かったな」

「そりゃあな。お前、親がいないから児童施設に入れられんのがいやでここで住んでるんだろ」

「それはまあよくご存知で」

日本では、親のいない中学三年以下は児童施設で住むことになっている。だが、鬪也はそれを拒否した。毎日、血のつながりのないものと一緒に住むのはごめんだった。だが、もう二ヶ月で、それも終

わる。高校生になれば、勝手にアパートでもマンションでも一軒家でも建てて住めばいい。だからこそ、我慢していた。こんな生活は苦痛ではなかったが、居心地はあまりよくない。

「そっぴやさ、お前高校どこ行くか決めた？」

乱州が聞いてきた。確かに、あと二ヶ月で高校にいかなければならぬ。そのために決めておいたほうがいいだろう。いろいろと準備も必要だ。

「お前はどうすんだ？」

「俺は……中央に行く」

「中央か……」

「あそこさ、ここからもそう遠くないし、それなりの成績でも入れるらしいぜ。俺も、親からはそこが限度だって言われてさ」

「はっ。じゃ、俺もそこにすっかな」

「おっ！じゃあ、そこにしますか！」

「ああ。これからもよろしくな！ 乱州！」

闘也と乱州は、互いの顔に笑みを浮かべたままに、軽く拳をぶつけた。

そんなことがあった二カ月後、闘也と乱州は炎天中央高校に入学した。中央には、的射と由利も入ると言っていた。だが、秋人は、あんたにはレベルが高すぎると親に言われ、仕方なく、ここより下のレベルの学校に入学したようだ。

入学式の朝、闘也は、乱州とともに中央高校へと向かった。この中央高校は、人気の高い学校で、炎天各地から生徒が集まってくる学校だった。

「川田翔太……菊池健太……魂波闘也」

一人ずつ生徒の名前が挙げられてゆく。その中でも闘也達の名前が出てきたときは、歓声が上がった。それほど名が知れたのだろう。

驚きはしなかったが、当然だとも思ってた。その入学式の後、五クラスある中で、的射が一组、由利が三組、そして、闘也と乱州

が幸運にも同じ四組だった。

そんな入学式から数日後、乱州が日直だからと言って、日誌を取りに行ったため、鬪也はついていった。職員室まで少しあった。その途中、一人の少年の姿が目に入った。

「もしかして、鬪也……？ 炎天北小学校の」

少年は驚いたようで、自らが鬪也に対する言い方を間違えたことを悔やむように齒軋りしていた。

「小学校？ まあそうだけど……」

ここからは、あの少年の物語となっていく。どうやら、俺とあの少年は、同じ小学校だったらしい。記憶の中に彼を見つけた。名前は……思い出せない。だが、すぐ思い出すだろう。

あの少年はサイコストだ。オーラが出ている。たぶん、カスタムではない。

戦いは終わった。だが、もしかしたら、また始まるのかもしれない。けど、そのときまでは。きっと、平和な時間が流れるはずだ。

それが、鬪也のした、誰にも分からない、小さな推理だった。

少年が、その目つきを鋭くして自らの名前を告げた。

その時からまた、鬪也の時間は流れ出した。

桜の花びらが、風に流れていた。

## 25、超能力戦争、終結（後書き）

皆様、最後までご愛読いただき、まことにありがとうございます。少しばかりお時間をいただいた後、新しく投稿していきたいと思えますので、

何卒、よろしくおねがいます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9895p/>

---

未来少年

2011年2月17日12時23分発行